

北辰會雜誌

第六十七號

大正二年六月三十日發行

(非賣品)

第四高等學校北辰會

北
辰
會
雜
誌

第
六
十
七
號

内 容

越後油田視察記	………	(一)	伊原生
北國(懸賞入選)	………	(二四)	中平政雄
ふたりの君に	………	(三四)	日色瑪尼
水の上	………	(四九)	鳴澤生
仁和寺	………	(五九)	佐藤濤聲
三宅雪嶺博士講演	………	(六〇)	
四高短歌會詠草	………	(六五)	
屑籠より	………	(七二)	白汀生
紫の花	………	(八三)	佐藤曙汀
山川九州帝大總長講演	………	(八四)	
三畏齋贍稿	………	(八九)	赤井直好

敗人	………	(九〇)	秋月木瓜
食論	………	(九二)	閑野生
四高俳句會句稿	………	(九九)	
二元紀行	………	(一〇二)	平泉寺經岳
暮れゆく空	………	(一〇九)	横湯生
高峰博士講演	………	(一一一)	
一週間	………	(一一四)	白壁生
北國(懸賞入選)	………	(一一七)	井口長三
桐の花	………	(一三五)	しげる
本校創立記念式	………	(一三六)	
卒業生送別會記事	………	(一三六)	
行軍日記	………	(一四二)	
各部部報	………	(一四六)	

越後油田視察談

伊 原 生

小引 四月一日程を金澤に起し、同夜新潟縣長岡市に着、爾後四近の油田を訪ひ跋渉數日、具さに偉大なる自然力を味ひ、同月七日歸澤せり、左は其探查せる所に從ひ所見の一斑を述べしものなり。

緒言 石油とは諸系屬の炭化水素諸種、樹脂様有機物体、硫黃の有機化合物等を含有するものにして、尙酸素、窒素、硫黃等或化合物狀態に於けるもの及塵、泥、水分等を有す、故に實用に供するには之を蒸溜精煉するものとす、其採取せるまゝにて精製の手順を経ざるものを原油と云ふ。抑石油の天然に現存するものは通常液体にして、其濃度を異にし水の如きより飴の如きに至り其色亦區々にして淡黃褐色より黒色に至る、而して殆ど全く地下に伏在し偶々其一部地表に現はるるものありて古代より人に知られ「アッシリア」及「エジプト」時代に於ては飴狀のものを建築石材の漆喰として用ひしと云ひ、我國にては 天智天皇の御宇燃ゆる水を獻す云々の記事古史に見ゆと聞く、然れども之を工業的に採掘精煉するに至りしは極めて近時の事にして、米國にては即ち千八百五十九年始めて「ドレーキ」氏の新案になれる鑿井法起り茲に新紀元を開きて今日の年額數億圓の一大鑛業となるに至れりと云ふ、我邦にては維新前より僅かに數石の石油を採りし者あるも其一大發達をなせしは明治十九年米國式鑿井法を應用せし時に始れりとす。

含油層及石油の根原 石油は地質學上、石炭紀層(屬す太古代に)及第三紀層(屬す近世代に)に最多く存在し、北米合衆國東部の油田は前者に屬し露國「バクー」及我邦の油田は後者に屬す。

石油生成の根原には無機説、動物説及植物説等ありて夫々產地により相異なるものゝ如しと雖も、就中海生動植物の分解によりて生じたるもの最も多し、是れ石油の殆んど常に鹹水と相伴ふ所以なりとす、無機説とは「金屬の炭化物は水の作用により炭化水素に變化しアルカリ金屬は炭酸瓦斯に飽和されたる水に接觸する時炭化水素となる」てふ學術的發見に基くものにして、地球内部の熱は、後に滲透せる水に依て分解さるべき炭化物を生ずるに足り、又其後炭化水素瓦斯が冷却せる層に達すると液体となり凝結すべき事は想像に難からず、彼の火山の瓦斯中に炭化水素の存在せる事は此説にて説明する事を得べし、有機説に關しては化學者は動物質或は植物質を密閉せる「レトルト」中に煮るか或は空氣の供給なき所にて腐敗せしむれば石油或は天然瓦斯に似たる液体或は瓦斯成生物を得る事を證明せり、茲に於てか泥深き水に埋れる動植物質より物理的、化學的の力によりて含油層が形成せらるゝ事こそ本來の原因ならん、同様に油を含有する石灰岩は海中沈澱物にして即ち貝殻は石灰岩の基にて動物質は油の基なるべし。

越後石油鑛區岩質並に油田地下増溫率 越後油田は信濃川平野をへだて、東西相對峙する第三紀層の山地に存し、新潟縣下南北中西の四浦原郡、古志、三島、刈羽、中魚沼、東頸城、中頸城の十郡に涉り、之を構成する地層は悉く第三紀層上部に屬する砂岩、粘板岩、砂粘土互層、礫岩、石灰岩等よりなる。

由來石油地方に於ける地下増溫率の大なるは世界各油田地皆其轍を一にするは爭ふ可からざる事實にして、越後油田に於ても攝氏一度を上昇するに深度二十六米突を要する事は先に農商務省地質調査所にて行へる地熱測定の結果明かにせられ、同時に該油田地方には局部的熱源の存在する事も確定せられたり、是れ本邦石油研究上大なる暗示を與ふるものにあらざるなきか、此増溫率の變化即ち石油地方には必ず一度の溫度を増加するに要する距離の小なるは何等の源因に基くものなるかは甚大なる問題にして精細なる研究を待ちて始めて解決せらるべきものたるのみならず多數の異なる油田地方に於ける同一現象に對して同一説明を以て解決し得るや否や頗る疑問に屬す、換言すれば本問題は石油の起源と密接なる關係を有するものなるべし、越後油田に於ける地熱に關して一技師の考を述べんに、抑鑿井技術者は種々なる説を唱ふるも何れも一小部分的の經驗に過ぎずして全般に適應すべくもあらず、且つ多くは憶測に止り確たる證據を有するにあらざるを以て同地方の高温なる地熱が果して何等に歸因するものなるか推定に苦しむと雖も石油其物に熱源ありとなすものは鑿井結果に徴して有力なる一説なるを思はしむ、越後油田を通じて鑿井中油層に近くや熱氣を増加し工夫等をして「熱が増すと油が出る」との確信を抱かしむるに至れりと云ふ、或鑿井技術者は之に關して説をなして曰く「石油其物は特に熱を含有するに非らざるも油層に近く時は堀鑿水を用ひず故に「ツールス」の上下によりて生ずる運動熱は悉くビット及周圍の岩石を温むるに消費せらるゝにより高温を示すものなり」と「又手堀井内に此感あるは空氣の流通惡しきと石油瓦斯の臭氣と多少地下熱の存在とに一種の眩惑を來たし石油其物に熱度を含有す

るが如く感ぜしむるものなり」と説けりと云ふ、然れども石油層を豫想せざる坑内にても、油層に近くときは熱を感じ且手堀井より汲上げたる油の検温の結果を見るも石油其物に地熱以外に多少の熱度を有することは疑ふ可からざるが如し、或人は石油地方の地下増温率大なるに就き其原因を石油の化學的作用に歸して「石油の地下に於てポリメライズするや熱を發生し隨て石油所在地方は一度の増温に對する深度普通の場合より小なり」と論せりと雖も、之を越後油田に見るに油層として見るべき含油層の含油區域及其厚さを計算するに意外に狭く且つ薄きものにして之に含まるゝ石油のポリメライズすることによりて生ずる熱量により高温に温めらるべき非含油層とを比較するに到底かゝる微々たる化學熱の結果として此廣大なる地域を現今見るが如き高温に導きたりと想像するを得ず、殊に石油成生後造山力の爲め地層錯亂し多くの龜裂斷層等を形造りたるにかゝわらず長年月間化學作用により生じたる熱を地層中に抱藏せるものとなすは早計の嫌なきにあらず、茲に於て予思ふに其熱源或は火山作用にあるなきか、即ち越後油田の殆んど凡てに於て高温度の温泉又は温水に會遇するは世人の善く知る所にして新津、頸城油田は其著しきものなり、又石油採取の目的にて掘鑿されたる坑井にして含油層に相當すべき地層に於て熱水に會したること珍らしからず、殊に越後油田近傍には現に火山の伴へるを見るのみならず新津油田に於ては安山岩中より採油しつゝあるものあり、又含油層は多く火山噴出物たる浮石を交へ居るを見る時は、少くも石油成生時代と火山噴出時代とは密接なる關係あるを見るべし、從て石油成生と火山作用とは連絡ありて以て石油地方にては地下温度大なるものか、よし又此兩者間に何等直接

の連絡なきも石油成生後火山作用の影響を受け其熱を含蓄しをるが爲めに地下温度を上昇せしめたるなきかの憶測を禁する能はずと雖も不幸未だ之を論斷するに確たる證例を有するにあらず、畢竟越後油田に於ける地下温度上昇は更に今後の研究を待ちて解決を下すを得るのみ、とは實地調査に基くざる技師の意見なりとす、茲に參考として擧ぐ。

石油の採掘 石油を採掘する方法種々あり、米國にては主として綱索に據る衝擊鑿井法を用ひ又水壓廻轉法を用ふる所あり、露國にては角鐵と連接して綱索に代へ加奈陀にては更に代ふるに木桿を用ふと聞く、我邦にては最多く行はるゝものは前記綱索鑿井法、上總掘及手握の三種とす、上總掘は本邦に於ける特殊の方法にして先づ約方三間高八間乃至十二間の櫓を建て其一方に汽機室を連設す、櫓の一端には大柱を立てゝ是に槓杆を垂架し槓杆の一端は汽機に據りて上下動を受くべく裝置し他端には綱索を固着し其綱索下部に掘鑿錐を連ね之をして其上下動により地層を衝擊し坑井を穿たしむ、其破碎したる土砂は水にて泥狀となし唧筒を用ひて坑外に汲取るものとす、掘鑿の進行するに従ひ坑側土砂の崩壊或は地下水の迸出を防止する爲め其坑井の大きさに對する鐵管を挿入す、鐵管の内徑は通常十二吋半、十吋、八吋、五吋八分の五、及四吋四分の一等なり、掘鑿進行して遂に含油層に達する時は石油は坑内に湛溜し時としては自ら櫓頂に噴騰することあり、前記の場合には通常下端に唧筒裝置を有せる二吋鐵管を坑底に降下し更に該管内に汲取桿を下し之を前記槓杆の端に固着し其上下動によりて坑口に石油を汲上ぐるものなり、掘鑿事業中往往坑側の土砂突然崩壊して掘鑿錐を押へ或は綱索切斷して錐を坑底に膠着することあり、斯る場

合には豫め此に備ふる種々の採揚具を使用し之が復舊の處理をなす。

以上の外最近越後に於ては機械掘の一種にしてロータリー式掘鑿法なる方法を輸入し現に之を以て非常に良好なる結果を收めつゝあり、該式の主要なる点は掘鑿錐が水平面内に廻轉しつゝ衝撃を與ふるにあり。

油層の深度及び油量の多寡は殆んど一定せず、其油層は相重れるもの多く第一油層に於て石油を汲取り已に盡きたる後該油井を掘下げて第二油層に達し茲に再び採油するものあり、更に第三油層を鑿つものあり各國共に然りとす、我邦にては西山油田(三島郡)の如き更に數層を有するものあり。

井深は機械設備上及經濟上三千尺以上に鑿つもの寧ろ少數にして通常二千五百尺以内とす、一油井より得る油量は其始め日額數萬石に達するものあるも寧ろ稀にして日本にては新津油田(中蒲原郡)瀧谷地方に於て日産二千石以上に達せしを最多量とし通常五十石以下なりとす、而して漸く減じて二十石乃至十石となり以て數年間の生命を保つも不幸にして始めより全く石油を見ざるの坑井亦必無とせず。

手掘井は口徑大なるを得るも成功期間の長きと深度の九百尺以上に達し得ざるの憾あり、上總掘は或場合にては深度千五百尺以上に達したるものありと雖も地層の軟質なるを要し通常一千尺を程度とす、此方法は不完全なるを免れざるも經費の小なるが爲め新津油田には盛んに之を用ひつゝあり。

以上の方法により晝夜間斷なく掘鑿採油の事業を經營し、其原油は鐵管又油槽車を以て附近の製油所に配給しつゝあり、即ち油井より汲取たる原油は之を鐵槽に収容す、鐵槽の大きさは大なるは數萬石に達し數千石數百石を容るゝものあり、或は產油の多量なる地方にては土堤を築きたる瀦油地を用ふるものあり、其容量は大なるを常とし數百萬石を容るゝに足るものありと云ふ。

原油の運搬は各石油製造品の運搬と等しく多くは鐵管を用ひ自然流通をなし或は唧筒にて押送す、遠隔の地に輸送するものは油槽車を用ひ湖海には油槽船を使用す、我邦にて油槽船は數艘を數へ油槽車は五百車以上あり、送油鐵管は概ね十六吋より四吋迄にして尙之より小なるものをも使用する事あり、而して其延長寶田石油株式會社所有の一幹線二十餘萬尺に亙るものありと云ふ、產油地方以外に碓氷峠には延長三萬五千尺の鐵管線二條を架し送油に便するものあり。

製油 已に述べし如く石油は諸系屬の炭化水素諸種、樹脂様有機体、硫黃の有機化合物を含有するものにして、之を蒸溜精煉して揮發油、燈油、各種機械油、石蠟、ピッチ、コークス等となす、今寶田會社に就て之を見るに其製油所を長岡、柏崎、新津、沼垂、新潟、横濱、高田、相良、苗栗、金津、椿澤、長嶺の十二ヶ所に設け何れも大小數十臺の蒸溜釜を裝置し各種の燈油、輕油、並に礦油を製造し猶長岡製油所及横濱製油所に附屬する製罐所には一ヶ月二十萬圓以上の製造力を有する最新式機械の設備ありて所要の石油容罐を製造す。

蒸溜釜は其初め鑄鐵製の小なるものを用ひし由なるも現時にては鍛鐵板を銲綫して製したる横置圓筒形の大なるものを用ひつゝありて其普通なるは五百石乃至八百石入なりとす。

原油を釜中に於て熱するや、燈火用として用ふることを得ざる高級の炭化水素も加熱の狀勢によりて自ら分解して低級の炭化水素に變化し以て燈油分の割合を増加す、又一たび汽化したる油汽は釜中に止まらしめて釜熱を受けしむれば其液化したるものは汚色を帯び以て燈油の性質を害す、故に蒸溜釜の築窯法は汽罐と全く其規を異にし必ずしも加熱面積を増し温熱放散を防ぎ以て燃料効率を大ならしむるのみを以て目的とせず或は火床を低くし或は釜頂は煉瓦石にて包被せざるを普通とす、多くは釜底のみを熱するの構造となし從て釜底の觸火面積を大にし圓周の半徑以上に達するものあり、此場合には釜の兩側に翼を附し兩煉瓦側壁上に据へ以て釜の重量を交ふるものとす、偶々釜の兩側に側烟道を築くものあり、此場合には此側烟道にダンパーを裝置し蒸溜進みて釜中の石油減少したる時は此側烟道を塞ぎ火烟をして釜底烟道より直ちに烟突に入らしむるの構造となす。

蒸溜釜に熱を加ふるには蒸溜一回の其始より終りに至る迄絶えず注意して或は其熱度を大に或は之を小にし以て溜出液の量を加減し又釜中原油の性狀を變化せしむ、要するに其始めは徐々に加熱して揮發油分を溜出せしめ漸く其度を高めて燈油分を溜出せしめ其終期に於て前記の分解作用を起さしむるに至りては急劇に熱度を高め再び熱を低くして燈油分の殘部を徐々に溜出せしむるにあり、若し夫れ始めより高熱を與ふれば獨り揮發油分のみならず燈油分の幾分も混合して蒸溜し來り其結果揮發油の性質を害し且燈油分の製出量を減するなり。

原油の蒸溜順序に種々の方法あり、其簡單なるものは一度釜に充たしたる原油を熱し漸次熱を高

めて沸騰点相異なる炭化水素を順次汽化せしめ更に冷却して之を集め而して釜中の殘滓は釜の冷却するを待ちて拔去るにあり、然るに其釜の未だ冷却せざるに於て第二回の原油注入をなすものあり、或は蒸溜釜は數個を連續し第一釜にて低熱に熱せられ其一部分蒸溜し去りたる殘分を第二釜に流し之を稍高き温度に於て再び幾分の蒸溜をなし更に其殘分を第三釜に流し入るゝ等其の釜數、十個以上に至らしむるものあり然れども蒸溜釜の其未だ温暖なるに乘じて第二回の注入をなせば釜の急激なる冷却によりて鑄鐵式釜に於ては破裂を來し鍛鐵釜に於ては漏泄を速進する等の害を醸し又數回引續き蒸溜する場合には原油中に於けるピッチ分は漸次堆積し熱強きに於てはピッチ分、分解して炭素となり釜底に固着し底板を炭化し或は過熱するに至り損害を醸すこと大なるが故に此等の方法も幾多經驗の後排棄せらるゝに至れり、唯前記の連續蒸溜法は露國に於ては其原油及蒸溜殘滓の特種なるがために盛んに行はると云ふ。

原油は其鑛場油井にて汲取るや常に多少の水及土砂を混合す故に一度鐵槽中に入れ靜置して比重の差に由り此等夾雜物を沈下せしむるの必要あり、然れども少量の水分は尙ほ原油中に夾在し容易に分離せず比重大なる原油に於て特に然り、故に原油を蒸溜釜に入れ一度之を熱して原油の粘力を減じ水分の分離を容易ならしめ靜置して釜底より抜き去るを要す、此水分は其量僅少ななるも其蒸發の爲めに獨り燃料を損するのみならず其蒸發を初むるや油分を泡起せしめ釜外に溢出せしむるの憂を來し又沸騰点相異なる炭化水素を一時に蒸溜せしめ以て燈油の性質を害するが故に之を除去するは最も必要なりとす。

蒸溜釜より出たる油汽は冷水中に置ける鐵管を通せしめて之を液化す、此鐵管は蒸溜釜の大きさに由りて異り其大なるは徑八吋及其以下を用ひ長さ數百尺に及ぶ、蒸溜釜と冷却鐵管との間には一の安全瓣裝置を設く、冷却鐵管中には水分の水結することあり或は高級炭化水素即ち石蠟分の凝固することあり、爲めに管内閉塞して油汽の流出を妨げ蒸溜釜に壓力を生じ其破裂を誘ふことあり、又之に反して強風、雨雪等の俄かに釜表を襲ふことありて釜中油汽の急激液化により釜中に低壓を生じ釜の潰陷を來すことあり、故に此安全瓣裝置は高壓低壓兩様に具ふるものなり。

燈油分として集むべき溜出液は一定の引火点と粘力とを有するを要す、引火点とは一の燈油に火焰を近けて火を取るに至る其燈油の溫度を指すものにして此溫度低きに從ひ該燈油は之を用ひて火災の原因となること多し、故に各文明國に於ては其國にて製造及販賣する燈油の最低引火点を法律にて制定し其度に達せざる石油は特種の注意取扱を命ぜり、又燈油は洋燈に用ひらるゝや毛細管引力によりて自ら燈心中に上昇するを要し其上昇量は燃燒油量以上なるべし、若し然らざれば燈心自ら燃えて炭化し燈火は漸く明を失ふの患あるなり、而して燈油の成分たる炭化水素は其低級なるに從ひ引火点低くして使用上の危險を有し其高級なるに從ひ粘力強くして燈心への上昇速度減ず、故に燈油分たるべき者は正に或階級の炭化水素に限らるゝこととなるなり、而して茲に吾人をして製造上最便利を感じしむる者は、炭化水素の比重を測定すれば之を以て該炭化水素の引火点及粘力を推定し得ることとなり、但し炭化水素には諸種の系屬ありて各國各地の原油は其主成分及副成分として此等諸種を相異なる割合に於て含有するが故に前記の比重と引火点及粘

力との關係の數は各原油毎に之を定むるを要す、此關係數一たび測定したる上は原油の蒸溜に於て冷却器より出づる溜出液の比重を検し其適當なるものゝみを集めて燈油分となすことを得るなり、
原油の蒸溜終りて次に來るべき操作は燈油用溜出分の精洗なりとす、右溜出液中には其主要成分たる炭化水素の外に燈用不適當の或炭化水素、樹脂様物体、硫黃化合物等を含有し該油をして汚色惡臭を帶ばしめ又之を燃燒するに當りて煤烟を生ぜしむ、精洗の目的は即ち是等夾雜物を除去するにあり。

燈油精洗用として古來用ゐられし藥品中には骨粉、獸炭、硝石、食鹽、晒粉、クローム酸加里、鹽化アンモニア、硫黃、拷酸、硫酸亞鉛、硫酸鉛、松脂油等種々あり、而して此等藥品の一個或は數個を燈油精洗に用ふるの方法及順序も著しく多く或は原油を蒸溜せずして直ちに其中に右等の藥品を入れ又は溜出油汽或は溜出液中に之を混合するものあり、然れども此等の方法は其初め原油の產出少量にして製品は未だ一の珍奇藥品として取扱はれし時代に應用せられたるものにして現今是が燈火日用品として廣く用ひらるゝに至りては其方法の大仕掛なると其費用の廉ならんとの企望より殆んど全く強硫酸及苛性曹達のみを用ふるに至れり、唯或特種の場合には苛性曹達に代ふるにアンモニア石灰水或は炭酸曹達を用ふる者あり、現に越後に行はるゝは初め強硫酸の所要量を溜出燈油に混じて攪拌し靜置したる後器底より汚硫酸を去り水を加へ更に攪拌靜澄して硫酸の殘餘を去り次に苛性曹達溶液及水にて各別に同様操作をなす者とす、此攪拌法としてアルキ

メデス螺旋裝置を用ふるものあるも現時多くは壓迫空氣を吹込めり。

十二

右一般の方法に由りて前記夾雜物の大部分を除去するを得以て燈油の精洗を終るも或種の原油には硫黃化合物の寧ろ多量を含有し燈火用として臭氣及白煙を生じ前記精洗法に由りて除去する能はざるものあり、此場合には酸化銅等の細粉を原油中に投じ釜中の熱によりて硫黃分を硫化銅に置換せしめて釜中に残らしむるものあり、或は蒸溜釜より出る油汽をして其未だ冷却せざるに乘じて酸化銅粉末中を通過せしめ同様の目的を達するあり、又稀に溜出液と強硫酸と攪拌混合する際之を熱して其中に酸化鉛を混合するものあり。

精洗用に供したる汚硫酸は未だ全く其性狀を失はず、之を水にて稀薄となし靜置すれば其中に混入せる石油分及び一たび硫酸と化學的抱合をなせし或炭化水素、樹脂様物体等は稀硫酸液と分離するが故に集めて以て燃料となすべく稀硫酸液は煎熬して鉛室硫酸程度のもので爲し若し近隣に硫酸製造所或は過磷酸肥料製造所等あれば茲に流用せしめ又は更に煎熬して強硫酸を作るものとす、此再製品は尙有機化合物を含むこと比較的多量にして煎熬するに従ひ硫酸を還元分解し強硫酸たるに近づき最も甚しきものとなるなり。

精洗したる燈油には次に蒸汽蒸溜を行ふ、燈油には一定の引火点を有せしむるを要すること即ち引火点低き低級の炭化水素を混すべからざること前に述べし如し、而して實際上原油蒸溜を行ふに當りては比較的高熱を用ふるが故に沸騰点相異なるもの幾部分混合蒸溜し低級炭化水素を精確に分離すること甚だ難し、強て之を分たんと欲すれば燈油分たるべき部分も低級炭化水素と共に

に蒸溜し之を捨てざるべからざるに至るなり、故に燈油溜出液は幾部分の低級炭化水素を混合せるまゝ之を精洗したる後特種の蒸溜釜に入れ水蒸汽を釜中に通じて之を熱し低級炭化水素を蒸溜し去らしむ、此場合に於ては釜中の温度低きが故に燈油分たるべきものを混合蒸溜するの患なきなり、右蒸溜釜は火爐を築くを要せず單に熱の放散を防ぐ爲に石綿等を以て被覆すれば足れり。燈油は其色無色なるを最良とし普通品は稍々黃色を帶び一般に紫青色の螢光を有す、比重〇・七八より〇・八四に至り石油臭以外の臭氣を忌む、揮發油は蒸溜の始めに溜出し來るものにして多くは之を再蒸溜し數種に分ちて各々其用途に適せしむ。

石油中より揮發油及燈油分を蒸溜し去りたる殘滓は其儘液体燃料として使用し或は更に之に工程を加へて石蠟・機械油等に製す、其方法は燈油分蒸溜の末期に於て蒸溜釜中に水蒸汽を吹込みて殘油を攪拌し其蒸發を催進し更に減壓唧筒を用ひて釜中の壓力を減せしめ以て重質炭化水素の分解を防ぎ其沸騰点に従ひて順次之を溜出せしめ比重によりて區分し石蠟及び諸種の機械油原料となす。

石蠟油は之を氷点以下の温度に冷却し壓濾機を用ひて石蠟を濾別し更に精製して蠟燭の材料と爲し又壓濾機より出る母液は機械油原料となす、機械油は其需用せらるゝ粘力及引火点甚だ區々にして其用ひらるゝ機械によりて異り又機械の部分によりて異なるなり、假へば紡績機械の紡錐に施すべきものは粘力小にして其色薄きものなるべく之に反して船用汽機の汽笛中に注ぐものは粘力大にして普通温度にて殆んど飴の如きものを要するが如し、前者はスピンドル油と稱し、後者は

十三

マリンヴァルブ油と稱す、其中間に位するものにてマシン油、エンジン油、シリンドル油等あり。前記機械油原料として溜出し得たるものは再蒸溜硫酸及曹達の洗滌、蒸汽晒し、骨炭濾過、天日晒し、石鹼脂肪の調合等の操作を其一或は數個を施し以て製品となすものとす。

以上の方法に基き現時越後の主要石油會社に於て精製されつゝある製油の種類を列擧すれば左の如し。

一、燈油

無色透明快臭燈火に用ゆるに際し明光を發し燭の縮少する事なく且つ荷造は特に注意しあれば遠路運搬するも漏洩等の憂なきものゝ如し。

二、輕油

ボーメ氏比重三十三度半より二十四度に至るものを五種に區分せり、何れも引火点高く或は單獨に燈火用とし或は上等油に調合して燈火用とし或は發動機用となす等其用途多方面に互り而も其價格低廉なるを以て需用極めて多しと云ふ。

三、發動機油

右は發動機用として特に製造したるものにしてボーメ氏比重三十四度のものを一號とし其三十一度のものを二號とせり。

四、揮發油

脫脂、洗滌、溶劑、諸種動力等に用ゐらる、寶田會社にてはボーメ氏比重七十二度のものを

青風船、六十二度のものを黒風船と命名し需用に應じつゝあり。

五、機械油

一、ヴァルブ油

粘力最も大にして高熱蒸汽にふるゝも尙充分の粘力を維持するを以て諸種高壓機關の汽缸内部用として必要のもの也。

一、トランスフォーマー油

本品は精製に注意し全く不純物を去りたる礦油にして水分なく引火点高く電流を完全に絶縁する特性ある變壓器油なり。

一、シリンドー油

ボーメ氏比重度一七・〇密閉式にて測りし引火点は攝氏二一〇度、粘力(レッドウッド氏粘力計にて計りし秒數)五〇〇以上(攝氏五〇度にて)

本品は引火点高く且つ汽筒との粘着力大にして陸用、船用、諸機關の内部用として専用の減摩油なり。

一、ダイナモ油

比重度一九・五引火点一九〇粘力一五〇以上(攝氏二十度にて)一二〇〇以下(攝氏二十度にて)(以上各種の單位並に測定の要素はシリンドー油の場合に等し以下然りとす)

本品は發電機、電動機、蒸汽タービン其他中形精巧機械の外部用として特に不純物を去り

たる淡黄色の機械油なり。

一、エンジン油

比重度一九・〇引火点一八五粘力一五〇〇以下(攝氏二十度にて)一八〇以上(攝氏五十度にて)の要素を具ふるものをA油とし、比重並に引火点相等しきも粘力にして一一〇〇以下(攝氏二十度にて)一五〇以上(攝氏五十度にて)のものをB油とし二種に分てり、共に適度の粘力を有し高熱の爲に粘力を失ふこと著しからず且凝固点低きを以て諸機關の内外部に適し特に鐵道院に賞用せらるゝと云ふ。

一、マシン油

べールマシン油、比重度一九・五引火点一七〇粘力七五〇以下(攝氏二十度にて)一〇〇(攝氏五十度にて)以上

A、マシン油、比重度一九・五引火点一八五粘力一五〇〇以下(攝氏二十度にて)一六〇以上(攝氏五十度にて)

B、マシン油、比重度一九・〇引火点一七五粘力九〇〇以下(攝氏二十度にて)一二〇以上(攝氏五十度にて)

C、マシン油、比重度一八・五引火点一六五粘力九五〇以下(攝氏二十度にて)一二〇以上(攝氏五十度にて)

右各種共に減摩力大に、價格低廉なるを以て機械油中需用最廣く就中べールマシン油は全く

不純物を去りたるものにして織機、紡績機、印刷機等構造精巧なる諸機械に適す。

一、スピンドル油

ホワイトスピンドル油、比重度二三・〇引火点一五〇粘力二〇〇以下(攝氏二十度にて)五

〇以上(攝氏五十度にて)

スピンドル油、比重度二一・〇引火点一六〇粘力三〇〇以下(攝氏二十度にて)六〇以上(攝氏五十度にて)

本品は紡績錘、織布機械、裁縫マシン、自轉車、時計等の如き凡て精巧にして回轉の輕速なるものに用ゐて潤滑及防鏽の効大なりと云ふ、又ホワイトスピンドル油は純良無色にして植物油に比し價格低廉且腐變する恐なきを以て其代用又は混合用として髪附香油等の製造に重用せらる。

一、車軸油

比重一五・五引火点一六五粘力一七〇〇以下(攝氏二十度にて)一五〇以上(攝氏五十度にて)本品は機械油中價格の最低廉なるものにして鐵道車輛、車軸、トラック車軸、米搗機、水車等の簡單なる諸機械用に適す。

六、燃料油

重油各種 ポーメ氏比重十五度半乃至二十三度にして専ら海陸諸汽罐の燃料に用ひられ火力の強度と取扱上の至便なるとを以て需用日に増進しつゝあり。

七、殺虫油

害虫驅除用として効果著し

八、ピッチ

石油蒸溜の殘滓たる固形体にして煉炭の材料たるの外其儘燃料に供せられ且油煙製造又は
コークスの原料となり其他防濕用塗料等種々の工業用に使用せらる。

天然瓦斯 瓦斯の自然的に地中より噴出するもの世界各地にあり、石油井より多少の瓦斯が石油と共に出づるは斯業者の皆知る所にして水と共に瓦斯の出るは近く我新潟市に於て好例あり、其他坑井を穿たずして地表に出づる者は新潟縣下各地に見るところにして臺灣其一例を供し露國バクーの永久火は其著例なりとす、又池沼にて時々泡沫を生じ池底を攪拌すれば更に多量の瓦斯を發生す是等諸般の瓦斯は皆天然瓦斯なる名稱の下に一括するものなり、若し夫れ其噴出の狀態を要言すれば左の三となる。

一、天然瓦斯は單獨に遊離して地下より噴出す。

一、天然瓦斯は水(清水或は鹹水)と共に噴出し地表に至りて水と分離す。

一、天然瓦斯は石油と共に地下より噴出す。

第一項の狀態に現るものは新潟縣下各地に於て之を見るべく淺井を穿ちて其量を増し燈火用或は小工業用に供するものあり、新潟市は全市殆んど到る所井深約三百尺にして多量の水及瓦斯を噴出す、水は礦物質を含むこと多くして用水に適せず瓦斯は之を集めて庖厨用暖爐用に供せり、

其量未だ工業燃料用に應ずるに至らず、瓦斯井鐵管内には或時期の後礦物質を沈澱し又砂石を吹上げて井孔を梗塞し水及瓦斯の湧出を阻止するありて使用者は之に困みつゝあり。

石油と共に油井より噴出する瓦斯の量亦大なるものあり石油は其原質の輕重を問はず常に瓦斯を随伴し就中輕質の石油は比較的多量を有し特に新油井に於て多しとす、此石油と共に産出する瓦斯は油田に於て全く之を捨て或は直ちに汽罐燃料或は燈火用として使用せり。

天然瓦斯の成分は沼氣を主としエセン及び炭素に富める炭化水素殆ど常に之に伴ひ水素之に次ぎ或者は著く其多量を有す、一酸化炭素及炭酸瓦斯又常に隨伴するものゝ如し、米國にては硫化水素を含有するものありと聞くも是れ他に類例を見ざるところなりとす、又同一井に就きて其採集時日を異にするが爲めに其發生瓦斯の成分を異にするは奇異の現象なり、概して之を言へば天然瓦斯成分の相違は其生成根原たる有機物生成當時の温度及壓力の相異、分離の遅速、接近礦物の種類等其因を爲すものならん、或は又其共に出る水或は鑛泉の成分流通速度及び温度に依りて變化を受けるは事實なりと信ず。

人往々誤りて天然瓦斯及石油は相離るゝ能はざるものとなし天然瓦斯の産出は其地下に石油を伏藏するの兆證なりと愚考し茲に石油井を穿たんとするものあり、又遊離して或は水と共に出る天然瓦斯は其成分に於て石油と共に出る瓦斯と相異ると思ふものあり、後者の非なるは論なしと雖も前説は常に必ずしも中らざるにあらず、若し石油を主として之を言へば、石油は常に天然瓦斯を隨伴するものなり、故に石油を空氣中に置けば常に瓦斯を放散し又石油の地下に伏藏するあり

て其上層罅隙を有すれば瓦斯は之を通じて地表に現はるゝ事あるべし、斯る瓦斯の兆證を認めて深井を穿つ者は幸にして石油を得るの望を有す、然れども已に述べし如く天然瓦斯は石油の現存に全く關係を有せずして地下に伏在し偶々地層の裂罅を見出し遊離して或は水と共に噴出するものあり、之に深井を穿つものは天然瓦斯を得る事あるとも石油は全く之を得る能はず我越後に於て之に對するの例證多々なりとす。

又茲に天然瓦斯を石油現存の兆候となすに於て深く警戒すべき要点あり、前述の如く地下に伏在する石油は往々天然瓦斯を地表に示すと雖も其瓦斯通路たる地層の罅隙は該地層の壊裂或は斷層等に基くものあり、故に瓦斯發生地に深井を穿たんとする者は豫め斷層の有無を調査し又土砂崩壊に備ふるあるを要す、若し夫れ石油井を穿つものに於ては瓦斯發生地を距る相當の距離に於てするを寧ろ安全なりとす。

抑天然瓦斯は過去に於て生成し今日尙絶えず生成しつゝあるものにして其根原は左の諸項に歸する事を得べし。

一、炭素質物体の緩徐分解によりて生ず。
一、石油生成と同一根原にて石油と同時に生成す。
一、炭素質物体及び石油の地下熱或は人工熱作用に據れる分解によりて生ず。
天然瓦斯の主成分たる沼氣は或有機物が水の現存に於て平温にて酸化作用を受け生ずるものにして其組成分中の酸素及水素は漸次分離して炭素を殘留し此酸素及水素は一部は化合して水となり

他は炭素と化合して炭化水素となるなり此作用は過去に於て石炭生成と同時に進行はれ又現今池沼、湿地等に於て水藻、木葉等の堆積するものに於て常に行はるゝなり、池沼の底を攪拌して沼氣の放散を見るは人の能く知るところなり、又石炭坑等に於て石炭が濕氣を帶び自然に分解して炭化水素を生じ其堆積するや時として炭坑爆發の原因を爲すは屢々見るところなり、石油及び土瀝青も平温に於て徐々に分解して瓦斯を發生す、酸、鹽基、其他酸化劑の作用を受ける時特に多し、或は硫黃化合物の作用を受けて炭化水素と硫化水素とを發生することあり。

エセン、プロペン等は沼氣の如く有機物の平温に於ける分解作用によりて生ずること能はず、故に天然瓦斯中是等を含むものは石油根原に近き者たるを認むべく即ち石油と共に出し或は地下にて石油より分離し幾許距離を去りて單獨に存在せるものたるを知るべし。

一、酸化炭素又平温にて生ぜず、思ふに火山作用の如き地熱の高温度によりて炭素質物体の分解によりて生じたるものなるべし、蓋し天然瓦斯の火山地方、變性岩所在地に現存し又鑛泉に伴ふは此生成根原を證するものと云ふ可し。

結 論 左に日本石油界の現況を附記し以上越後油田視察の梗概を結ばんとす。

由來石油の需用は専ら燈火用を主眼とせしも、近年は瓦斯、電燈等の爲めに壓倒され此方面に於ける石油の需用は著しく減少し延て石油界の狀況は多年不振沈衰裡に鬱屈せしと雖も今や漁船發動用としての需用は増加し加ふるに自動車用としての揮發油の需用亦著しく増加するに至り一般石油に及ばず影響甚大なるものあり、加ふるに明治四十三年内外石油の協定破れて競争激甚なり

しもの一昨年以來今日に引續き競争戦は漸く其跡を絶ち而も 價は一年有半騰貴一方なるに加へ最近所謂ロータリ式深掘機械利用の効果意外に佳良なる成績を示し現時著しく好變化を受けつゝあるは争ふ可からざる事實なりとす、現に越後に於ける石油産出増加に伴ふて液体燃料の應用漸く行はれんとする機運にあり而して此目的に使用するものは主として重油なるも時として原油を用ふるもあり。

翻つて案するに日本石油業の一大發達をなせしは緒言にも述べし如く明治十九年米國鑿井法を應用せし時に始れりと雖も、當時尙斯業に従事するもの、多くは一時の僥倖を冀ふの投機者流にして永遠の大計を書し眞面目に事業を經營するものなく其盛衰興廢は旦を以て夕を測るべからざるの有様なりと云ふ、是を以て實に着實なる企業家が自ら手を石油事業にふるゝを懼るゝのみならず一般の人士も亦斯業家を輕蔑するの狀勢に在りしを以て諸種の弊害百出し斯業の前途爲めに一頓挫を來さんとせり、茲に於てか是れが弊害を矯正して斯業の發達を擁護せんと欲し、小資本分立の弊は決して斯業の進歩發展を謀る所以に非らざる事を汎く鑛業家の認むる所となり、合同の最大急務を唱道するに至れり、爾來三十七八年戦後の我經濟的分野は著しく増大し外油との競争日に激烈となり經濟社會の大勢は大規模大經營の必要を告ぐるゝこと彌々急なるに至り機愈々熟し遂に明治四十三年に至りて小會社合同買収の實を現はし茲に豫期の目的を遂行し一大會社の成立を見るに至れり、是れ即ち寶田石油株式會社なりとす、現時是と雄を争ふものに日本石油株式會社あり、此兩社こそ日本石油界を代表するものたり、兩社共に益々營業の統一を計ると共に事業

の改善發展を企圖し新に技師を四方に派し新油田の探究開發を怠らず一時の投機熱に惑わす學理を尊重し、眞面目に事業の實況を調査するの趨勢にあるは我邦斯業の發展上且は日本學界の爲め實に喜ぶ可き現象なりとす (完)

夫れ天下の大勢たるや冥々暗々の裡、無聲無臭の間に循環推移して、人力の能く維持し得る所に非ざるものあり。人事と雖も決して突然に發生するものにあらず、例へば日露戦争を單に滿洲撤兵問題に依りて惹起されたりと爲すは、淺人の見のみ、愚者の智のみ、其眞因は遠く之を維新以前に遡らざるべからず、更に世界文明の歴史に徴せざるべからざるが如し。されば現在の人事は、必ず過去の出來事を交渉し、因と爲り、果と爲り、果更に因と爲り、因々果々相合して、始めて人事の一往一來あるものなり。

茫々五千載、宇内國を建つるもの幾許ぞ、而して興廢の蹟歷々として指顧の間にあり、觀よ、古代華美と繁榮とを競ひたるバビロン、アッシリア今焉くに在る、東亞文明の淵源と目せられたる印度今如何、百年前に英領の一部たりし北米合衆國が今日世界に覇を唱へ、獨逸の勃興は之と相並び其一顰一笑は實に東西喜憂の因を爲すものあり、而して一時歐亞を風靡したる土耳其の昨今は何たる狀ぞ。勃興元より主因あり、客因あり、頽廢に主果あり、客果なからざるべからず。前世紀、人力萬能を武に振ひたる奈翁をして一敗地に塗らし、遂にセントヘレナの孤島に幽閉したる動力は彼露國なり、然るに今世紀の始めに於て、奈翁と同じく武欲を東國に振舞はんとして覆

轍の災を招けり、これ彼の國は奈翁の轍を踏むべく志を遺せる彼得大帝を奉ずるを知りて、人道の教主たるトルストイが眞に自國の君主たるを忘れしなり。支那は二千餘年の昔既に孔孟ありき、爾來彼は徒らに孔孟教の傳習に籠居して、また他の文教思想の化育を容れず、夜郎自大にして東隣の友邦を壓せんとしたるも能はざりしなり。而して今や世界人口の過半を占むる東洋の諸民族は、沈淪して殆ど國家的滅亡に頻せるに、日本帝國が獨り勃然として興起し、名譽の勝利は歐洲を聳動せしめ、世界をして震駭措く能はざらしめ、版圖更に擴大し、文運日に進むものあるは何ぞや。

世界の歴史は暫く問はず、之を亞細亞に就きて見んに、蒙古人、韃靼人が北より南に下るの歴史なりとも論せらるべく、之を西より東に觀察すれば文明が南方低地のインドス、ガンジスに發生し、並に黃河及び楊子江の流域たる支那の沃野に生れたる一大現象なりとも謂はざるべからず。彼のコンスタンチノープル城頭に翻る半月旗は即ち、北方の蠻族が南下せんとすれば必ず大洋の遮る所となり、勢餘りて東西に膨脹し、其東に伸びたるものは我に寇し、其西に展開せんとして歐洲を踏破したる餘影に過ぎざるなり。

是明かに亞細亞の文明は東漸の歴史を有することを證するものにして、我國の文明も亦西南より入りて東北に漸及したるものなり。其始め、日向より東漸して大和に入り、山城に進み、鎌倉霸府となり、一時京都、大阪に逆轉したるも徳川氏に至りて益々東して覇者は江戸に盤居し、維新に至りて帝都の此地に遷されたるよりせば、九州は日本文明の發足点にして、東北は正さしく其

到着地といふべきなり。

我國の風景を論ずる者、溫雅優美を以て勝れりとして京都、奈良、吉野を賞す、陰暗森嚴を以て勝るは那智、日光、木曾に如かず、瀬戸内海、琵琶湖を擧げて淡遠縹緲の最となす、然れども更に、海にして湖の如き風景は太平洋岸の特色にして、其溫雅和暢の趣、潤澤豊富の致、秋もなほ春の如きものあり。日本海岸に臨みては、風に灰色を帶び、其過ぐる所岸頭の光景恰も影の如く弱くなり、雲慘み煙愁ひ、海は大なる水の荒野の如く、浮べる舟さへ極めて稀にて、之に對すれば常に遊子宿を得ざるの情ありて、春もなほ秋の如し。これ既に北日本の波浪險惡、屈曲に乏しく、港灣を缺き、頗る航運に難きのみならず、山嶽重疊として陸上交通の便り少きは想像に餘りあり。宜なる哉、近時、東京、横濱の膨脹發展は言はずもがな、名古屋は中京となり、一大工業市とならんとす、京都は一時寂寞を極めたりと雖も、其繁華反つて古を凌ぐものあらんとす、大阪は日本のマンチエスターと爲り、神戸は亞細亞貿易の焦点と爲りつつあり、剩さへ、瀬戸内海沿岸の都市、又、新に繁榮の區となり、或は復活して、更に其殷賑を加へつつあり。而して日本海岸諸國は與からず。と。

嗚呼、これ何の言ぞ、本尊を拜せんとして山門に眩惑せられ、殿堂をも仰がざりし早計、近視の徒のみ、未だ彼の加越の間に風折烏帽子の如く遙かに突出し、港内深く弧線を描きて大島、小嶼波間に隱見して、奇勝絶景瀬戸内海にも稀なる能州を知らざる者なり。古歌にも高き有磯海の風光明媚、煙波縹緲として白鷗の浪に烟ぶ越路の勝景を三嘆し、水天杳渺、遙かに、佐渡の青蝶を

望まざる木訥漢なるべし、況んや、木曾山脈と相對して高峻を競ひ、之を壓倒して、北の方半天に跳躍奔放する日本アルプスの壯觀雄大なるをや。幾千尺の秀峰、蟻集して無人の境を爲す二越の巖々斷々たる絶壁を視よ、誰か森嚴なる尖銳をなせる大蓮華山を見、氷雪を鎧ひ、白嵩の影北溟に落つる立山を仰ぎ、山勢門の如く頑互して、北陸を横絶する白山の高峻を望みて一驚を喫せざるものあらむ。

而して、斯くの如き盲斷は、これ今日までの表日本を樂觀し、過去の背面的日本を悲觀したる嘆語なり。先人曰く、「文明の興義は人類の統一にあり」と。歐亞兩大陸の交通は、夫のレセップスの苦辛經營によりて幾百倍の利便を得、西比利鐵道の開通が人類に及ぼす影響も亦大なるものあるを覺ゆ。若し、近世に於ける人類統一の傾向を言はば、スエズ運河の竣工及び西比利亞鐵道の全通、並びに近く工を終ふるパナマ運河の將來とを以て、顯著なる文明進歩の誘因と見做さざるべからず。

小は以て大を推さるべしとせば、今時北陸線の洞開は北日本文明に新紀元を劃し、直接政治上社會上、至大至重の影響を與へ、以て從來の面目を一新するものあるは疑ふべくもあらず。而して所謂人類統一の上に貢獻する所尠なからざるを察すべきなり。

顧ふに、波濤千里、一碧萬里、寄せては返す日本海の潮に一帶の海岸を洗はるる背面的日本は、古へ地氣盛にして隆昌一時に並びなき民族の根據地なりき、されど優勝劣敗は數の免る能はざる所にして、興廢の迅かなること掌を返すが如し。一時山陰北陸の間に覇を唱へたる大已貴尊の一

族も、端なく優等民族の爲めに征せられ、下りて北方に雄視せし鎌倉入道の豪華、鎖國の官禁を犯して海外に渡航し、巨萬の富を贏ち得たる錢屋五兵衛の壯圖も敢へなく黃梁一炊の淡夢と化し去りしこそ悲しけれ。かくて、他と接觸するの機會を失ひ、外交の要路は他に移轉し、外國との交渉又北地に跡を絶ちて、漸次北國の衰亡枯涸の因を致せり。然るに今や、物質的文明の第一義と稱せらるる自然の征服は其德澤を我北陸の天地に布けり。東に千丈の絶壁を仰ぎ、西は萬里の海原を望み、古往今來幾多の旅人が脚下に襲ふ怒濤を見竦然として足を止め、空しく古歌を追懷して斷腸の思をなしたる親不知の天險は、今や、一聲の汽笛と共に座して、巉巖峭立碧波風に激して島嶼を吞吐するの壯觀を視るを得るに至れり。是れ所謂世界文明進歩の一徵象として吾人の欣快措く能はざる所にあらずや。

予彼の北人の歴史を讀む毎に、勇心勃勃、肉躍り血涌き、彼が蓋世の事業は無限の感懷を與ふるものあるに至りて、更に我北國人の過去と將來とに想到せずんばあらず。北人は避陬の寒地、スカンデナビヤ、ユトランド兩半島の濱に其國を開き、資性極めて慄慄にして冒險的氣象に富み、常に戰を好み、諸國を侵略して其銳鋒殆ど當り難きものあり、日耳曼史に見るが如く、佛國史に讀みたる如く、而して、屢々英國史に散見する如く、天下無敵の勇を振ひたり、加ふるに其卓越せる應化性は足跡の到る所には必ず殖民を興して成功せり、アイスランド、グリーンランド、グインランド等は彼が夙に發見して殖民したる所、佛國ノーマンデーより分れては伊太利の南方に國し、日耳曼より退けられては、轉じて露西亞に入り、スラブ人と相合して今日露國の祖を起し

たるもの亦此一族に外ならざるものとす。

北人や、實に廣且大なる影響を歐洲の歴史に被らせたるものと言ふべし。殊に史を讀むものの忘るべからざる一事は、彼れゴス、フランクス、ヴァンダル、アングロサクソンが稍々蠻態を脱すると同時に、漸く文弱と迷信とに流るるの時に當り、驀然劍戟を閃かして之を醒し、更に進取の氣象を之に鼓吹し、ウイリアム征服者を出して時の天下を驚したる如き、實に壯快を極むるものはなり。

我北國の歴史は勿論希臘、羅馬の歴史に非ず、光榮ある進歩の歴史にも非ず、古より東漸の文明を受くるには地の利に乏しくして、常に運命が虐待の手を下せし地なり、従ひて其歴史は失敗を語り、征服の事蹟を傳ふ、一場の悲劇ならずとも一部の哀史なり。

然れども、北人の蹶起せし北歐の三國は如何。地勢よりせば瑞典は島の國と謂ふべく、那威は山の國、而して丁抹は野の國なり。これ等の各國は其最も大なるものを以てしても人口五百萬に過ぎず、其強さ、其大さに於ては言ふに足らざるものありと雖も、其社會發達の程度、其文明の進度に於ては殆ど中歐、南歐を壓するものあり。地理上、必至の勢として、九州人は進むに鋭なるも、北國人の如き守るに堅き性格を有せず、其氣風に於て、前者が野戰の兵士たれども、後者は要塞戰に於ては殆ど理想の兵たるなり、想へ、難攻不落の旅順要塞の陷落は何物の手によりて功を收めたるかを。而して、宇内を跋涉する底の勇猛心に至りては、北人の特有なるが如く、この大精神は又我北國人に屬せずして止むべけんや。

近來、亞細亞文明の船は既に破れたりと稱せらる、而して近世文明の船は全速力を以て西進の航路を繼續しつつあり、と。是に於てか、日本は左手に晩近の文明を受け、右手にて之を亞細亞に渡すの責任を有するに至れり。以て日本文明東漸の大勢は此に西漸の趨勢と爲れり。惟ふに、樺太は我有に歸し、露領沿岸の日本海に面する一帯亦我國旗の朔風に翻るを見る、而かも朝鮮は併合せられたり。西岸東岸の柳長短同じからず、南枝北枝の梅開花既に異なる、とかや。誰かいふ、熱帯は世界の寶庫なり、北進は人間の本能に背き、バナナの實熟する所に吾人の樂土は見出さるべきなり、と。北日本の地廣く、日本海の水深し、豈北國人が平和の戰士として其双腕と双脚とを用ふるの餘地なからむや。

さりとて、吾人は元より北國の小天地に跼蹐して一生の儂事と爲すものに非ず、新日本に驥足を展ばしたりとて人事を盡したりと豪語する者にあらず、乃ち、日本の經營は更に東洋に着眼するを要し、東洋に臨まんと慾するものは先づ世界に眼光を張るを要す。徒らに日本を以て日本に限り、東洋を以て東洋に限り、更に遠大なる洞察を世界に放つこと無くんば、天下の形勢は得て知るべからず。

世界の形勢は乃ち東洋の形勢を成し、東洋の形勢は日本の形勢を成す、日本の形勢は乃ち南日本、北日本の將來を定むるものあるは、理の當然なり。英國の文明は倫敦之を證明し、佛國榮華流行の源は巴里に存し、東京は日本の現思潮を表示するが如くんば、吾人が堅實なる修養を得むとする北國の首都につき一言するも無用に非ざるを信す。世に城を指すもの必ず名古屋城を呼ぶ、名

古屋は東海の名城にして北國の名城は金澤たるを失はざるなり。宜なり、戰國騷亂の世、秀吉起りて天下の民心を收攬し、群雄を駕御するや、前田利家に此地を與へて徳川の羽翼を北國に制せしめたるや。名古屋に尾張大納言を置き、金澤に前田侯を封じて南北の權衡を制したる家康の智も亦秀吉と其軌を一にせずんばあらず。古來、地の利と人の俗とを配合して以て天下を保たんとせしは英雄の六韜三略に外ならざるなり。而して、元龜天正以來今日に至るまで、其居城の他の寇す所とならず、一度も兵火の亂を見ずして連綿とその名蹟を保ちしは、日本六十餘國中獨り金澤城主百萬石の前田侯あるのみ。武田、織田、豊臣の如き英雄の跡は何れも三代ならずして斷絶せり、西國に毛利、島津、東北に伊達、上杉等の居城ありしと雖も、皆一盛一衰の興廢を描きて戰亂の蹟ならざるはなし。然るに、金澤は三百年の社稷に一波をも起さず、和風洋々として領内に充てり、又宇内の珍とすべきなり。吾人は又、百萬石と聞かば直ちに大諸侯を想ふ、百萬石の呼聲や實に雄壯なる感を起し、深き史的美感を催さしめ、封建の世、鹵簿堂々、箱根の山に跨り、大井の水を堰き止め、驛鈴傳呼の響勇ましく、東海道を練り行く大名行列と、豪然大太刀、小太刀を腰にして輿に坐せる大名姿とを眼前に浮ばしむ。

金澤の舊城は曾て、祝融氏に見舞はれて其大半烏有に歸したりと雖も、之が抱有する人工の妙を致して天然の風趣を凌ぐ兼六公園あり、河北潟の絶景、西端なる白山の高きありて、之を包圍し、此名城を中心とせる金澤は依然として北陸の重鎮なり、新北日本の運命を將來し、進んで日本文明の關門を守るべき前途を有す。

維新の當時に翻へらば、金澤は藩祖以來の主義の爲め、人後に落ちたりと雖も、後益々拮据勉強して數多の新人物を輩出せしめ、一時、教育の振興の薩長をも凌駕するものありき。吾人は此勢を持續して、新人物の提撕誘掖を怠らず、所謂百萬石の力を以て社會に當り、一大新氣運を開拓するの抱負なくして佳ならむや。

身を北國に起す青年よ、明治維新の大業を成就したるものは、實に田舎の青年にして幕府の老人は與らざりき、大正第二維新の改革と發展とは前代の元勳に待たず、治平に慣れたる偷安者を要せざるなり。今や、我國は北に進むに日に忙はしく、更に北溟の鯢となりて太平洋上に覇を競はんをす、顧みれば、碧眼の白人が人力萬能を振ひ、無限の富、精根の力を以て、一瀉千里我圖南の羽翼を破壊せんをす。熾なる哉、多忙なる哉。

業を尾山城下に修むる新進氣鋭の士よ、天の呪ひは常に北國の衆嶺を閉すに雨雲を以てす、人馬肥ゆる秋も僅かにして、凍雨霏々として木葉散落し、聽て、玉屑悉く平野を蔽ひ、往還を斷つこと三月。然れども、東風に清香を放つ梅花は、始め嚴寒に堪へ、陽春に芳香を呈する櫻花は、前に霜雪の苦を凌ぎたる結果ならずや。山骨稜々たる所、歴々として凜々皓々たる北方豪健の象を示し、沈鬱、悲壯、蕭然たる間に堅忍の力は養はれ、剛正不撓の節は收得せらるるなり。

噫、未だ世は擧げて濁れり、勞せずして功名を立てんとし、額に汗せずして富を獲んことをこれ努む、而して何れの時にか河清を待つべき。漁夫歌つて曰く、滄浪の水清まは以て吾纓を濯ふべし、滄浪の水濁らば以て吾足を濯ふべし、と。

さはれ、うら若き皆人よ、燃え立つ青春の血汐は何時かは横溢せずして止むべき、國家天下の大發動機に用ひらるる事なくして終らむや。只徒らに、現代の思潮に囚はれて、快樂の形骸に垂涎する勿れ、人生に順境あり、逆境あり、人事時に、風雪の惱みあり、嶮路峻坂の難あり、磯路に阻まるることあり。一蹶、二蹶、何かあらむ、三顛、四倒、恐るるに足らず、鈍鷺も奮進すれば豈寸進なからんや。意志の在る所に道あり、努力の前には何物もなし。

吾人は進取の氣象を逞うし、運命と戦ひて其非なるに泣くことなく、光風霽月達して嬉ばず、窮して悲まず、悠々として天を樂むの大度宏量を襟度とし、以て偉大なる個人と善良なる國民たらんことを期し、北國特有の意氣を天地に示さずして如何にすべき。

ふたりのきみに—— 日 色 瑪 尼

井田虎男様に——

I. 古き都の鐘の音

(武生の街の春宵小景)

鳴る……古き都の鐘の音

Born……Bo……m……m……n……n

夢の如く幻の如く迷ひゆく鐘の唸りにつれて
戀の影うつす溝渠の水は靄となりて浮び
古き御宮の小鳩は母鳥の胸に首をうづめ
薄暗き露路の軒にも歌行燈は眼醒め初む

芝居小屋の花かざしも露を含みてしっとりとうなだれ

路ゆく若き人の胸も沈滞の氣分に哀調を覚え
溝の傍に咲ける沈丁花も甘き薫りに泪ぐむ
鍍銀色に流れゆく水の面の淡い々々反映……

鳴る……古き都の入相の鐘

春ををしむ若人の胸に優に柔しき哀愁をつたへむと
頽廢の屋並を越えて重く重く
鐘は鳴る……古き都の古き鐘

街を縫ふ並樹の芽生は濕氣を含みて蒼き幽寂の色を漂せ
そを透きて薄黄の星の瞳は情深く溝渠をのぞき
若い娘はすれ違ふ美しき若衆に口も軽く——
囁き過ぐる——

人形屋の店舗にはそれいやらしい意氣な身形の二三人
しづ心なき春の宵の軟かな想ひに人知れず耽らむと
雛棚を照す雪洞の淡き光に思ひきり衣紋に抜いた襟筋も白く

艶かに語ひ乍ら綺麗なる雛様を選び居れり。

鳴る……古き都の入相の鐘

雑然とした現つ世の響より世の人を

美しき燈火や銀屏の色と形の夢の世に逃れさせむと

鐘は鳴る……古き都の古き鐘

湯あがりの若い舞妓は美しく化粧して

懐しい黄昏の恍惚に白い頬をかしげて

人はづかしげに微笑みながら

花さげて逝きましゝ親御への菩提寺へと裾を運ぶ

またある舞姫は薄暮るゝ神殿に額つきて

心より戀の祈願を捧ぐるなり

重ね合せし小さき蛋白石の様な掌の白さよ

美しき舞姫の迷信のうれしさ慕はしさ……

鳴る……古き都の入相の鐘

日の神の暖めし古屋根の若草を

再び星の蒼き光に冷さむとするものゝ如く

鐘はなる……古き都の古き鐘

何處ともなく漂ひ来る三絃の爪びき

晴れわたりし四月の空は花瓣の散ばへるが如くに柔かく

三味線の胸の鼓動につれられてかすかに獻款き

聞きわけられぬ囁きを戀人の心にもたらす

家傍に咲きしほれたる淡紅桃の花は風なきに路にこぼれ

御宮の池に白くなやめる水仙の吐息は濡れて光り

芽をふきし柳の蔭に佇める辻占賣りの絹の様な呼び聲は

紫の煙となりて街路の静黙を彩る……

鳴る……古き都の鐘の音

Born……Bo……rn……n……n

——(大正二年四月作)——

II. 緞帳のかげ

(劇場の印象の内)

A. 祇園女御九重錦

ようい、ようい、ありやりや……

三月の雪はちらちら降りしきる

木やり囃^{はやし}で地車^{こぐる}の轟^{ごう}く音のいさましや

揃^{そろ}ひのゆかた染頭巾、柳ひきゆく人夫共

動かぬ柳の重さよな、恩愛の別れの重い^{きつな} 継^{つぎ}よな
雨露^{うろ}の恵みに柳の精の親子も深き因縁よ

散りくる柳の葉がくれに綱^{つな}を求めて^{みどりまる} 緑丸

柳の花の緑丸、父の泪^{なみだ}の木やり唄

これや坊のかゝさまか

(綱引き捨てゝわつと泣き)

もう一度乳は吞まれぬか……

泪にむせび歎きつゝ肩にかけたる引綱や
父の扇にゆらゆらと動く柳の哀れさよ

新宮の濱さきまでを命にて柳ひきゆく緑丸
無残なる哉稚きものは母の柳を都へ送る

ようい、ようい、ありやりや……

三月の雪はちらちら降りしきる

註、(この作は殆んど凡て原作の句を用ゐて構成せり)

B. 椀久末松山

やたらに御酒を飲まされて
腫もさだまらぬ成駒屋をさらへて
豆まきをさせるとは余り酷いしうち

また柵に注ぐ御酒の黄金

「仕なければまた罰杯だぞ……………」
箱登羅のきつい眼つきに灯が揺く

でもねえ、久兵衛だって男でさあ、
ほら、御覽んなさい、大切な大切な封印を切りました。

「椀屋久兵衛が豆まきの趣向を見ておけ……………」
弱者の痛ましい反抗の叫び聲ですねえ。

あれ優麗な芝雀がすりよって襦袢にかばうた成駒屋
「わたしが二世をかけて契った男とはこの久兵衛さま……………」
弱いものには優しい味方が出来るからたのもしいなえ。

まあ箱登羅の腹のたてようは
たてたってかまひませんや

芝雀と云ふ美しい味方があればねえ

弱者がよう御座いますこと
強いものにはなりたくない

C・瀧夜叉姫

燄！美麗しき燄よ！

瀧夜叉が蒼き憤怒の凄面に

渦巻く煙、漲る燄

焚けよ、白き腕を

焦せ、緑濃き麗髪を！

見よ！復讐の情念に燃ゆる双眼を

遙に敵陣に奔らせて
死すとも思ひ知らせむと
扶るが如き極熱情……

聞け！高欄に足踏張りて

朱唇慄はせ熱涙を呑み

叛逆の苦患に咽ぶ

銀の如き恨の顫音——

「われ今、運つきて自害せむ……」

最後の際の不敵なる嘲笑

鬼瓦の如く熱なき日本には

實に稀なる女性——

艶なる雪肌、冷たき白刃、流るゝ鮮血、

また卷きかへす黒煙

あはれ、瀧夜叉を包みし燄

燄！美麗しき燄よ！

——平泉澄様に——

I. 花苑の暴風雨

病人の肌の如くに重く光れる雲の色

さだめなきそが眩暈の動搖に

見よ、暴風雨は赤き信號を屋根に舞はせたり

花苑に息へる君と吾とは

熱情の失せ去りし後の寂寥の心に

疲勞をば感じ乍ら激しき暴風雨の刹那を待てり

忽ち來る毒のほめき、騷擾の空

暗陰の雲は蹣跚として氣中によりび

遂に來りぬ暗澹たる奢侈の暴風雨

今、晩春の花苑は駘蕩の夢やぶられぬ

草や樹の萎れたる花瓣は頻吹の如くに空に迷ひ

まだ若き青葉の群は泪の如く散らばへり

鬱憂の花粉の薫り甘く胸を壓し

驕樂の蔭に潜める哀調は渦卷き

氣中に描く緑、黄、赤、或は紺青の幻の繪模様

木蓮の遅花は爛熟せる女の肉をちぎれるが如くにこぼれ

飛びゆく梨の花は靈の蒼ざめて狂奔するが如く

紅椿また腐ちてしとしと、壤土の黒に血潮を滴せたり

地にはまた紫羅欄花や金盞花

嬌嫩なる羅布のひらめく如く

雛菊は偶然の驚きを歡べる小兒の如くに戯れたり

美しき若葉の緑と、さまざまの花の色調とを溶して

狂亂の雨は重き空氣の層を縦横に罅いらせ

美しき綾羅の帳を亂れ裂くごと降りゆけり

風と雨と花と青葉との亂れ模様

絹天鵝絨か友禪かまたなつかしき薫りの腐蝕

げに奢侈れる春の最後の饗宴――

散らばへる花を眺むれば散りてゆく若葉を想へば

神の擁護を疑へど、かく美しく滅びゆく

花を羨む心もまたわれらか胸にあり

吾が心は晴々として靜かに君が腕をとれば、柔しき唇は、

「吾等は死すもこの園は永劫に春を歌ひ春を歎くならむ」

と、云ひたまふ。あはれ人の世の悲しさよ。

暴風雨は今や過ぎ去れり。

君が緑の髪を濡し、爛壞^{らんわい}せる牡丹^{しづく}の蕊^{しべ}に
しめやかに降りそぐ琥珀^{こくろく}の雨……

——(大正二年五月作)——

II. 小曲五章

A. くだもの

青き林檎はほろ／＼と
紅き茱萸^{ぐあま}ちる庭隅の
小暗き中にこぼれゆく
紅き果實も青き實も
同じ暗みに人知れず
みだれ乍らにこぼれゆく

B. 初夏の想ひ

初夏の宵に蛙が鳴けば
病院の白楊に入日が歎けば

朝顔の小さい芽生に露がやざれば
ほんにあはれやなつかしや
若い想ひのやるせなや

C. 花のゆくへ

花が咲いたら雨が降れ
降つて濡れたら風が吹け
吹いて散つたら太陽が照せ
照いて乾いて酒そゞぎ
赤い夕日に燃かうもの

D. 朝の光

静かなる光の戦ぎ
夢はなほわが脳に吐息し
濕りたる葉越しの風はわが胸に接吻す。
あさの一時……静かなる
光は甘くわが心に微笑む

E・月 あかり

斜にさした月あかり
萩の若芽の濡れ心地
斜にさした月あかり

(完)

水の 上

モウバッサン作
鳴澤 生譯

過くる夏バリーから二三哩離れた所に、私は小さな別荘を借りた。其別荘はセーヌ河の直ぐ岸にあつた、で私はそこで毎日黄昏から夜へかけて美しい夏景色を眺めて過ごしたのであつた。二三日すると隣りの人と近づきになつてしまつたが、其隣人といふのは三十位の男で、こんなことは私の一生涯中で最も奇妙な現象であつた。彼は漁を熱情的に愛してゐた、そして水の上なり水の中なり兎に角水邊で自分の一生を過ごして行つた。彼は一体船に乗つて此世へ出て來たに違ないんだとさへ折々思はれた、またいつか其中に舟に乗つて居つて死ぬんだらうと信じて居つた。

或日二人でセーヌ河の岸を散歩した時、彼の水上生活について何か話してくれと頼んで見ると、此私の頼みが彼にとつては頗る満足であつたらしかつた。何故かといふと、彼は直ぐ非常に昂奮し、愉快そうに滔々と而もそれ所か詩人の様な口調で語り始めた。彼には川といふ只一人の偉大な力がある、抵抗し難い熱烈な戀人があつたのである。

「私共の側を流れてゐる此河について、どんなに澤山の思ひ出があるかといふことをお知りになつたらな——」。かう言ひました。

「一体河といふものはどんなものか、といふことを貴方がた都會のお人達には、てんで想像

することも出来ないでせう。だが一度漁師の話を聞いて御覧なさい、漁夫などには河といふものは何か秘密の籠つて居る、深遠な不可思議なもの、闇夜を探つて其處に無いものを探るやうな——また此れはどうゆう譯か分らないが、丸で墓場で物を見るといふ風な極く奇怪な幻想的な國であるのです、實に悲惨な墓場——いや墓場といふ中でも最も物悲しい墓場であつて而も石碑といふ様な裝飾品は一つもないのです。

普通のきまりきつた陸地は漁夫連にとつては限りがあり、且つ狭いが、月もない闇夜の河は際涯も知れない王國とも言ふべきものです。廣い海に出て居る漁夫などには、こうした感じはありませんね。海といふものは狂暴で亂暴で而も怒り易いもので、殊に大海と言はるゝものに至つては、唸つたり吠えたりして廣く廣がつて居るんですもの。だが川は黙つて居りながらも底意地の悪く、別に恨を含むといふ氣はいもなく音も立てずに流れて行きます。そして大海の高い浪よりは、此平坦な波いつも同じい川波の方が却てこわいんです。

海の内には青く光つてゐる森や平原が隠れて居り、また大きな魚や珍奇な樹木や緑色の結晶をした洞穴の間に、溺死した人の身体があちこちぶらついて居る——といふやうなことを何時だつたか夢想家に聞いたことがありました。河はほんの黒い淵のやうなもので、其中へ落ち込むだが最後腐敗して流れやうともせない。でも朝日に輝いたり、岸に生いてひそひそ囁いてゐる葦などに打つかつてぼちや／＼いたりする時には河も美しいものですね。

その細い葦が囁いて居る物語りは、大海の吠えるやうな音から聞えて来る陰氣なドラマな

ごよりは、もっと物悲しい調を帯びてゐるものだと思つて居ます。

だが貴方は私が自身で経験した物語を聞かうとお仰るんだから私の冒険談をお話しませう。それはもうかれこれ十年も前に此川であつたことなのです。

其頃私はもう老婦人のラフソンの家に住つて居りました。私の親友のルイ、ベルネーといふものがC——村で——それは此處から二哩ばかり川下にある村ですが——夏の間だけ滞在することにしてゐました。彼が私の所へ來たり、私が彼の所へ往つたりして毎日一所に食事をしてゐました。

或夕方彼と別れ可なり疲勞して一人家へ歸らうと、いつも夜行する時に用ふる「太洋」と名づけた小舟で足で量つたら十二歩ばかりもあらうと思ふのを、頗るのろ／＼漕いでやつて來た時、鐵橋の手前二百米突ばかりの所で休まうと思つて、暫らく舟を止めました。

天氣は晴れ渡つて居ました。月光は溢るゝばかりに川の上に注ぎ空氣は靜まり返つて穩かでした。樂々とした氣持に誘ひ込まれてこんな平和な所で一服やるには全くいゝなあ、などと獨言を言つて居ました。そう思つて煙草を吹かしてゐた。錨をゆるめて水の中へ下ろしました。

錨の綱が届くだけ小舟は流れに添ふて下つてゆきそれから止つてしまつた。私は羊の皮にくるまって舵の所へ座りましたが、それが流れてゆかうとする時に大變都合がよかったのでした。自分の周圍には何の物音も響も聞えなかったが、只折々水が岸に當つてぼちや／＼い

ふ音が低く殆ど聞きとれんばかりに、響いて来る様に思はれました。そして其度毎に葦が揺いで、奇怪な姿やそうした群がり結び合つて居るやうな氣がしたのです。

川は極く極く静かに横たはつて居つたが、私自身は私を取巻いて居る此物音一っしかない沈黙に打たれて妙に昂奮してしまつた。何故かといふと、ありとあらゆる動物——蛙でも蝦蟆でも沼の夜の音楽家は皆沈黙して居つたからです、所が不意に私の右の方に當つて一匹の蛙がグググッやり出したので、吃驚して躍り上ると蛙はまた鳴き止みました。再び物音一っ聞えなくなつたから私は氣分を落ちつけやうと思つて煙草を吸ひ出したのです。だがこうして無暗矢鱈にバス／＼やつて居るんですけれど、今日に限つて煙草は何の効能もないのでした。で二三吹やつた後で煙管が駄目になつたんだと知つたから、またそれを下へ置いて今度は唄でも唄つて見やうと思ひました。自分の聲の調子を聞いて居ると、何だか不安になつて來たので小舟の底へ膝まづいて天を仰いで見ました。そうしてゐると暫らくは氣が靜まつたが、それから乗つて居る小舟が少し宛動いてゐるのに吃驚してしまつた、實際それは自分には突然なものでした。舟があちこち動揺し、此方岸から向ふ岸へ動いてゐるのです。そうすると何か目に見えない力があつて自分を深みへ引張り込むでゆくんぢやないかと感じました。次でまた下の方へ引きづられる爲めに先づ上の方へ持ち上げられたのです。今度は然し小さな嵐の中にあるやうにあちこち投げ出されるので、元々決して雑音なんかは、全く聞えないんだと、しっかり感じました。私は立ち上つた。銀色に輝きつゝ、安らかな休息の中に、水

は向ふへ流れてゐるぢやありませんか。

昂奮しきつた神経が、私に色々な運動や音響を欺いてゐたんだといふ事に氣がついたので、直ぐ歸路につかうと決心しました。錨繩を引張ると小舟は動き出したが、間もなく何か障害物に打つかつたのです、繩を強く引張つて見たが錨は上らうともせない。錨は下で何處かに引掛かつたのだといふことは明かでありました。自分は全身の力を出したけれども矢張り駄目でした。そこで錨の位置を變へやうと思つて、流れに逆らつて舟を向けて見ました。然し其甲斐もなく錨はしつかりと止まつてゐました。ひどく腹が立つて來たので、自暴に鎖を引たくつたのです、だが矢張り一髪の距離でも動かうとはしない。でがっかりして私は打倒れてしまいました。どうしたらいいんだらう、鎖を切斷してしまふことも出來ず、それかと言つて舟から解いてしまふこともできなかつたのです、何故かと言へば鎖は極く丈夫なのであつた、おまけに腕よりも大きな太さある木片にねぢ込むであつたからです。然しお天氣がよかつたから自分は漁師がやつて來て、錨を離すのに手傳つて呉れるだらうと考へて一人で慰めて居りました。かう思ふと幾分氣も落付いたので横になつて残りの煙草をふかしてしまひました。それから、いつも舟の中で持つことにして居るブランデーの瓶から二三杯やりました。その後は自分の容子が面白いといふよりはむしろ喜劇じみて居る様に思はれて來たのです。廣い青空の下で過ごさねばならなかつたのだけれど、其晩は大變暖くて而も其冒險が何も悪い結果なんか引起しはしませんでした。

不意に舟の何處かに軽い打撃を受けた音がしたのに氣がついた。私は飛上ると、冷やりとする戦慄が背中をずっと走って行きました。水の上に流れて来た一っの木片が、確かに此衝突と燥音との原因であつたらしい、だが此一寸した出来事が私を復た元の神経的な状態に陥れるに足りたのでした。私は更にもう一度鎖を捉へて錨を引きあげやうと絶望的に努力して見た。どうも不可ん。根氣も精力も盡き果てて再び倒れてしまいました。

其中に川面から白い濃霧が立ち昇つて、水面を看透すとも出来ない程一面に迫つて來ました。だから立ち上つて見てももう川も舟も自分の足も見えませんでしたらう。僅か二三本の葦の旗と、青い月光の降り注いでゐる曠野に上を向いて伸びて居る黒い斑點——イタリー白楊の叢が黒く見えるのみでした。私は腰の所まで青白い木綿に包まれたやうに、月光を浴びて横になつて居りました。そんな様子をして座つてゐる自分の姿を眺めてゐると、何だか妙な幻想的な考が浮むで來たのでした。誰か自分の舟へ這入り込んで來たやうな、又は見透し得ない霧の中に横たわつて居るもんだから少しも目に入るとも出来ない川が、私を泳ぎながら取巻いて居る實體の爲めに元氣づけられてゐる様にも感ぜられました。自分の不安な氣持はだん／＼増して、驚怖となつて、私のこめかみは槌でなぐられる様になるし、心臓は破裂するかと思ふばかりに鼓動し、冷淡とか沈着とかいふ様な氣持ちは全然消え失せ、只泳いでいも助からうといふことを暫く考へて居りましたが、同時にまた其思ひつきが自分にはからだ中戦慄を起さしむる程であつたのです。こうした濃霧の中にあつて何方へ向つて行つて

よいんだかも分らず、川も岸も最早や目に入らないので、重苦しく嘆息をつきながら、また此眞黒な沈黙の水の底にある何か恐ろしいものが、自分を引張り込むんだなと、恐怖に充ちた考を抱きながら、水草や葦などゝ戦つてゐる自分の姿をつく／＼眺めてゐました。

葦や水草の生いて居ない場所へゆくには少なくとも五百米突も上流へ泳いでゆかねばなりませんでした。そしてそれも十中九までは不可能な事でした。だからいくら私が上手な泳ぎ手であつたにしろ、こんな霧の中でこんな意地惡の植物の巻き付いて來るのだから助かり出ることが出来るもんですか。

私はあるだけの意志の力を働かせて氣を静め、道理の分る様にならうとしました。私は物を恐れない様に心掛けましたが此意志の外には矢張り一種異様なものがこびりついてゐるのでした。そして此異様なものといふのが恐怖の念を起らしめたのでした。全体何がこわいんだと、皮肉に自分の胸に問ふて見ました。私の氣強い方の自己が臆病な自己を嘲つてゐました。でも自分の胸に二種の魂があつて其一方のものは他方のものとは別様のことをしやうと欲し、且つ時によると前者が後者を支配し、又或時は後者が前者を統御して行くのだといふ様なことを、これまではこんなに深刻に感じたことはありませんでした。

折々馬鹿らしい、口にも言ひ得ない様な懸念が起つて來て、遂にはそれが増大して無茶な恐怖になつてしまいました。身動きもせず眼を遠方に見開き物音一つ聞き逃すまいとして緊張しきつた耳をそば立て、私はそこに座つて居りました。何を私は期待して居たんでせう。

私には其理由が分らなかったのですけれど、矢張り何か恐ろしいものであったに違ひないんです。若し水の中から魚でも飛び上るやうなことであったら屹度恐怖が身体中にはびこって、意識も何もなくなくなつたんでしたらう。

でも自分の官能の中には、あなたの御役に立ちませうと言つてくれる剛膽な緊張興奮した意志力があつたから、そのお蔭で復た精神の動搖をも押へつけることが出来ました。私はブランドーの壘を取つて、グーと一杯呑むと、渾身の力を絞り四方へ向つて助けを呼ばうといふ考がいて参りました。で大聲で怒鳴りますと、始めは咽喉がもう聲も何も出ないかと思はれる様に止まってしまいました。それから耳をすまして聞いたが——沈黙——遠くで犬が吠えたゞけでありました。

また一杯やつてそれから舟の底へ縦に身体を伸ばしました。眼を開いたまゝ妖怪のことを頭の中で描きながら、かうして死んだやうに身動きもせず一時間も、いや二時間ばかりにもなつたらうか、私は其處に横になつてゐました。起き上りたいのは山々でしたが、敢て起きやうともしませんでした。殆ど絶えず私の意志の力を打ち破つて「進むでゆけ、立ち上れ」と鼓舞しやうとしました。だが恐怖の念が私を強く「不可ない」と言つて引き止め、私の運動を全く不可能にしてしまつた。然し遂々今にも騒動が起つて、それがために生命を奪はれるといふやうな氣懸りな用心がだん／＼と起つて來たので、私は少し身体を起してそして舟縁の上から見渡しました。

平常見て居るものよりも謎の様なもつと美しいまるで不思議と思はれるばかりな而も魔術をつかつた様な芝居舞臺が、殆ど私の視覺を眩惑させてしまつた。其光景は丁度神話の世界にある繪の如く、浮世を離れた幻の如く、遠い國から來る旅人が私等に話して聞かせるがそれを眞に受けることも出来ない風景の如く思はれました。

やがて二時間程も前までは水の上一面に下りて居た霧は今や河の兩岸に引き退いて居つた。そして其處へ集まつてまた月光の溢るゝ中で白雲を被つた連山の様に輝いてゐる丘の麓六七米突ばかりの間へ突き入つてゐました。此岸の神秘的な眞白い連山の間には柔かい銀色をした浪が靜かに而も平等に上つて居ります。頭上高く、青くて小さな雲片の散らばつてゐる空に、澄み切つた大きな満月が懸つて居りました。

水に住む動物は皆眼醒めました。蛙がガク／＼鳴き出し蝦蟆の金屬性を帯びた聲は其短かい悲しそうな單調な訴へる様な響を天までも昇らせてゐた。可笑しいことには、私はもう少しも恐いといふ感には起らず、只自分も萬象も平常と異なることはなく、又何の秘密も持つてゐない様に思はれたので、もう何を見ても自分を驚かす様なことはありませんでした。

遂々眠り込むでしまつたもんだから、どの位こんな風にして座つてゐたか覺えがありません。再び眼を覺して見ると、月はもう沈むで居り、空は曇つて居りました。水は悲しげに滌滌と流れ風はぶ／＼吹いて居るもんだから、寒く暗くなつて來ました。

ブランドーの残りを飲み干してから、齒をガタ／＼させながら葦に吹く風の音や、單調な

水の衝き當る音に耳をすまして聞いてゐました。私は見廻さうと思ひましたけれど、眼の前にある手を見ることさへも出来ませんでした。

闇は段々と少しづつ散ってゆきました。すると不意に何か影のやうなものが私の身体を通りすぎた様に思はれましたので呼んで見ますと向ふからも返事をします。それは漁師だったのです。私の頼みを聞いて、彼はやって來ましたから私の災難を話しますと、彼は自分の小舟を私の舟にビタリと寄せてそして同情の力で錨の鎖を引張つたけれど、錨は動かうともせないんです。

夜は明けたが、其日は災と悲みとを持つて來るかと思はるゝばかりに益陰氣になり、霜でも下りそうな空模様でありました。又三番目の舟が見えたので、手傳つてくれと言って頼みますと、乗って居る人は私達と一衆になつて力を出した所が、ひどい骨折の後でや々と錨を引上げました。錨には重い重りがくっついてゐたに違ひない。何かしら黒い塊がそれに引つかうてゐたから、それを舟の中へ引張り込むで見ました。

それは重い石を頸のまわりに縛りつけてゐた老婆の死骸でありました。(完)

仁和寺

佐宗 濤聲

仁和寺の古き塔扉に薄日さす君と我とは目瞑りてありき

美河なる松に吹く風音和ぎぬ海に對へる我れの淋しき

斷ち難き執着に薄淋の胸抱く男の子の如く春雨の降る

をのこ迄繪日傘翳して橋の上春語り行く平安の京

紫の袴千丈や藤の花ゆかしと見てか舞姫の來ぬ

山科の古き土塀の崩れなどに連翹の殘花心なく散る

たそがれの鐘音は流れぬ三井寺の夢にて我は勢田舟下り行く

蕭やかに温かき寂しき薄れ日の漂ふが如と卯月雨ふる

吳竹のしげみに壁のはの見えて白糸の如と春の雨降る

軽く散れ快よく散れ春の花只軽く散れ快よく散れ

新緑にキラ／＼光の陽の影を白き犬など通り過ぎゆく

灰色の空を背にして敗殘の街の色見るさすらひの人

斷てばまた哀しさ想ふ執着に温める臉春雨の降る

春草の原のつゞける夕暮に懷かし寂し我れ獨りにて

三宅雪嶺博士講演

六十

四月二十五日展幕のため販省中の三宅雪嶺先生に御願して至誠堂に於て御講話を聴く、左に大要を記す、たゞ筆記者の不敏よく先生の熾烈火の如き雄辯を傳へ得ざるを憾む。

世人は高等學校の生徒を以て青年中の最幸福なるものなりとなせり、總て人の生れて順當に世に立つには夫々教育の道をふむべし然るに世には小學校に入るすら困難の人あり小學校に入っても中學に入るは困難なり従つて高等學校に入るは最難關なり、この難關を過ぎし人は多くの中學生中の優れし人にして實に幸福のものである此難關さへ過れば容易に大學は卒業さるゝなり、之はたゞ試験をうけて首尾よく通つたといふ僥倖ではなくして、天賦の才能によるので誰に謝すべきか分らないが生來他に擢んしなり。かくて大學に入りて青年の最上の教育を受くる

者なるが大學にては卒業後の心配が生じて來るが高等學校時代にはそんな考がなく前途は希望に満ち何でも出來る様な氣がする、それが大學へ入ると希望が小となる、されば大學へ入つたのは幸福であるやら不幸であるやら分らない。

斯く幸福のみを與へられるものは一方何かの損があるなり。教育を受くるは大に善い事なるが絶ず學問をなし書物又は何かの方法にて智識を與へらるゝ時には受身となりて自ら進むといふ力が薄くなる。教育をうけし人は世間を大手を振つて行ける人なり然るに世を動す人は教育を受けざる人に多くあるなり例へば現内閣の大臣——大臣を引き合に出してもえらいものだといふわけでもないが——大臣の働き手は教育うけぬ人や試験うけても落第はせぬがよくなかつた人共である、今の働き手の原内相、後藤男、犬養氏も皆規則立たる教育はうけて居らぬ、相

應な成績だつたらうが順當なる教育はうけておられない、殊に大浦子なんかは全然教育をうけて居ない、之に限らず腕利きは教育をうけた人より受けぬ人に多し、之生れつきにもよらんが、學問した人は受入するに忙しいので何かに失ふ所を生ぜしなり、即意志の力が弱りて自ら進み出るといふ所がなくなれるためなり。道理がよく判つて居ても腕まくりの亂暴者に追ひのけらるゝに至るなり。この腕捲くり腕で抵抗するのは大人氣なければといつて亂暴者を通せば亂暴者はいゝ氣になるのである。かく教育を受けし人は智力が進みて意志が弱くなるか、何もさう意志を弱くし腕をにふくせねばならぬとはいふ、彼は智力を受けて一方を留守にするから意志が弱るなり、故に双方に氣を配るべきなり、之を如何にすべきやは勿論校長其外の人々に夫考あり夫々從事せらるゝならんが生徒諸子に

とりては近來よくいふ生活難、就職難を餘り憂へない方がよい。高等學校の生徒は大學へ入ると之を心配し出す、勿論心配せぬ程のぼんやりでも困るが氣を注げていゝが心配はするな。高等學校までせり上げし人は智力は他に勝れし人なり、そんなすぐれた智力のある以上は心配の必要なきなり。之を心配するは自分の智力を知らないのである世の中はなる様にしかならぬ。出來る丈けをするどせよ。何でもない卒業でも多數の人のせぬ事をしたのである、大學を出るまでの事をしたといふ點に於て人に優つて居るのである。かゝる優れた資質を有して就職難などを心配する必要はない、一時は悪しくとも、馬鹿らしく過さずに居れば二三年の中に相當なものには屹度なれるなり。面白くない時を経て初めて面白くなるものなり。困難は愉快の前提となすべきである。心配し出すと限りがない

い。パニックは心配せずともいゝ事を程度以上腕自慢の人が勇を誇り學者は機械なりと輕せらに心配せるなり。されば心配せぬ習慣をつけよ。れて、えたいのわからぬものがしたい放題の事高等學校在學中の意氣を以て大學に入らば愉快をなす。勿論かゝる人のなす事は先の知れたるなる大學生たり得るなり。現今の如く妙に超越ものなり。かゝる人には權勢も力も直に消ゆる苦勞するは老人のなす事にて青年にはまだ早い、ものなり。されどかゝる輩のあるは面白からず。青年時代からそんな苦勞すれば老人になつては之を追放するは高等學校在學中の意氣と希望を益苦勞だ。就職難、生活難で食へなければ多く以て世の難を蹴破り出んか彼等は馬鹿に見ゆる食はぬがよい。

此の困難がまた面白きなり。面白くないといふかく受身的に書物によまるゝことなく智力に加のは神經質に超越苦勞せる故なり。大抵の事はふるに意志の力を以て活動せんか鬼に鐵棒にて何でもなきなり、勿論どうにかなるだらうとい匹敵するものなきに至るなり。今日の鐵棒ふるつて打捨てゝはいかぬが。頻に頼み廻るは醜し、ものは大抵教育うけぬ鬼のみなるが、かく教育急ぐ故に稼人の如くなるなり。實際大學出た人うけし人が力を振つて立たば、佛に鐵棒とでもと出ぬ人とを比ぶれば出た人は少數にて何れもいふ様なものになるべし、即鬼を追ひ拂ふ眞實世間に用ひらるべき人なり。彼等は徒に急ぐ故の力を得るにいたるなり。元來高等學校の在學失望するなり。大學生が減すれば世間は立つて生はよりすぐりの幸福の優秀の人にありながら、行かぬ程の權威を有するものなり。後には最不幸なる人、教育を受けざる人に追は

るゝに至るなり。彼等のかく腕を振ふは以てたの面倒なら左迄恐るゝに足らざるも將來箇人とのむべき學力なければ他人を逐ひ何か爲さんと箇人との競争となり突進的の米人、獨逸人と競争するなり。されば徒に受入るゝことにのみ走らみなしては用に立たず勿論この種の人物も入用す意志の力を養ふ様になす僅の注意によりて教育なきものに追はるゝことなきに至るなり。なるが半分以上は飛び出すべし、飛出す以上は

自分は教育をうけ受動的となれるが生來の資質の信念を持して出發し突進するの興味を持し奮のため、又書物が面白く、面倒な事が厭だつた闘の快。福を考へて進めよ。

から一介の讀書生となつた、之は以前の社會な高等學校在學中はかゝる考を抱くものあらんもらよかつたが今日の様に列國との競争の時にあ大學に入りては考が異り出して頭が變に光り出たりては斷じて不可である、自分も今少し早くして愉快な頭でなくなるなり。現在の様な愉快此の點に氣がついたらばと思つて居る、此所にな頭があれば天下は我が物である、これなき故ある諸君はすぐれたる幸福なる人なれば書物に無教育者が文部大臣にもなるなり。

讀まるゝことなく智力の吸入に急にして自分の教授諸君校長も大に努めらるゝことゝ信する故力を伸すことを忘るゝが如きことなくば變なに之についてきかれたならば十分考を述べらる連中の我儘勝手を防ぎ得べきなり。

對米問題も今日の如きに止り國と國との交際上が。又現校長は實力より内輪に見らるゝ人と信

する——或はそうでないかも知れぬが、之は決して受身になりて實力を出されぬにはあらずして相當な時に出さるゝ者ならんが其儘にして出さずにおらるゝと損である、諸君がもつといろいろたづねると面喰ふ程に出る程の蘊蓄があるのである、その校長をそのまゝにしておくのは智慧のなき話なり。決して褒めるんではないが全國中有數の良校長であると信ずる。

今や外國とは箇人の競争なればこの大勢に注意すべきは校長も十分呑み込んで居らるゝ故今後諸君が順序を踏みて問はるゝ時は十分に答を與へらるゝことに客ならざるは自分の保證する所である、雜駁な無駄話の中失禮な事もありましたらうが旅中の恥はかきすてどかいふから旅中の事と御容赦あらんことを。

(N 記)



四 高 短 歌 會 詠 草

大 谷 繞 石

○
いつからの蜂の巢に名の經藏も見るものにして奈良の寺かな
巢立ちして間無き雀の親まねて啼くにも似たる彼とさびしむ
三抱の櫻大樹に蔽はれし繪馬堂に朝人一人居ぬ
豆撒けばバツと立つ鳩に寄る鳩に社前の櫻吹雪して散る
二里と聞く道一里來て猶二里と云はるゝ心地書架を見上ぐる
語らはん人來よかしと思ふ夜も雨しきり降り暮れ春にして
げんぐの毛毯を丸く束ねしが捨てられてあり道芝のうち
日曜の朝夕鳴らす教會の鐘耳にあり薔薇の花垣
別るゝと云ふも名のみの夏毎に歸り來べしと云ひて別れし
明日立ち人夕の散歩行き慣れし勸工場にも立ち寄りて見し
かにかくも云ひ慰めて別れたる川岸道の夜暗かりき
いつからの日を好まざる身となりし雨細き夜よ蟲すだく夜よ
いつからの汲ますの井戸の蓋朽ちて苔蒸してあり椿かつ散る

猶我を幼きものと小包の度に菓子など涙ぐまるゝ
汲まぬ井の底の深さを覗き見る我顔遠し心慄く

この春もかくて過ぐるか幾春をかくて過しぬわれうとましき

しめやかに語らふによし裏畑に蛙鳴き初め小雨をば降る

庭隅の井桁に近き山吹の雨に暮るゝに歌心わく

棹させば届かぬ深き岸遠き川の真中にある如き哉

篠原 水衣

○

還るべき巢さへこぼたれ鳴く鳥のうらぶれてのみ生くる我かな

隠り井のたゞにしぬびてそこしへにおごめる水と思ふはかなさ

白露の結び捨てたる夢もなほなつかしきかな行く春の宵

思ひ出の苦に堪へかねて一ときも忘れぬすべをいつかおぼえつ

更くる夜の静けきさまに我を待つ世とし思へば事もなく生く

うつゝなき日はうら悲し川べりを一足ごとに心つまづく

夢破れぬ深山もさやに鳴る瀧の風にとゞろく谷の一つ家

語りなば死ぬべかりしをともしればさせる事なく人のそむきし

井田 美絃

○

いづち行くさだめもわかぬ身にしあれば送らるゝてふかなしきこの日

み腫にうつせし影のこの刹那消ゆと思へば泣かれぬるかな
鐘が鳴るあはれ床しき鐘が鳴る放課の後の種々のたくらみ
井戸端に散る齒磨粉見入りつゝ故里おもふ旅の朝かな
思ひ出の真白き花をはぐゝむ日今慕ひつゝ我送られむ

鳴澤 寡愆

○

暮るゝともクローバよ汝をうす闇に思ひつゝくる人を忘るな

二つ三つうす水色の窓わくに顔並び立つ朝の校舎よ

井桁により人思ふとき水向に櫻若葉に洩るゝ日光

うら悲し葉櫻かげのわが母校その窓わくに吸ひ寄る心

鉦が鳴る修道院のたそがれを雨いたましく紅椿散る

杉本片帆

○

うらぶれて来るになれし枯草のこの原今日も人あまたをり

我が母の持病おこらざれと願ふなる櫻散る頃如何に淋しき

あまたなる紅きばんぼり立ち並ぶ務さきより歸るさのみち

小原 蟋蟀

○

森にゐるが如き心地すこの家にて我が歌人を送る初夏

もどかしさは語らんとしたためらひつ由なきことを云ひて歸り來

蜂の巢を一つ見出し、多衆の子供集り騒ぐ春の日

○

佐藤曙汀

見せばやな夜な夜な君を送り来てなげたる石のうす高くなる
君送る田舎道こそ樂しけれ我が語らひをきく人もなし
血もて染めし紅き手紙の節々を胸に刻むか五月の夜
とぼく／＼と歩めば悲し歌わきて歌へど悲し物と思へば
停車場の瓦斯のあかりに只一人送りし人をあかす眺めぬ
夜をこめて書きつらねたる文殻を火鉢になげしあとの淋しさ
いと遠く川瀬の音のひき来る田舎の驛に君を送れる
幻はいくつともなく我胸に燈とし頃に來ては語りつ
うつろなる心の奥をかきたてゝ逝くや二つの幻のかげ
南國の春を追ひつゝ巢を去りし燕のごとくはなて袂を

○

加藤日色瑪尼

綾菊がお七の戀を語るとき軒をかすめてつばくらの飛ぶ
わが夢を青き古銅の壺に入れはなむけとして君に送らむ
瑯玕の相ふれて鳴るさゝやきか君とわかれて唄のあはせか
初夏は青き小笛を鳴らしつゝ枝より枝に緑をば播く

散る花の白き吐息と青き夜の星の光と纏れ合ふ宵

送る宵くづれ土塀の露路行けば紫色の桐の花散る

わが友の皮肉をきゝて快よく微笑みながら默せるはよし

年若き尼僧の戀を思はせてほろ／＼と散る梨の花かな

何となく心さびしき夕なれば花散る背戸に夕月を見る

吾が友の秘密を語る繪日記を懷にして森に入りし日

美しき詩集と菓子を求め來て巢ごもる如くわが室にゐる

○

朝倉思鶴

此上に悲しみ増さば地の底のこほろぎの音に小さく鳴かん

蟲に喰はれ疲れて落つる石南花の葉を思ふとき雨の降り來ぬ

ひたすらに遠き黄昏の山道を望むが如きこのやる瀬なき

悲しきは春雨すぎの夕ぐれの心の虹の色つやのなき

握りしめし小鳥の逃げし椽端に春送るより悲しきはなし

麥九寸飛びちがひたるつばくらの鳴く聲ちゝと春雨の降る

見らるゝが悲しと胸に右手あて左に思ひたどる往還

春の日は赤き正午の山に流れチャルメラ聞ゆ満州の村

今日初めてつばくらめ來ぬ北國は柳の葉かげ濃やかにして

ふどころ手春雨町を歸りきて燕鳴く窓暫く立ちぬ

クローバの上に打伏し地の香強くかゝんと眼をこぢてかく

灯ともし頃コップに生けし菜の花の開ける數を調ぶさびしみ

篋三つ春雨細く黄昏れて小督の墳に櫻ほろ散る

北海の高鳴る潮を夢に見よ戸室嵐を幻に見よ

すく／＼と筆立てに立つペンと筆中に小さき黄の造花

ふどころに母の便りをいぢりつゝ窓に山見ぬ燕飛ぶ頃

送るには余りに淋しこの葉書終りに歌を小さく書けり

唐繪濃き中啓もよし公任の直衣にかゝる山吹の色

歌讀まむ心の起きて敷島に火をつけし時やゝ心地よし

旅人の見送る木曾の山一つ月入らむとし星のみ光る

歌よみて君送らんととる筆に矢立の墨のつかぬわびしさ

平 泉 澄

かりそめの交りとのみ思ひしが別れて幾日え忘れられず
胸に手をあてゝ寝しかど夢も見ず歌日記繰り追憶を強ふ
友を送り只身一つのかへるさを落日の影線路に横たふ

龍 溪 玄 深

華やかに夕陽榮ゆる森の上鐘紅緑を揺がせて鳴る

別れては君の歌のみ思ひ出に生きてありなん送るはかなし

其後の君は其後の歌のうちに見んと思ひぬ君を送りて

古井戸の水新しく日に絶えずわれは情を汲みて生きなん

山 本 白 聲

ほんやりと宿に歸れど懷手出すに由なし暗き部屋かな

我が頭目の暉似てうるみあり灯の熱さよ春にえ堪へず

小糠雨庭の木立に泌めり朝父のわけなく酔ひし思へる

教室の窓際の頭暫しの間じつとしてあれ雨晴れし午後

揺れてあり青葉揺れてありその影に君を送ればうらかなしけれ

八月八日

(一)

妙高山にかゝつてゐた雲はだん／＼うすくなつて二週間も降りとはした長雨もやつと止み相になつた、ふと昨日こそ無暗にふられては又昨年のように洪水になるかねと向鉢巻で一寸腰のあたりを藁でからげてゐた村の人がいふた言葉が思ひ出された、一尺ほごにもなると思はれる稲の葉先もやつと一二寸しか水面に出ていないのも淋しうたその上永らく吹いてゐた休みの法螺の貝の音も耳底に残つてゐる遠方の堰には轟々と水をはかすひきも冴えてきこへる、私の小供の頃にも時々出た大水の事が今でも明瞭と思ひ出されるので何も心配要らずの私迄もはつと一息ついた、といふのは何も仕事には關係ないが毎日のやるせない倦怠が心髓迄も浸み込み相で朝から机に座つたきりでそろ／＼麻痺も覚える、私はこんな状態をひかへていたのでこの晴れかゝつた空に感謝せざるを得なかつた

だというて元來沈鬱な性な私にはそんなうみかゝつた景色が何も大した刺激を與へるといふでなしそれよりも松の陰で小説でもよむ方がよほど好ましいのだ、が近頃不意とした事から急に或物にひかされる様に天氣さへよければいつも同じ麥畑の中の青い葉を別けてとびはなれてゐる鎮守の森の雀を劫してK氏を訪れるのが日課のようであつた、何にしろ毎日行くかと問はるれば何

も答へはないが一つはK氏にはをさ／＼怠りなく注意していたし又あの人には私に解けぬ謎の様な蟠りが彼の人の周囲をとりまいてゐたからだ。

これで二週間目で訪問と思ふとその間も長い様に思はれて足の運びも次第に早くなる

正午過ぎであつた、そろ／＼村の人も田圃まわりに出掛けた雨に倒されてゐる麥の傍を通ると「如何も雨許り降りやがつて……雨の要らぬときはばかに降りがてな……それでも洪水のこない丈が取り柄だ」などと一人の百姓がこぼしてゐるのも聞える私はそんな事よりも今頃はK氏が時計の針を見乍ら待つてゐるだらうと思ふため足早で通りすぎた一年に一度しか返らぬ私の姿！私は出かける毎に私の帽子や姿が馬鹿に人目につくこんな田舎の土地たゞ自然の暴威のみがあるより外に知らない人、私はそれ等の人の前で私が見くれる度にそれが一種の虚榮の様に思はれてならなかつた空虚なバニテ、ハ、が無造作な人の心に影を映すそれが罪の様なでなかつた、空氣澄み通つて鳥の翔けるのも殊更に早いようだ、道の濘み許りが田舎の特長かと私は哀れを弔ひはつつ行くそうした中にも行潦にうつる日の光がまぶしく反射する。

七八里源を上にかのぼる保倉川は今日は泥水で一杯だ私がいつもすゞむ砂も草も水の下になつてゐる一濁つて。川杭の列がほんの頭だけ出ている、ひや／＼かな風がかほると柳のかよはい枝垂をふるはせる、細い影が水に泣いている、私はこゝへ來て見遣つたK氏へはもう一息と走つた大きな榎の左に折れてゆくともう二三丁となつた。

(二)

K氏は案の掟よろこんで迎へた

金蓮花や日廻り草の咲いている中庭をへだて、野菜畑をひかへている室にはみづみづしい草花が小さな花瓶の中でK氏の机に興を添へてゐる。

K氏は由來律氣な人であつた、私ははじめてぶつかつたときは二人の間には廣い間障もあつたが月日のすゝむにつれてK氏の面にも如何やら柔いところが見え出して此頃では大抵の事をも打ち明ける様になつた、私は余り穿鑿すきてある。罪もどがない人そしてこの人の秘密を目的にして……然し私はこの親密を大切にしたい。

K氏は話したそれに依れば刈羽の人であるそうなそして都合あつて此の地に轉住したこの事だ今は氏は私の小學校の理化學の先生である、私は時々生徒を捕へて先生の様子をきいて見た、どれも〴〵良い先生としか云はない遂には逃げ出す様になつたので私はK氏が云ふた「都合あつて」といふ言葉は如何しても頭の底からとれない時によつて私には一種の呻きとなつてゐるのも解るが馬鹿に振つて見る事もあるがせつら笑ふ様な思いがいつも私の態度を批評している私はそれでも如何かしてこの事を發きたい氣分が始終ある、何かの機會を得よう〴〵と力めてゐる、私は運よく今日その事をほじくり出した。

「貴方の父さんはまだ御壯健でいらるね」。

と私はそれとなく云ひ出した私は秘密の鍵は家庭の事から初めるが得策と思ふたから。

「まだ丈夫なものですよ」いつもの様な安心した聲であつた。

「母さんも」。

「そう……彼はうなづいた。

「御兄弟も……」私は云ひかねた。

「あるかといふんですか」彼は茶をさし乍ら庭の日廻り草を見て聞き返した。

「ありますとも弟も妹も」とつぎたした。

風かスーと入つて來た花瓣は硬い力に堪へがた相になびいた外には里謠のなまめかしいとぎれとぎれのがこの風にもつれて來る。

「私の方でも今頃は田の草とりですよ」とK君は國の事を不意に思ひ出した様にいひ出した。

「貴方は御休みに御歸りになりませんか」僕は何よりも彼の事が胸の中に燃えてゐるのでこう云出した。

「だつて仕方がありませんからね」と答へた許り。

とぎれ〴〵な話に先刻の御茶も半ばさめた私は一息に吸つて澁い快感を味つた。

「何か差し支えでも」私は滴りを拭い乍ら云ふ「何もかも私に打ち明けては下さいませんか」私はこの機會を逃す事をおそれた。

「あるんですかね」と彼は私を一寸見て信頼したといふ目なざしを漂せた「貴方丈に云ひませう」といはれたとき私は人知らずよろこんだ、茂つた夏草ねむ相な蝶がクローバの上を這うてとんで行く私の外には限らない空漠があるのみである

「御話した通り私は刈羽でしてねそれも柏崎のズト在方ですからそれは邊鄙なところなんです私は父の三番目の子です私の覚えてゐるには……と子供の時分の事でしたね……」。

この様にK君は柔く語り出した、私は傾聴してゐる二人の間には何もない振動した空氣とその度毎に來るK氏のなさけない追想私はいよいよ靜になつた。

「私の覚えてゐるには私の家は藁葺でしてね在方ではよほど廣い家なんです、父はその時分には四十、五十で元氣がようございましたよ、で種々と村の世話もしたと思ひますがね學校をたてるといふ大勢宅に來て相談してしまひには喧嘩までおつぱじまつたがその時父が大きな聲で怒鳴りつけたことだけは今でも臍乍らも思ひ出しますよ、後に色のぐす黒い評議員だと覺えてますかー色の人は御前の父親は恐ろしい人だと私に告げたのを知つてゐますその頃叔父が信州に居て大分企業に失敗して澤山金をとりよせたこともありますそんな具合で……」。

と調子にのり出したまた煎じ代へた茶をつぐ私は初めの通り。

「そんな具合で父も大分顔がひろくなりますといろんな人が來ましてね尤も父はそんな教育といふのもなくたゞ自分の頭丈でね土藏の奥へ行くと虫の喰つた古い草紙が張りつけてあるあれが己がせつせと書いた御手本だといはれる古い内山紙の半切れがあらはれた父の經歷を示してゐますがね、まあそうして居ると奸い奴がありましたよ、私の父は如何した機みか投機に手を出してよせばよいのにそれが人間の慾なんでしやうどうくやられられたです私は今から考へ

ると所謂外交員なのでせうまたその後請人辨濟で法廷さはぎその時の判事が父の友人なんでしたようです父はあんなときは友達なんでだめだこぼしていたが終には失敗して費用全部負擔こうなると結局は頭の問題ですね、余程金もいりました」。

彼は眞面目であつた實際眞面目であつた、私はあの人の家庭とか父なる人に如何しても同情せねばならなかつた少くとも彼の態度に感謝せねばなるまいと思つた、そして不可解と思つたはむしろ哀むべき敗殘の骸に對して一種の冷たい情緒かつきまどふてゐる。

「父はその時分から勸誘人を大におそれ鬚のある人は如何いふものか父には氣に入らなかつた、私は子供心だと云うてもその時分はもう十六にも寂れて行く家の回りが悲しかつたその頃から父の性格が變つて來て今迄の、しやばり主義が次第と退縮主義になりましてねそして私は父をよく考へて見ましたいよ、皺が多くなり額の上の悲みの跡や白髪も次第に増へて行くあはれな人とつねに胸に抱いてゐた、そんな譯で母迄も難儀の渦の中にひきこまれたです、家のまはりを深く圍んでゐた杉林の代りに西瓜や南瓜が植えられましたがね、私は小供心の爲かその方がよほど嬉しかつた様です」。

こうして行く彼の方の話も大分進んだ様だ。

「父はその頃から教育といふものを用意しましてね尤も兄はもう一人前なので信州の叔父の許へ行きましたで私はなし、の金の中から新潟へやつて貰ひましたその時は十七の春で私も分別が充分つきましたからそろ／＼家の觀念が明瞭すると私の身体からだの置く範圍が次第にせばめら

れて行きこの頃には私の一種の過渡期でしたね學校に出ましてから直きに此所へきました、弟は今矢張り新潟に妹は長岡に居りますそれ／＼私から貢ぐのです實際その事にあたる苦しみがありますね」。

彼は話を終へて歎息とした私は動かされた、氣の毒と思うた私はK氏の顔に擴がつてゐる曇がすべての世の不如意に對する不満ではなからうかと感付いた、不満！ほんとにK君は不満の人かしら疑問はたゞこの一点に集注した。

日は余程西に傾いた庭の草花が長い影をヒヨロ／＼と浮ばせてゐる、妙高山の連きは背の方に夕日を受けて嶺の雲が紫にかはつて行く妙高に對して東にある米山も矢張り夕日を浴びて夕ばへの空にとび出ている片割月がかすかに東の森の上にかゝつて峙に赴く二つ三つの鳥が面をかすめた、あの向ふの山の遙か彼方夕鳥の歸る方にはK氏の故郷がある、同じ日同じ月同じ山を眺めながら額の皺に銀波を漂せ乍ら逝く日の淵みを悲しむでいるK氏の父などの事が思ひうかぶ。

突然郵便が來たK氏はとび出して受取つた。

「マイデーア」K君は云ふた。

私のその手紙の主が知りたかつた。

八月九日

私共―勿論K氏と私―は座つた、青空を掩にして同じクッション―然も美しい青緑の―の上に黙つて座つた、眼と眼の交換、体と体の對照この外には何の飾りもない、K氏も私も陶然と夢の様

に暫く靜として居た。

K氏は突然しづかな空氣を搖せた、唇の下から流れた呼吸のはづみに彼は不堪の色をなした。

私はつらく／＼私の間が此様な境遇まで運んできた次第をよく考へた、知らぬ人とまだ見た事のない人とが出遭ふたそして長い間沈黙してこれ迄來た、不意に運命の手は私等をして握手せしめた、私は不思議でならない、私は血と血の連絡のこまやかさを知つた私は水と血との混合の私共を考へて見た。

私は一寸した機會からK氏の友のS氏から來た二三の手紙を發見した、彼等の甘い享樂の淵の深さを計らんとした。

第一信(四月中旬)

私は近頃欺かれたような心持いたし候

私はこれ迄自然と遠り居り候休み以來貴方と別れ候へしより以來心なき身は何の術もなく六疊の室光の壁に這ふよと見るまにいつしか暗も入りこみあるかなきかの如き掛物のうすくらがりの中より幽靈の如く浮び出で居り候前に終夜まごろみまことに假の宿りの草枕と存じ居り候も何となく心もどなく御座候、明け暮見るものは同じ水の流れ變らぬ鳥の訴へる様な悲しい様なメロデーのみにて御座候、愁人の爲めにとゞまらぬは只沉湘のみにては無之私が庭

前のいさゝ流れ迄も行き歸らぬ水の流れよとてすぎ去り居り候さればこれとても今は早や遣瀬なき胸の悶へと悲と競ひ居り候夜になりゆく程に南面の格子窓有之候へば映れる月も掬すべく候へども月見ればと契りし異郷の人もや袖ぬらすらむとのみ思はれて心もいよゝ猛い胸の緒環いよゝじごろに相成り候、去りとても何事にては泣くらむと想ひ給はむも宜に御座候が古の人の言の葉「何事をいかに思ふとなければかぬ秋の夕暮」思ひ出されそれは秋これは春の半ばに御座候へどもいまだ寒き今日此頃の月いと昔を忍ばれてひたすらに忍び音に泣き居り候

せめては中心の友の夢をもと思ひてわびしく床に就き候へば淺茅が宿も忍ばれず起きて靜然に思へば深夜聲なく時に糸柳の窓をうち候へば中々以て忘れられず候

佐渡ヶ島より洗桶にのりて通ひしときゝ及び候へば夢にもやと存じ寢につけば如此私近頃いよゝやるせなく相成り候、今一度相會ひまほしきは山々に御座候へども現在如此遠くへだて候へばとても叶ふまじく只々筆の雫に任せ一筆差し上げ候はるゝと思ひやらるゝ海邊の方の眺望二千里の外もと歌ひし古の人の心も今更めきて私の心につきゝしく御座候

目下青々しい若芽も出で候に何となく樂まれず候まことに欺かれたる様に感ぜられ候小生が苦しみ幾分か減じなば生々しき便りもいたすべく候 早々

四月十二日

刈羽の里 繁雄

K 君へ

私は讀み終はつてK君の様子を窺つた依然天をながめて何か考へてゐるらしい、私は又一葉の繪葉書を見出した、池邊の芦の生へてゐるところに數頭の牧牛がゐる畫だ、萬年筆のなすり書きで此の如く

過日級生をつれて水浴に參り候嬉々たる兒戯に半日の快晴を心よく費し申し候小さき体敏捷な運動今なほ網膜に髣髴いたし候よつて兄のため快を分ち申し候 早々

七月十五日

繁

雄

K 君へ

と書いてある私は更に一枚二枚とくつて行くうちに次のたよりを見付けた。

長々の御無沙汰定めし御氣嫌も損はれ候ことゝ存じ候、何卒御容赦下され度願上候、前以て御知らせ候ごとく小生暫く病氣におかされ昨今漸く舊体に復し候間御安心下され度候

長々の間に御座候へば云はむ事も中々數多く故づきて述ぶる事も叶はず候へどもさりとて人やりならぬ業に御座候へば無精をも顧みず一筆かなぐり申し候

さて空蟬の世ども申候へば萬一やと思ひ日々行方なき涙の日のみ送り候ところせめては父母の顔今一度なりとも見ん者かとは心に念せし甲斐有之漸く今しがたさすらへの身と相成り候、八百萬神もあはれめたらちねの我れ待ち得んと絶えぬ玉の緒を詠じ申し候池田の驛が娘も思ひやられ何となくすゝろはしう存せられ候事も再三には無之候又あまたゝび行きあふ坂の關

水に今日を限りの影ぞかなしきと歌ひ給へるは水の流れ見ての事に御座候が私事は時を定めぬ生命なればまたいつか御顔にまみえん事を得るかどあれやこれやに心なやまされ胸も塞り心も狂ふ許りに御座候或時は月は輝けるもの故に姿見えぬ事あるまじとさしぞけば叢雲のかゝる例にもれず淺墓なる計畫何卒心中察し下され度候

今は古りし事皆いひがひなき物となりし事は上帝の助けかと存じ候さては來るべき休み待ち居り候一葉落つれば天の下秋になりゆく今日此頃いかゞ異郷に起居あそばさるゝ事やらむ伺上候

ほろ／＼となく山鳥のこゑまことに骨身に徹するかとばかりに御座候今は身体も丈夫にて時偶撥もつ事は存せねど、桂の風葉をならす夕には潯陽の江を思ひやりて源都督が流を習ひ松のひゞきに秋風の樂をたぐひ水の音に流泉の曲をあやつる如き昔の人真似も禁じがたく蠻聲を振りまはして原頭にさまよひ居り候 早々

九月十日

繁

雄

K 君へ

私はK君見たK君は依然として空をながめている

× × × × ×

(終り)

紫の花——佐藤曙汀

紫の花よ散れちれ初夏の高き香りに耐へ得ぬ我れに。

春去ればやがて枯るゝと知りながら花に吸ひ付く虫のはかなさ。

しばしとて活花の花眺むれば枯るゝも知らでめでたかりける。

物云はぬうまし乙女の面の如と薄紅色に五月雨の降る。

紫と紅も色もて此の心畫かん術も知らぬ此の身に。

物すべて薄紫の夢に似て我が世は夏のよそほひに入る。

恐ろしく尖れる角をはづれ來て觸れて見よとや三角の云ふ。

紫の桐の花をば若草の上に置きたる夏のよそほひ

初夏の強きしげきに耐へやらで今日も來しかな新墓の邊に

山川九州大學總長講演

八十四

五月六日至誠堂に於て山川九州大學總長の講話を聴く、左に其の概要を摘記す。

凡そ人間として國家なき人間、國家を有しても其の國に於て他國民あしらひされ十分他の國民と同様の權利なきもの程不幸なるものなし、即ち第一に亞米利加の黒人は純粹のアメリカ人にしてしかも今日は法律によりて白人と同様に待遇されず、第二に波蘭人は昔は強國にて大に榮へしがロシア、ドイツ、アウストリアに分割されロシアにては他の人民と同一の權利なく、獨乙の臣民としては種々の法律にて苛酷に取扱はる、第三はユダヤ人にして古き昔に建國し耶蘇の如き大偉人を出したるも二千年の昔に國は亡び人民は奴隸とせられ彼等は歐、亞米の大陸に撒布せるが他の人民同様の權利を有せず。

此の猶太國の亡びしは紀元前後なるが其後諸國に分住せる彼等は非常に迫害を受けたり、されど文明の進むと共に單に人種宗教の差により之を虐待するは人道に背くことなるを覺れる故近來猶太人の虐待は英國、米國にては法律等には何等の虐待の事なきも社交上には矢張り虐待を免れず、更に大陸にありては虐待は旺にて殊に甚しきは露國に於てなり、之より露國の猶太人の状態を語らん。

猶太人千萬人の内五百萬人は露國にあり、初め露國の政策は猶太人撲滅策、國外追放策なりしが、第三回波蘭土分割の際に波蘭土に多くの猶太人ありし爲め到底かゝる政策の實行不可能なれば之を改めて猶太人を一地方にのみ住居せしめ國內の自由旅行居住を禁ずる政策をとり、西部南部のルーマニア、アウストリア、ドイツに境する十五州を居住區域となせり、この十五州と

ロシア領波蘭の十州をも其の居住區域の如くに見らるゝ故猶太人は西部の二十五州の居住區域の外へ出るべからざるなり、然るに猶太人はロシアの人口の二十四分の一、此の二十五州はロシア全國の二十四分の一なればこの居住區域に猶太人のみ居住して他の人民が住まねば障なきも他に數多の住民あり、加之この二十五州にも勝手に住居出來ず市町若くは村の町に準せるもののみ限られ村落には新に居住する事を得ず、故に猶太人は露國領土内の小部分に居住を許さるゝわけにて其結果生存競争激烈を極め甚しき難儀せり。

されど之れも絶對的に禁せられたるにはあらずるが一定の條件を附せられたれば其の手續の煩しきため自由行動をとれず困難せり、例は大學生は居住區域外に住むを得るは一見よき様なるも之は大學所在地に限られそれより一歩出づれば警官により居住地に送り還さるゝなり、一大學生の肺病のため轉地療養を命ぜられたるため轉地せしもの發見せられ送り還されたる如き此の例なり。

又猶太人の兵役に服する時は勿論區域外の居住は許さるべきが其の際には兵營外に出るべからずとせりされば休暇を利用するには其の居住區域に歸るべきなり、故に猶太人は休暇を賞與せられても營内に居るより仕方なきなり。

近來歴山二世は進歩的思想を有せし人なればロシアの奴隸を解放し猶太人の迫害も薄らぎしが今帝歴山三世となりても矢張迫害旺なり。

露國官吏の法律を曲解し法律を無視し猶太人を迫害するは之を裁判に訴ふれば或は勝つことを得んも時と入費がかゝり反つて不利なりされば猶太人の海外移住者は年々十萬人に及び其の移住者が壯丁なる時は明に外國に歸化せるも死亡

せるも召集に應ぜずんば其の親戚は參百圓の料に處せられ其のため公賣處分となれるものもあり、かく警官が手先となりて迫害する故其の手心によりて人民は難儀する故警官に賄賂行はれ其の賄賂の額年に貳千五百萬圓に及ぶと、次に猶太人は官立の陸海軍の學校等には絶對的に入學を禁ぜられ中學程度にては入學し得る數を規定しベテルブルク、モスコフにては猶太人は全体の三パーセントを超ゆるべからずとせり、其の他の居住區域以外にては五パーセントを超ゆるべからず、居住區域に於てすら十パーセントを超るべからずとせり、實に不都合にて居住區域には猶太人は八十パーセントありて如此なことは中學校の中學試験は競争激しく到底入れねば區域外に出んとせば親が小兒に附添ふことを許されざるの困難あるなり。されば青年は最早猶太教をすてゝ回教徒となりたりといひて入學せ

んとするものあり、彼等は實に信仰を偽はりて料に處せられ其のため公賣處分となれるものもあり、かく警官が手先となりて迫害する故其の手心によりて人民は難儀する故警官に賄賂行はれ其の賄賂の額年に貳千五百萬圓に及ぶと、次に猶太人は官立の陸海軍の學校等には絶對的に入學を禁ぜられ中學程度にては入學し得る數を規定しベテルブルク、モスコフにては猶太人は全体の三パーセントを超ゆるべからずとせり、其の他の居住區域以外にては五パーセントを超ゆるべからず、居住區域に於てすら十パーセントを超るべからずとせり、實に不都合にて居住區域には猶太人は八十パーセントありて如此なことは中學校の中學試験は競争激しく到底入れねば區域外に出んとせば親が小兒に附添ふことを許されざるの困難あるなり。されば青年は最早猶太教をすてゝ回教徒となりたりといひて入學せ

之を文官の方面に就て見れば數千人の法官の内近頃迄は一人の裁判官ありしといふ、又遞信事務の鐵道の方には機關手に數名指を屈する程の少數あるのみにて郵便の事務の方には一人の役

人もなしと學校の正教員は上は大學より下は小學校に至る迄一切之を禁じ僅か大學に二三の講師あるのみ、甚しきは家庭教師をも嚴禁せり、辯護士、公證人は司法大臣の許可により認可さるべきものなれば又なるを得ず、されば教育をうけても之を利用して生活出來ぬ有様なれば之法律によりて迫害さるゝものなり。

千九百三年三月のキーエフ虐殺事件の如きは人民蜂起し猶太人を老若の區別なく殺戮し婦女を辱めしが警官憲兵は見て見ぬ振りして暴行を恣にせしめたり、かくの如く實に信すべからざる迄猶太人は迫害さるゝなり、かく迫害さるは猶太人は露國に居住するも猶太人の國家なく他人の國の居候なればなり、即國家なき人民の最悲慘なる一例なり。

我大和民族がこの日本國を組織し萬世一系の皇帝を戴き内にありては法律によりて人民は平等猶太人は世にも優れし人種なり、彼等は二千年

以來あらゆる迫害を受け、かゝる不幸なる位置 念之なり、之あるが故にロシアに勝てるなり、戦にありて彼等の血統を保ち宗教をすてず迫害に 争は只數に於ても金力に於ても常に劣り武器は堪えたるは實に彼等の優れし所以なり。キリス 比すべからざる程に劣れり、かく一切は我に優トを出し、スピノザ、ビーコンスフィールド、メ ンデルソーン、ハイネ等の偉人傑士を雲の如く 愛國の念の優れたるの故に外ならず、されば若に出せる猶太人は實に大人物の人種なれば今日 しこの忠君愛國の念の日本人に失はれんか最早まで存在せしならんも大人物の人種ならんば 我日本は國を保つの武器なき國となり猶太人と已になきなり、不幸我大和民族が彼等の位置に 同様の境遇となるか絶滅するかの外なきなり。あらんか、彼等より劣る人種ならば大和人種は されば是非諸君と相はかり忠君愛國の念を失絶滅せん、果して彼等の如く優らんか彼等猶太 はざらんと欲す、諸君は大學に入り上流、一思想人の如く迫害されん、されば我國を飽迄、何處 上の上流に立つ人なり、諸君が忠君愛國の精神迄も保存すべきなり、而して其方法如何、一切を大に有し興國の策をめぐらさば國を大にすべの方面に於て之を見るに今日は危急存亡の時なく、總てのものに於てこの念を缺かんか國を失り、我國は富力に於ても國の文化の程度に於て ひ人種の絶滅を來すべきなり。之判りきりたるも何れも外國を凌ぐこと能はず而して現在我國 ことなれども、然し國家なき猶太人が斯く迄迫民の戦争平和の兩方面に於て歐米人に負けざる 害さるゝるは知らざる人もあらんとてこの講演ものたゞ一あり之實に我武器なり即忠君愛國の をなしたる次第なり。

(N 記)

三畏齋賸稿

赤井直好

子浦村忠魂碑

明治三十七年二月、露國構難也、清之旅順爲其水陸重鎮、我軍攻之、奮戰激闘、殆涉一年、遂能拔之、敵勢自是頓挫、以至媾和、其功亦偉矣、石川縣羽咋郡子浦村人、屬第九師團、戰歿於此者七人、其忠勇義烈、皆出於一心報國之誠、真可嘉尚也、頃者村民相謀、欲建碑於村南蓮華山下、以傳偉勳於無窮、既請元帥山縣公、書精忠報國之碑六字、而刻之、又來請余記其由、余因親訪子浦村、登臨願望、知其風景之美、洵足以爲招魂之地也、乃作詞曰、

山兮蒼蒼 水兮泱泱 一死報國 千秋流芳

題上原清軒墨跡

清軒子自言不學畫、而其所畫、筆氣清逸、自合矩度、蓋天稟之厚、觸手輒生春也、書亦溫藉、與其畫可並稱、嗚呼熊魚兩得、世所希覩、豈不可欽乎、

跋雲霞山人書

雲霞山人、夙入大學、研鑽國史、更游歐米、咀其精華、學之與德、蓄積醞釀、不可得而測也、夫發於內、必形於外、書雖小技、亦人心之反影也、宜其書精勻雅潔、使人艷賞不已也、

敗

人

秋月木瓜

九十

夜汽車にて西へ西へと落ちて行く我敗人の胸の悲しさ。
狂ほしき夜は明けにけり桐の芽にうすむらさきの春雨のふる。
雨にぬるゝ赤き煉瓦の煙突の細き煙のかなしかりける。
春の日の淡き日影に反射する白き蒸汽の船腹のかげ。
細き手に止りし蚊をば逐ひもせて腹にすひ行く血をば見入りぬ。
僅かなる悦びのためやるせなき憂をしばし忘れけるかも。
教室の窓に靠れて春の日光を浴ぶれば青芝に風の吹きゆく。
柩出づるその夕暮に裏庭にひとり淋しくしば笛をふく。
夕暮に吐息をなせる純白なる牡丹を散らす初夏の風。
常闇の國の地べたの虫けらか、われの心にうつるまばろし。
椿咲く乙女島よりもたらせるバナ、の香懐しき夕。
景氣よき夜の行燈の悲しくも我を淋しき町に逐ふかな。
故郷の日々衰弱の加はるてふ祖父に似かよふ花活の白藤。
紫に光るアーク燈の色のごと阿蘇に輝く月は恐ろし。

北國の枯野を走る汽車の屋根にたばしる霰うら悲し夜。
心なく投げし煙草の吸殻に朝霧の海のしゝま破れぬ。
我病をきづかはれたる母親の爲替つかひし後の淋しさ。
金口の煙草の煙ゆるやかに室に漂ふ初夏のころ。
雨風よな吹きそ吹きそたそがれの桃色の花、たゞれたる心。
梅雨晴れに青葉に薄日さす時は昔わすれし人も戀しき。
うら淋し頬杖つきて眼を閉ちて心にうつる何もなき哉。
静にも夜のとばりの寄せくれば又もや夜を悲しむ心。
三日月を脊に負ひて温泉へ下る灯ともし頃の若き旅人。
やるせなく夕暮の河岸をさまよひて魚釣る針をしばしながめぬ。
停車場の煤煙の中病める友の涙かやく夕月夜かな。

食論の食は廣義に於て云ふので、普通いふ飲食である。なるべく論文のつもりで題まで論文らしくしたい所から食論とした。私の飲食に對する平常の愚論の一部分に過ぎない。

一

衣食住は人間生活の三要素で、孰れか其一を缺く時はそこに完全なる生活を見られない。熱帯地方へ行けば、常に裸体ですまして居るやうな人類も居るが、それでも彼等の陰部を隠すに足る一枚の薄布は確に彼等の衣である。地上に住む家としては造らないが、緑濃き樹間に庵を結んで居る人間もある。汎く人類の過去を攻究したならば、必ず彼等の經過して來た生活法の極めて奇抜なもの有るに驚くであらう。しかし、人類は衣食住無くしては、どうしても存在しなかつたのである。これからさきも永劫此法則は働くであらう。

こうなると衣食住の三者鼎立して互に相譲らぬ形勢となつてくる。然し茲に無理にも、此三者をして一定の場所を占むるを許さしめず。

一列に並べて人生需用の高い視点から見渡すと、食衣住の順で並ぶのが至當に考へられる。これは私一個の考で到底ものになる説で無いことは明かに知れぬが、今の所私はさう思ふより仕方

が無い。

食！どんな人間でも此食を脱して超然たることは不可能である。飲食といふ風な事は賤しい事だ。論するに足らぬなど、一口にけなしてしまふのは、蓋し眞の學者の執るべき道では無いと思ふ。古來いかなる賢哲と雖も、食はすんば死すと云ふ自然の牢乎として抜く可らざる法則に反抗して賢哲の度を一層増したと云ふ者は未だ嘗て無いのである。かのトルストイの如き哲人ですら彼が主義とした菜食に不足を覺え、深夜ひそかに臺所へ行つて肉を喰つたと傳へられて居る。(トルストイ家に嘗て仕へ)俗を去ると叫んで首陽の山に隠れた聖人も蕨を喰はねばならなかつた。(料理人の告白に依る)

人間は生れて直に母の柔い乳房に縋り、愈々死ぬといふ時には末期の冷水に唇を潤して逝くのである。人生かゝつて食の一事にありと云ふも過言ではあるまい。

しかし茲に私は敢て道學的註釋を附加して見たい。人間は生くる爲めに喰ふのであつて喰ふ爲めに生くるのでは決して無いといふことである。

二

吾々は生きさんが爲めにあく迄も喰ふべきである。

何でも世の中の立ち始まり即原始時代には人間は手當り次第見つけ次第食つて見たものらしい。しかし自然の恩恵豊かにして果實の鈴なりになつて居る南洋諸島の如くに、世界のあらゆる部分は人間の食慾を自然的に直に満足せしめる程豊穡には出來て居らなかつた。

またたとへ豊穡にした所が、誰もかも勝手次第に取つて各自の食慾を充たして居つては食物が

絶えるわけである。そこに即ち制裁の必要があつた。また天然食物の不足を人工で補つて行く必要が生じて來なければならなかつた。どう／＼人間は無智なる状態では、其生存の第一條件たる食といふ事が完全になしとげられぬものだといふことに自然と定まつたのである。

此決定は二十世紀の今でも動かす可らざるものである。無智では喰つて行く事が出來ぬ。智恵があつてすばしく人工の巧な者が愉快に喰つて行ける。さうするとパン問題に苦しんで居る人間は一通り無智の者かも知れぬ。

しかし近代のやうに生活の様様と云はふか何と云はふか頗る複雑な状態を呈して來て、しかも社會の有機組織の各部に少からぬ缺陷を生ずるやうになると、智識の比較的ある人間が完全に喰ふことが出來ずに、いくら飢えた有様で、營養不良といふ風な顔をして、處々方々ゴロ／＼して居ることになる。こんな意氣地の無さそうなしかも同情すべき人間を何とか處理して、社會のあらゆる部分に意義ある運動と喜ぶべき効果とを起すに共力同心せしむるといふことが今のところ最も必要である。

もしも一通り物の道理を解した人間が、適當に喰ふことが出來ず、従つて腹の何處かに耐へ難き空虚を感じつゝ、社會の複雑な路をさまよふて行く、そうした人間がだん／＼増して行くとなれば、何時かはその輩が自分等を陥入れた當の敵に對して、思ひ切つて黨をつくつて旗揚げをするだらう。

吾々はその時彼等を Volksfeind と呼ぶべからざるもまた Volkseind と稱すべきかわから

ないのである。

話は少し方向を變へるが、此頃の米價に關する問題である。

一体邦人の主食物がこの米であるものだから、米價が鰻上りに漸次騰貴して底止する所を知らない有様になると、社會の輿論は一齊にこの問題に集中したといふことは自然である。小學校の生徒が体操をして居る時斃れる。ある市は外國米や麥の直接販賣を始める。細民は飢に泣く。二食をする者がふえる。そして上流社會の人迄が米價を下げろ——米屋を檢舉せよと眞赤になつて怒り出し、世の中が此問題で煮え返らんばかりであつた。(此頃は高いのに大分慣れたと見えてやかましく云はん様になつた)。

此米價騰貴には種々の原因もあり、且つ米價の調節に就ては農業上また經濟上色々な意見もあるがそれらはこゝに述べぬ。唯だ私の述べたいのは米價騰貴といふ一現象を通して見たる、我國民の食物變遷の徑路である。これ迄祭禮や病氣の時以外には白い米の飯を喰はず、平常は麥乃至稗で満足して居た一部の人間が、漸次米を常用するに至つたと云ふ事は、米の需用を増し従つて米價騰貴の主要なる原因の一をなすことは確に有力なる一事實である。吾々は今之を單なる一事實として看過して置くべきか。

私は今の人少くとも現代の國民はその食物に於ても他の衣服や住居に於けると等しく、實質を顧慮しない贅澤な方面に奔つて居ることを認める。實を去つて華に奔るといふ事が國民平常の食の上に於て著しく現はれて來たことを私は認める。麥から米へ——米からライスカレーへと行く

べきは或は抵抗す可からざる世界の大勢かも知れぬ。焼き芋を顧みずしてオムレツやピフテキに奔り、塩瀬や石川屋の美菓に憧るといふのは、或は免るべからざる時代の趨勢かも知れぬ。近代人の特權と云ふものかも知れぬ。しかし吾々は物の内容に深入りして、其物の實質に對して正當な評價を與へねばならぬ。

吾々はそこで始めて萬事を行ひまた喰ひ且つ飲まねばならぬ。

人生の第一義に立つて、今の人が餘りに奢侈な、外ばかり美裝に輝ける、内容の貧しき食に耽つて、やがては招く食倒れの悲惨な事實を見て居るところく人の哀れが感じられる。

飲食の享樂——それは一部の人殊に青年にとつては唯一の幸福である。しかし實質に生きて内容に樂しむといふことは青年の更に幸福とし更に光榮とする所であらねばならぬと私は思ふ。

三

烈しい生存競争場裡に惡戰苦闘する近代人は過激な勞役から生ずる疲勞や倦怠を覺える事から、何とかして人工的に心身を興奮させやうとする。何かあるものを以て生活の苦痛外界の壓迫を逃れやう、異魔化さうとする。この「何かあるもの」の一部分は即ち特に近代的特徴を帶びて來たある種の飲食物に於て最もよく具体化されたと云つてよい。それらの飲食物は即ち人の味感を刺戟してその神經にまで強度の快感を傳へる程のものであらねばならぬ。殊にアルコール類の飲料は近代人の煩悶を醫するに最も適當したものである。到る處に飲まれる。青い酒や赤い酒を飲むのは、脱線した所謂新しい女の所作とのみ思つて居たら非常な誤解である。眼を射るやうな色

をつけられたアルコールの一滴が若い人の唇に觸れて、その複雑な胸に謂はゞ光風霽月の感を與へて居る。身も心も其中に溶けて行く様な強いエーテルの香——それが食物に混合せられて彼等の心を暫くなりとも彼等自身のユートピアに遊ばしめるのである。どうしても以前の様に單調な食に甘んじて居れない近代人は極めて刺戟の強い物に奔るといふ事はとにかく事實である。支那料理の如く濃厚に出來なくとも、人を刺戟して暫らくでも一種の魔睡狀態に置く様な飲食物が近代人に歡迎せられるのである。酒や煙草の消費額が年々非常な増加率を以て増して行くのも此邊の消息を伺ふに足る。

しかし同じ近代に於ても他の新しき一面を考へて見ねばならぬ。それは「シンプル、ライフ」が近代文明の極めて濃厚なる色彩と複雑なる組織とをもつて混交せられて居る佛國巴里の中央から叫ばれた如くに、今や菜食主義の會合が同じ文明の中心——巴里の一角に生れたことである。吾は菜食のみでは生きて居られぬ。牛か何かの様にそうした植物性のものばかり喰つて居ては、顔色蒼白を呈してやがて來るべき悲惨の死は免れぬのであらう。

たゞ菜食主義の會が發起されたと云ふだけで、すでに人間の食に對する凡ての觀念を最も痛切に暗示して居るでは無いか。巴里にこんなものが始まつたからと云つて今更ら吾々は菜食主義を眞似る必要は少しも無い。たゞ此一事實が食に關して價值ある説明を私に與へる。とにかく過去から現代に至るまでの人間の食を考へると、その食は近代に近づくに従ひ食本來の意義に第二の意義即ち裝飾的意味がだん／＼加はつて來た。そして現狀は此の裝飾的意義の食に殆ど凡ての人間

は迷つて居る様に見える、しかしまた食の意義謂は、食の目的といふものが一つ二つとだん／＼増して行くとするれば、食の問題は人生に於て愈々重要なものとなるのである。

調和——それは凡てに必要な條件である。食に於ても同じく必要である。これは先づ模範的料理とでも云へるものを見ればよい。そこには色々な味—色—形のある食を見る。しかも味なら味の間には一つの聯關した調和がある。三品なら三品の間には調和があつて始めて一貫した喰つて貧くない三品の料理が出来る。今日料理會とか割烹會とか云ふものが諸處に開かれて随分珍奇な料理をつくり、其道に貢獻する所は少くない。しかし彼等は食の調和といふ点に於て啓發する所は比較的少い。料理といふ風なことも智識を生嚙りした女に委して置いては人生大に損するのである。一部化學者の開拓すべき不蒙の地は此方面に大なるもの有りと思ふ。

食はずんば死す——是れ永生の眞理である。私は此食の一事に眞摯なる學者識者の深遠なる研究價值ある意見を今一層必要とする者である。(終)

附言

私は以上に於て食に就て私の云ふべき凡ては云ひ盡し得無かつた事を慊む。食は科學的に否化學的に論述せられ得べきである。私は以上に於てばんやりと雜論的に書いて見たに過ぎ無い。



四高俳句會句稿

題 燕、椿、若葉、紙魚

過ぎて早瀬を舟に見返へる 燕飛ぶ	繞石	轉の句の一つ讀めぬ字 紙魚のあと	繞石
樹海眼下絶頂の一祠飛ぶ 燕	同	宋版に紙魚はめる字を唐版に	同
夏を若野の山頂平ら 岩燕	同	字本また紙魚に缺字を其儘に	同
あらぬ瀬に動かぬ筏飛ぶ 燕	同	干乾びて紙魚付いてあり 帙の裏	同
庭もせに干す同じ土面燕め	同	幌下ろす假出獄迎へ 燕飛ぶ	畝水
子の口誦さむ椿盡しや 金閣寺	同	巢燕や整經基は解かであり	同
落椿池畔輪に輪に水動く	同	湯殿が壁吟味もす 群れ燕	同
處得ぬと知る石と杉落椿	同	蛇腹云へり 谿椿を爬行もす	同
推敲の一日一偈落椿	同	寄生木に 弄巧誹議もす 宮若葉	同
宮は若葉に見えずと船は島指示す	同	若葉して 廢墟濠は撒卵濁りもす	同
牧場は切る堀割並木 若葉照り	同	虫干や 賦役金札に 紙魚のある	同
覗く淵に映る若葉と疾き魚と	同	宿痼瘕を 剝る椽先や 飛ぶ燕	愛松
紙魚惜しむも尊き寺制開基の書	同	貝を粉に 碎く 槌低ふ 燕とぶ	同
	同	馬政布令ある 新領土 燕飛ぶ	同
	同	燕風ぎ江の 神話云ふ 乗合に	同
	同	奉饌の 酒漱ぐ 池水 椿咲く	同
	同	歸依すれば 寄食も 甘し 椿咲く	同

畫帳綴れは皆陳凡や椿散る	愛松	菖蒲髮に結ふ日の輕装や若葉風	無明燭
若葉風土砂の戻りを皆乗りて	同	灯して植う庭木若葉蝶鳴初めて	同
若葉湖畔明け急ぐを五位の鳴き立ちて	同	百足虫捨てゝ星も見る庭の鉢若葉	同
飛行滑走に鳴る發動機若葉風	同	樟腦嗅ぎ捨てる子に若葉々照りして	同
筆禍買ひし戯稿なりしを紙魚はみて	同	屋並干すもの汽車に見る里若葉哉	同
紙魚損じに雅懷述べて去る客僧が	同	虹を見て渴へ漕ぐ舟岸若葉	同
宗經倦む默想によき紙魚の這へる見て	同	干すに選ふ紙魚の書も父の話題なる	同
庭若葉足試めし兒に乳母呼べる	白聲	舊師訪ふに今も掛く軸の紙魚を見て	同
忘れ傘ある校廊も若葉揺るゝ朝	同	行幸前の静けさを燕高飛べり	山雨樓
若葉銀色の海透く土俵敷き終へて	同	燕飛ぶ野や電線の影長き	同
銃掃除紙魚穴の紙字意も珍づ	同	落つる日の燕の腹を染めにけり	同
旅を南へと端書に燕戲畫のある	無明燭	棚梨に培ふ空や燕飛ぶ	同
雅懷偲ぶ書は六朝の燕形	同	酒庫續く裏を燕の通ひ路に	同
飛燕一過先隊に動令下る	同	垂柳の一幅賛は飛燕哉	同
鯉にこの奇話あり椿湛ふ池	同	椿白し一塊りに家五軒	同
若葉夕雨誘うかに湖澄みて	同	宮献木椿は能社寄進哉	同
若葉夕苞の魚池に放ち見し	同	若葉句碑摺取るに土人手も借りて	同

潜水作業も見つ岬若葉風風に	山雨樓
噴火後は網入らぬ湖若葉して	同
芭蕉株は立枯のまゝに庭若葉	同
紙魚はみも懐しきものに師が入唐記	同
餘宗排撃の筆火舌火も紙魚むせて	同

(以上)

二元紀行——平泉寺經岳

百二

明治四十五年七月二十八日午後四時、平泉寺を出で、大野町へゆき清瀧十時君の宅に一泊、翌日十時中村梅田の三君と共に史跡探検の途に上る。計石、大宮等の村々を経て羽生街道を西へ西へと進む。大宮は昔、源廷尉北國落の時、國府より平泉寺へ詣でんとして（この事義經記には義經の思ひ立なりと記し、參考源平盛衰記には辨慶の建言にかゝると云ふ）こゝに來り積雪の爲に苦しみに、大宮の神、これを憐み給ひて櫓を與へ給ひたりと口碑に残る櫓の堂のある所也。北國の歴史は衰亡の歴史也、之を新田義貞に見、之を朝倉富樫に見而して萎靡振はざりし前田松平に見る。

羽生の一道、既に義經の悲惨なる史話を傳ふるに加へて、吾人は又義景没落の追憶を辿らざるを得ず。

思ふ、今より三百餘年の昔、越の太守朝倉義景、一朝邊境の守破れて織田がつはもの國內に亂入し、譜代相傳の勇士悉く討死して、今は籌策はごこすに地なく、戦はんか骨を沙礫に曝す、降らんか身を夷狄に終る、止むなく父祖墳墓の地をも、一國繁業の都城をも打捨て、燃え上る煙と、泣き叫ぶ妻妾を後に羽生街道を落ちられし時かの風流將軍の思果して如何なりしぞ。思と共に辿る道はいつしか足羽郡境寺に着す。

夏の足羽川、水清くして以て香魚を釣るべく、竹縁にして以て片舟をつなぐべし。

市波に本向寺を見る。

阿波賀の春日神社に詣づ、神殿壯嚴、地形幽邃、はるかに足羽川の水聲をきく。元祿十年の燈籠あり。

神官を吉田氏といふ、夫人の話に、一乗山の舊城迹へはよき道なく又案内なくば城迹の知れざる由、よりて山へ登ることを中止し、春日神社所藏の一乗舊城迹圖を寫して城戸村へ向ふ。

沿道の川は昔し義景が足利最後の將軍義昭と共に曲水宴を張りて、流れゆくさかつきに清液を澆いで、一唱一盃風流をたゝかはしたるの處。

城戸内村に入りて、田々より運び集めたりと云ふ古き墓石を見る。試にその一二を抄寫す。

○ 永祿四年

佛壽阿彌陀佛

○ 妙修 妙忌天文十八年

日蓮大居士永正十六年

南無妙法蓮華經

日龍大居士天文十八年

妙光忌 天文十五年

定純忌

○ 宗十一月七日

南無妙法蓮華經

伯妙天文二十年

七月十六日

○ 天文三年午

慶音知藏禪師

九月三日

其他石の缺損せるもの、文字の不明なるもの頗る多し。

松雲院は朝倉家の菩提所なり。境内古墳多し。

○ 文明十二年

妙法蓮華經

十一月四日

○ 天正元癸卯季

松雲院殿大球宗光大居士

八月二十日

○ 逆修 善徳巧有

○ 宗惠童女

○

逆

南無妙法蓮華經 隆養

修

○ 明暦三丁酉年

竹圃樵嫩座元禪師

正月八日

松雲院を辭して避病院前より東、山へ登る事一町、英林塚に詣づ。英林敏景は營に朝倉家のみならず、足利中期に於ける天下隨一の武將にして敏景十八條の如きは天下の諸將の永く範とせし所、英林塚の鳴動は遊惰の子孫を叱咤して壯志を奮はしむ。

一乗寺殿

文明十三辛丑天

英林宗雄大居士

七月二十六日

敏景公靈塔

英林塚より南する一町、歴代の墓あり。蓋し後世諏訪の立石に法名を刻してその冥福を祈りしもの、その所謂立石は信州諏訪より運んで、義景が庭の本尊石としたりと傳ふ。

弘治元年

月光院殿照葉宗滴大居士 九月八日

永正九年

長陽院殿天澤宗清大居士 三月二十五日

天正十七年

性安院殿大岫宗淳大居士 三月二十二日

現心月十八世月泉代

造立之

一乗瀧に浴して淨慶寺村光教寺に宿す。

あくる三十日九時光教寺を辭して鹿俣を過ぎ、三峯に攀ぢて古城迹を見る。山は今立郡に屬し、一に高城山と稱し、南北紛争の時、平泉寺の僧兵、伊自良次郎左衛門尉と共に脇屋左衛門佐義助をいたゞいて之に據り、後足利時代には朝倉氏こゝに物見櫓を置きたり。

三峯村は山の半腹にあり、舊家山崎久助氏を訪ふ。

其方儀 數十代

家名相續 古き

家柄之者ニ付親之通

其身一代於役所袴

着用指免申候也

藤右衛門判

享和三年亥四月

三峯村

久助江

家に天正十九年十月二十四日毛利壹岐守、黒田甲斐守、小西攝津守、加藤主計頭連判の古文書を藏す。

唐入之儀被仰出付而四人之事一所に罷越候たる諸事申下候事

一 侍中間小者あらしこに至るまで出入候へ共十月二十四日以前抱置候ものは其儘可召仕候今月二十四日以後 來候ものは其主人このみ次第可申付事
 一 百姓之儀者此以前 來候とも相届次第可抱置候若かくし置給人百姓於在之者可令成敗事

一 年寄共誓紙をとりかはさせ申上者下々まで違亂有之間敷事

右條々相定所四人之内一人相違候は、三人として連而可申候其上にても合

点於無之者御法度を被相背儀候ふ條三人として様子可致言上候也

天正十九年十月二十四日

毛利壹岐守判

黒田甲斐守判

小西攝津守判
加藤主計頭判

村端に村社式内刀那神社あり。

山を下りて下戸口村小學校にいたりしに、揭示あり、

天皇陛下七月三十日午前零時四十二分御崩御遊サル

あゝ星殞ち蘭枯れて涙止らず、心力共に盡きて斷腸の哀彌痛む。即ち傍の清流に飛び入りて身を清め、四人ならび跪して遙に東の空を拜す。悽惻悲涼敢て一言を發するものなし。忽卒として歸途に上り家に喪に服す。

暮れ行く空——横湯生

暮れ行く六月の空——

藍色の腫のやさしき、軟き光は

新しき縣道の眞白き砂利と

路傍に咲ける苜蓿うまこやしの白き花とに

溶くるが如き、その輕き接吻。

河並に黒く立ちならぶ葉柳——

眞白き裸の夕風は

しなやかな手をさしのべて

見よ、淡き空氣の、その感觸の情緒よ。

惡夢の如き太陽は、いま

赤き爛熟にからからと笑ひつゝ

狂はしげに沈み行く

その、爛れたる、浩嘆のやるせなき苦惱。

天地の惱める吐息よ

赤より青く、はた、黒く變り行の雲の神經――

遠く火山系の青き連山

靜かに落ち来る灰色の夜の幻覺

かすかに、あな、かすかに

水車の音――惱める官能の嘔り泣き。

何となく、涙流る――

苜蓿の花の、その鮮かに小き白き印象

淡き生命のかすかなる感覺

心は靜かに、垂首れて

灰色の路上を行方も知らず迷ふ。

高峰博士講話

四月三十日展臺の爲め歸國せられたる高峰博士を聘し至

誠堂に於て講話を請へり左は博士の講話の大意なり

私は諸君にお目にかゝるのを愉快に思ひます、

殊に私が赤兒時代から育てられた金澤で諸君と會ふのを愉快とします、而し、私は諸君に對し

てお話し可き十分の材料は持て居りません。私

が今朝當地に着きますと直ぐ駒井先生の訪問を

受けました、是非學校で何か話をせよといふ事

でありましたが右の理由で一度はお斷を致しま

した而し先生と私は先生が小松の校長時代か

ら御懇意になつて居つた次第で強て御斷も出来

ず再三の御勸に依て遂々見苦しい身体を諸君の

前に持て來ました。目下盛に議論せられて居る

加州問題に就ては少からず我々も頭を痛めて居

て卑見を述べ又同胞諸君の御意見を聴いて居ります、本日も此問題に就て聊か私の思ふ處を諸君にお話致したいと思ひます。

今から五十年程前に支那人が亞米利加の太平洋沿岸に移住しました、處が支那人は米人と同化しません。彼等は永住する心算がなく金さへ出來ると直ぐ本國に歸つたのであります、亞米利加は金を吸収せられるばかりで利益がない。故に千八百二十年遂に支那人排斥運動が盛となり法律に依て彼等の入國を禁じました、其から後布哇が米國の一部となつた時日本の労働者がドシドシ桑港其他の市街へ入り込みました、少い中は別に米人も注意しなかつたが其人數が殖えるに困つた、日本人も支那人同様賃が廉くて多く働きますから米國土着の労働者は非常な打撃を受けた次第であります、其結果日本人の排斥運動となつて來ました、而し之は米國労働者から

の見地から起つたことで一般地主は却て日本人を歓迎こそすれ決して排斥するやうなことはありません、然るに地主は多く政治に對して不熱心であります、勞働者は之を奇貨とし投票を利用して日本人を苛めやうとしました、即ち彼等は排日議員に非ざれば投票せざしあらゆる手段を以てお味方議員を作るに努力しました、其爲め排日議員が兎に角議會の多數を占める様になったのであります、こんな具合で此點に於て加州の議會は加州人の多數を代表して居るものと認める事が出来ませんが、土地問題漁業問題其他色々の問題で排日の法案を作らうとし之に對して我が同胞の抗議があつて今日の紛擾を見るやうになつた次第であります。此問題を如何にして解決すべきか、之吾人の最慎重に考ふ可き大切な問題だらうと思ひます、一体排日問題を日本人も支那人同様全然米人に同化せずてふ假定に其根據を持て居ります、而し私の見解に

よれば決してそんな事はありません、勿論日本人のすべてが米人に同化し得るといふ譯ではな

いが多少教育あつて世間の事情に通じた人なら同化性があると思ひます、中には集れば必ず日本部落を造り日本部落を造れば必ず蕎麥屋風呂屋等が出来て亞米利加の國內に小日本が現出するてふ例もあるやうであります、而し之は無意義な移民で吾人のとらぬ處であります、四五年前から日米政府間に約束があつて日本から當分勞働者を米國に送らぬことになつて居る、且つ在米の同胞にも成功者が殖え彼等の人格も多少高くなつてどうやら米人と同等の交際をし得るやうになりました、此上は日本人の側から日人

を日本人も支那人同様全然米人に同化せずてふ度合に迄同化し得るてふ事を實證する必要が

あると思ひます、目下の處勞働者の渡米は出来ませぬが學生商人等なら決して差支はありません、苟くも生を日本に享け相當に物のわかつてるぬ、以後亞米利加に行く人は少くとも中等以上の學識が有て出来得るなら腕に何か覺のある人であつて欲しいのであります、又日用の會話に差支ない程英語の素養があれば益々結構であります、諸君は各々専門の學科を御研究になるで

ありませうが諸君の中から將來亞米利加に渡つて事を成す人の輩出する事を私は望みます、一

体米國は日本の三四十倍もある面積を有て居つて人口は僅か日本の二倍であります、未墾の荒地も澤山あるし天産にも富んで居ります、世界の各國に溢れる人間が、亞米利加に集るのを天が迎へるやうであります、我國は面積の割合に人口が多い、而も年々五六十萬宛人口の増加する國である故外に膨脹するのが天理であります

中には外國に行けば愛國心が薄くなる等唱へる

人もありませうが私は違つた意見を持て居ります、苟くも生を日本に享け相當に物のわかつてる人なら永久日本を忘れる事はないと思ひます、以上の通りでありますから忍耐力あり教育ある人を出来る丈米國に行て貰ひたいと思ひます、而も桑港等集らずもう少し内部に入込んで職を求められたら宜いと思ひます。私は紐育に居ります。御渡米の節は是非御立寄を願ひます、

さらば諸君。

(石端生)

温泉の宿に着きしがしばしたゞづめる恣まゝなる春の暖かさ
盲人の話きゝるばうらがなし朝朝青く温泉の晴れてあり
春は來ぬそと春は來ぬ温泉の庭の芽生はゆるゝ何處に行くべき
夜になれば物におびえしげだものゝ如く歸りぬ何をなすべき
玄關に丁僧と語る湯女をきく夜の心の靜かなる時
家ぢふが靜まりかへる夜の温泉の少し淋しさ覺え初めける
温泉の朝に一人見されば春の日の始まる如く輕き風立つ
春の温泉になすこともないうつとりと部屋のアたりにゆるゝ暖かさ
眼閉れば熱きむくろのうつろより流れ去るあり朝の浴後に
春の太陽の山を出づれば温泉の町はうつとりとして淋しき日なり
曇り日をしてゝ逃れぬ温泉の午後の薄暗き部屋居れば強ひらる
旅三日漸く部屋に慣れし夜の居るにえ堪へず消息をかく
地はあはれ濡れわたりあり湯歸りの我になつかし朝の春の陽
青疊部屋に香へり電燈の影さびしくもゆるゝ春の温泉

赤き本見をればいつかまごころみぬあるかなきかの夜の光よ
電燈が消ゆればくらし朝の部屋何か惡かる事を思へる
昨夜雨にしつとりとせし庭の樹々あはれ淋しき記憶なりけり
春寒き湯にも入らず獨あり庭の木立よ動かすあれな
友歸りしあさは淋しく日は暮るゝ温泉場のうつとりとせる
何事もなすべきなくてふらゝと外に出しがなす事もなし
ばんやりと宿に歸れど懷手出すによしなし暮るゝ部屋かな
隣室が氣味惡きまで靜まりぬ吾も然かせん我もしかせん
温泉の部屋にふとまごころめばよみ聲知らざるところのものゝ如かり
いつになく早く起きしが湯にも入らず安樂椅子にあれば冷し
巨いなる青き空となり明けし朝ひやゝとして生命透くごと
眞晝時湯より出でしが輝ける日にも壓されて淋しく目瞑づ
一寢入したるまゝなり外に出でしが何處に行かむ晝の眩し
死を思ひあればその事戯の如くにもあり春の温泉にゐて
惱亂の如くに湯槽這ひ出でばひやゝとする石疊かな
湯にあれば輕し吾身にありけるか僞はられしが如くにもあり
くれなるの毛氈の上の吾が寢醒め心さびしく旅をしぞ思ふ

寝しまゝに部屋に淋しき電燈を見つゝ、今宵の消息思ふ
隣室の男ばかりの話聲夜はさびしく雨落ち来る

思ひ出し得ざる淋しさよべ雨にぬれし枝々動かすにあり

浴後只座りてありぬ温泉の部屋の鏡にうつる動かざる色

あな淋し赤き布團被温泉の部屋に母は眠らる誰と語らん

吾が滞在五日となれど雨降らず今朝も晴れてあり少しうるめよ

いざ歸らん五日の間温泉にあれどあはれ同じき吾なりしかな

萬年筆やたらにインキ泌み出づ滞留の日の終る朝なり

友は眠り障子明く午後の日日照れば浴後のうら淋しけれ

友は眠り湯より歸れど未だ起きず部屋にあれどもなすこともなし

午後になれば歸る午前の暖き温泉宿に一人座れり

今朝山にとり來し花の凋めるよ温泉より上りし部屋の疊に

茶盆出せば白木蓮の凋みあり温泉宿の歸る日の午後

松並木出づれば川の青き色月始めの風の揺るゝよ

北

國

井口長三

(一)

タイムからタイム、ヘシ、ズン、からシ、ズン、へと永久に朽ちない萬有の中に一定と時間と一定の
個所とに對する執着に支配されて動搖した投影を弄び乍ら新しいものと古いものとが互にスト
ンジャ、として往來してゐるをして定量の呼吸の堆積を残して幽幻の巷に漂ひ去る斯様したもの
が人生だとかと思ふと駭然とするであらう、華ぎ誇つた自然に朧なイメージが一種の凄い笑をも
らして無窮から無窮に蠢蠢してゐる者だとも設定したならば現在吾人が体形を具へて立派な明瞭
な對象となつて存在してゐるものは何か、イメージが有機体に化したものは果して何か、私はこ
の本体を目して現實と云ひたい、僕等の生涯は一種の幻像に意味をつけたものゝ軌跡ではあるま
いか然もこれ等の盲像が鮮明な色彩を以て故意と裝飾を施したものの換言すれば明瞭な軌跡の經營
！これが即自分といふものゝ存在を明にする所以でなからうかそしてこの對象物が再び元の幻像
そのものに歸つたとき何物がとり残されるか飄々とした單なる色彩の文がごよみの中に翻つてい
るのであらうこの文を指して歴史と稱するのではなからうかそしてこの一種のイメージの特性で
あるそんなバニターはイメージ本來の叫びを明にするものでなからうか、そしてそれ等の幾多の
特性の溶解したカーレントから響いて來る妙音が一定の空間を支配している共通性であらう。

一方タイムの移轉と共に自然のもたらす觀賞は天籟の鳴りと共に生活の中に潜んでゐる「リラ」と相和している幾十萬幾百萬のイメージの心髓にこの氈律が反響したとき彼等の受け入れる甘い流れが彼の共通性と中和して生ずる融合の色彩がどれ程彼等の現在に審美的の貢獻を呈しているかその一種の薄い表皮から生ずる團体的芳薫！私はその慕しい憧憬に満ちている、然し私は未だその様な神秘的な幽邃な快感のどん底に潜り込む丈の力に缺けてゐる假令入つたにせよ強い反撥力に押し返されて沈痛な衝動に觸れるであらう否な私はむしろ潜り込むよりもその濛い濛い或物を要求するのである。

私はそれを味ふ前にその現在の一部を成している背景に抵觸したそして心ゆくまゝに自然の提供を享けたときその鮮な刺戟とその裏面にも包みきれない鋭い辛いそして際だつた縷々容赦なく喰ひ込むだ自分に反映した北國の自然的風光は細い糸すぢとなつて萎れた血氣ない唇に感應したそして八絃琴の音ゆかしく歌ふた古人に真似て僕は何心なくうめき出した。

(一) 影縹緲の天遠く、日輪落ちて黄昏の

空に彷徨ふ群千鳥、行手の方は遙かにて

雲井に迷ふ沖つ浪、見よ舵緒絶へしさゝ小舟

○

静けき宵に薰りつゝ、道教へむと粉黛の色も清けき月の姫、玉井の宮を後にして

半ば恥らふ面影に、堪えあふるゝ花の色

○

應ふ千鳥の聲囁れて、情は濱の白浪と

眞砂の上に影走せて、散るか晴空の斷れ雲

飛ぶは彼方の砂丘上、息ふは姫の裳の中

○

東西隔つ數十里、夫れ神靈の響あり

北西比利亚の風受けて、歌ふか丘に浦の風

南大和の崑崙に、積るは融けぬ千代の雪

○

西逢坂の關越へて、やがて逍遙^{さうら}う嶺の雲

明くるも間近こゆふつけの、鳥に別れを惜みつゝ、

北斗の光指して、歸る旅雁に伴ひぬ

○

路のまに／＼止め來れば、山外有山山不盡

山青山白雲去來、鳴ける杜鵑の一聲に

静けき山はいや増しに、とゞろになりき我が胸に

○
頼む命はしら玉の、緒をひきしめて奮ふとき
數千の軍馬嘶きて、窮陰凝閉天暗く
憑陵の殺氣いや高く、引けば歸らぬ梓弓

○
數千の精騎一乗の、谷を動し峰ふるふ
主客諸共相搏てば、彼方に残る着背の
上に漂ふ黄塵は、荼毒の靈の妄執か

○
老杉松柏泣くところ、瀧つ瀬暗を破るところ
咽ふ木響のすむ處、斷蓬枯草の伏すところ
朽ちし卒塔婆の有る處、昔を語る小忌衣

○
旌旗の満ちし北の庄、組練を廻す水流れ
草すれの音ひきては、征馬踟躕の閑浮の故郷
昨日は天下の權競ひ、今日は馬革の上に伏す

○
池の藻草の今日はこゝ、明日は彼方に咲くそれと
誰か哀れと夕暮の、入逢の鐘にそばたてば
もろきは人の生死と、法の音そらに咽ぶらむ

○
踵を後に廻らせば、糾紛の峰連りて
中に聳ゆる鞍ヶ嶽、城主亡びて數百年
社稷覆れて幾星霜、夏草茂み跡荒む

○
戦機は熟し三尺の、秋水の下光りあり
鐵甲堅く顔に、よろふ夕の草枕
見よ徭戍の面影に、宿る耗歟の小波を

○
三軍の丈夫戎馬の壯、中原鹿を争へば
陣雲くらし野に山に、朱殷の巷風凄く
響く金鼓の音も高く、既に零露の文繁し

○
戦既におさまりて、落魄の運避け難し

啾々の蟲音なへば、屍は静む天の下
 膈臆置くに所なく、誰か捧負の壽を思ふ

○
 鳴く田鶴の音に心せば、人の子思ふ恩愛の
 契を喻す暗示なり、鴛鴦の優青苔の

蔭に宿るを眺むれば、偕老の約いや密し

○
 鐵漿黒き若人が、奇しき縁も悉く

破れてあはれ夕立の、風に誘はれ迷ひきて
 悲しく舞へる延年の譜、今に傳ふる鳴環瀧

○
 夜は寒山の秋更けて、帷幕の篝火やせ果てつ

時しも臥龍の果つ方、暗に映ふ不知火は

田單の計今更に、暴露の務を劫す

○
 落葉亂れて舞ひ立てば、姦雄の雄圖碎けたり

朔風空に嘯けば、関聲狂ひ馬鎧なる

療烟靈雨訪へば、秋水の下血露

○
 胸奥百萬兵は足り、帳下數千將は足る

秋霜氷り時更けて、月も玲瓏の三更に

渡る雁がね聲訝へて、夜半の天空雲もなし

○
 渡る雁がね聲きけば、松籟寒く風たてば

征塵高く蹴る人も、頭は今やうなだれて

帳もれ來る一筋に、亂る心の海の波

○
 燈盡きて洗滌の、自然に奏づ哀の曲

さすがに神に非ざれば、身をよすあとの白浪を

思ふて東を眺むれば、浮ふ家郷の萱草

(二)
 綺羅にも堪へぬ柳腰の、枝垂は同じ水の緑

されど春前雨ありて、もゆる緑の花衣

○
 寫せよ行潦に事問へば、春は到ると告げにけり

春の眺めは東より、來ると歌ひし先人の
言の葉我を欺かず、蘭麝の香匂はせて

東風來る度に散る花を、浮べて運ぶ瀬に淵に

○
春のひま行く駒の道・花の衣の日も添へば

何時しか老ゆる花の面、さしにも深き佐保姫の

惠の糸も切れぬれば、行衛は何處姥櫻

○
甘泉殿の春の夜の、情もこもる時すぎて

世はこれ既に幽黙の、莽々の草に聲ぞなき

紫雲西に霞けば、巫山の雲の幻か

○
夕焼殘す川の邊に、螢とび交ふ夕まぐれ

宵闇の夜の暗きとき、香魚をどりて水白し

弦月峯にかゝるとき、胸に應へむ靜謐は

○
青き蘆葉も枯れぬれば、幽寂の味繁くして

啾々の蟲野に山に、水の濁りも澄み行けば

世は空蟬の凋落と、歌ふか秋の風悲し

○
波荒れたちて芙蓉湖に、眞帆傾く歸り船

蓬蒼の芦葦戰きて、爲めに醒すや鴨の夢

縈帶の河川塞りて、狂ふ阿修羅の聲高し

私はさう歌つた然し私の心の眞の欲求は草や木や石やなどのそんな靜んとしていて自ら推敲して得た印象よりもしんみりしたそして押へきれぬ刹那の冷さを味ひたい私は恍惚としている中から次第に蘇生つたときあの實生活といふものに甚く愛着したい様な氣がしたそして私の危い感受性に享けた或物をそこはかどなく書き附けて見たい。

(二)

私は成程さういふ心の共鳴をあからさまに暴露したいけれども一步立ち場を變へて現實生活といふものに對照して北國といふものを觀賞したい。

僕等の存在の上にあらはれて來る個性の持續は抑も如何なるものゝ表現であるか、私は直ぐにこれを自己權威と欲望の價值とを主張するものであるまいかと思ふ權威！吾人は確かに一種の權威の絶對の支配者である欲望の本体は自己である從てこの二種のものゝ生活そのものゝ本能である。

凡そ事物の發展は自然的の傾向である物あれば必ず鳴るといふ唐人の言に與せねばならぬ。そしてその鳴る所以は已にそのもの、發展若しくは開拓の運命をはめかしているものではなからうか、そして僕等の終局の満足は完全なる自己開放の宣言では無からうか空漠とした自己浮游せる現在の緊張はその自ら果しなく歎つ自己の中に求むる外はあるまい。如是は一種矛盾の様である然し乍ら存在の根源は自己に在る以上自己以外に安定を求むる事は不可能である、僕等は常にそんな不安定の中から或る希望を生んでゐるそして常に矛盾の範圍を脱しない自己の矛盾を信ぜる人矛盾に生ける人は幸福でなからうかそしてその幸福を自覺せる瞬間吾人は果して如何なるものを見るか、錯雜した組織の間から熾烈に燃えてゐる自己の權威又は自己が主張せんとする欲望の價值！、蓋しこれは僕等の最大なる武器であらう。

彼の泪として來る無心の水流は僅かの勾配に依て活躍するそしてそれらの中に潜んでゐる眠れるスピリットは時あつて彼等の自然的武力を體現する吾人の微細な波紋の氈動を發見したときは無心の境界を去つた左券である、智覺の失せた醒めない自己も流れ來る時のカーレントの中に含まれてゐる痛烈な實在に依て潑瀾の氣運を供給される、實際に自覺せる自己は既に新なるものである自己の武器を用ゐる自己といふ土臺によつて外界に方向を取れる自然の征服者である。

吾人は常に現實生活といふ特徴を帶べるステージに位するアクターであるそして現在の總ゆるものは自己に對して彼等の絶對の要求を主張する、そして吾人の生活はそれら瞬間的活動の絶對値の連鎖である、退て考ふるに吾人は又現實に伴ふ謬りの中にも生存しているものでなからうか

吾人の形成する長き連鎖の半面には悲しむべき自己嘲笑のほめきが漂うてゐる、そは何であるか、權威に對する絶對の愛、欲求に對する心酔から生ずる脱線的傾向である、思ふに愛もしくは心酔を形成する分子は個々のものとしては零碎破片も自我の主張に不適當なものはない、さり乍ら生活の法則と理想の性質とは永久に個定すべきものであらうか永遠にタイムの影響に壓せられつゝ、む生活の荒みに對して一律の手段を以て現實を評價せんとする過度の尊重より起る謬りは自己體現に必要な範圍に於て改新を要すべきものであらう、果しない猪突の征服に困憊して自己の基礎を傷くる如きは寧ろ愚である。

以上の出發點からして北國に浸み込むで居る現實の觀念を評價しやう、私はこれに對して彼の武陵桃源に於けると均しく偉大なる自然そのもの、展開に密着して痛烈な側面を忘れてゐる様に思はれる自己の欲求が靜かなネーチャーの中に遠なく繰り込まれんと力めるときにその標榜すべき權威の維持が朝暾の光下に委み行く朝顔の凋落とひとしく次第に縮み行く様な淡い憂、捕へ得ない悲となりはせまいか、神の恵も人の力も將た自然の作用も詮するにそのものとして客觀しそしてそれらを見物して居る中に確定した位置が離れる可く餘りに慕しく感じはしまいか、そしてそれらの種々の場合が齎す愛着の念が自然の中を通貫して居る享樂と單に對してゐるのみでなからうか、齟齬せる自己を開拓する希望と慘憺たる自己の敗殘の光榮とが同時に深い／＼奥底から同時に浮き上つたとき相互のけばくしい状態がそれらの人に示されたとき私はそれらの人の成行は面白いだらうと思ふ

「知覺がないならば概念は空虚であり概念が虚なれば知覺は盲目である」といふ宣言は、カント一代の名言であると或人は評したとして私も又こんな風に北國に於ける現實の觀念を罵りたい。

(三)

私は更に一步すすめたい

「短くはない現在に於て同じくはない苦樂や浮沈を味つて遂にまた闇黒の裡に没入してしまふそれが人生である」といふのがアンドレーフの人生觀であるこれが果して眞の徹底せるものであらうかと或人は評した彼の咲き誇つた春色の濃艶な色彩の間から彼のうづ高く茂る盛夏の中から鯛の淋しいメロデーの奏でから来る如何ともする事の出来ない恐しいほど嚴格な變遷流轉のまにまに或物に支配されて行く成程確かにそうである然し乍らこの如何ともする事の出来ない支配に對して一種の深い不満を感じずには居られない動かすべからざる運命それに對しての不満の呻きがにじみ出す、爆然として落ちる飛瀑は已むを得ぬ運命に支へられて幾十丈の斷崖から轉んだ後あの瀧壺から轟いて来るごよめき！あの云ふに云はれぬ恐怖のひききと同じ様に！只運命といふ下に瞑目的服従にのみ依つて定れる生の成行を味は、んといふ事は初めから不可能である態度ではなからうか。

「運命やチャンスに支配され乍らもなほその裡に在つて曲つてなりにも自己の天地を開拓しようとするところに現實生活の意味が汲みとられるといふた或人の言葉に賛成する 限定されたる存在既に運命であるけれどもこの束縛に對する腹癢せにもと無理にも運命の中に暴れ廻る——換言す

れば彼の權威の發展を希望する——といふ事は彼の冷かな運命に對する唯一の復讐ではなからうか、無から生れて再び無に歸るそして最後に情ない死の枯れ瘦せた手に伴はれるといふ絶對的運命生活は嚴格な意味の生活ではなからう、茲に於てか吾人は暫く生活上にあらはれる自己開拓の主義を發いて見たい。

「印象主義と象徵主義とを生活全体の指標として考へるとその經路は極めて興味あるものである」と或人はその様な意味の事を述べた、私はあの主義が缺くべからざる唯二の主義であると信ずる、吾々の生活そのものは瞬間の堆積である吾人の生活の要素はこの妙細な瞬間の構成なる以上は吾人生活全体の意義は瞬間そのものゝ意義の連鎖でなければならぬ、吾人は主觀的に感得した瞬間の快感！これこそは眞に生活全体に對して絶對の價值を主張するものであらう彼の人には更に進んで次の如く云ふてゐる。

此の瞬間に私だけに表る色彩私だけに伴ふ美醜もしくは私だけが感ずる愛憎は宇宙を通じて千萬年に亘りて唯一度しか經驗されないものにして是を外にしては他に實在は一つも無い譯である」と告げている、成程吾人が自己の權威に對して絶對の價值を主張する如く瞬間そのものも亦吾人生涯全体に對して彼の價值を要求するのを妥當と認めねばならぬ。

然し乍ら退てこの瞬間に感得する主觀が單なる衝動に任せて永久に進行し得るものならば吾人は直ちにとりて以て生活全体の指針とすべきである。然し乍ら彼の春陽にあこがれてゐる春前の蝶は永久に夢の様な温い自然を感得する事は出来ない、と同じ様に吾人は切なる悶へを發見する

のである。彼の連鎖の半面にあらはれる分裂の兆が低くうなだれている元來吾人は一の希望に若しくは瞬間の快感に生きずして數多の欲求、熾烈なる永遠の追及に居るものである、故に彼の瞬間的に絶對の價値を認識して行くといふ事は強ち否定し得られぬとしてもこれを持続する事は甚だ危険である、茲に於て吾人は永遠の立場よりしてそれらの瞬間に起り來るべき現象に批判を下さねばならぬ依りて所謂象徵主義の要求が起る、故に吾人は立脚點を瞬間に置き眼は生活全体に注がねばならぬ、吾人の進歩はこの兩主義の巧に合力して圓滿に發動せしめて行くところに在る。私は再びこゝにいふ立場から北國を覗かう。

西比利亞から來る寒い磯風が次第に失せて行くところあらゆる人類あらゆる生物の上に太陽が投げた光が密閉した南方の雲を破つてそろ／＼と入つて北國の全部を酔はせる様なチャームに包み始めるとやがてこれらの美しい春光は忽ち雨を呼び霞をさばせる、こんな氣の知れない氣候の中に集つてゐるそれらの人々はさのみ驚きもせず恰も豫想した如く其のまゝ冬の装束を着けたまゝ平氣でゐる、そんな風の日が次第／＼に積つて同じ自然の觀樂の境涯が何所からとなくやつて來るそして何時も同じ時節に同じ様子に展かれる自然の戯れをそれでも新たな復活の氣をもつて出會うそして花に酔ひては舞ひ舞ふては酒をあたゝめる日も一日／＼と過ぎて行く私は近頃は次の事を知つた。

「やかて方々の寺では涅槃會が初まる町の娘は美々しく着飾つて一日の遊樂に耽る美しい民歌の粹を集めた夢の様な手毬歌は梵歌に相和して一種云ふべからざる神秘的な諧調は何時も薄暗い影

の充ちてゐる寺の圓柱を被ふている古金欄の動かざる沈黙を搖がせ瓔珞の蔭に立つ釋伽牟尼の面迄温い甘さが繆はる」と、

又次の事がある

「かくして又野菊や犬蓼はすこしの隙間をものがさず咲き亂れて一夏の間水に添うて衢を上下した螢の光も疎になり蟲の音は全市を侵し物の哀れは瓦斯のまばゆい町に迄しみ互るのである」と、總じてこれ等の幽幻なロマンチックな光景はそゞろに幽寂と靜謐の感應を與へるそれらの神秘的な自然に纏綿している數百萬の生民は恰も寛つたりとした平原の中に浮いて居る獨立な快樂に慣れてる様な趣を思はせる、その昔數百年の封建の制度に壓せられて宛然別天地をなして居る北國一帯は大和アルプを越えて來る雁の音の外は都の方に眼目を借す勞は無かつたらうとしておそろしい程靜かな天然はむしろ一種の恐怖を引き起しはしなかつたかそして掴む事の出來ない薄い運命の力は積り積つて敬虔の念を生じはしなかつたか、交通の便は容赦なく俗惡の空氣迄も送つて來るが猶ほ彼等の遺傳的逸樂は恐る／＼持つてゐる神の賜——或は恐怖の魂——に對座して微細な作用がそれ等神人の胸に交通して居る。

如何なる少なる行爲にてもそれを機として自己の全体が現れる様にこの行爲を現實に移すのが生活上にあらはるゝ眞理ではなからうか、然らばそれら北國の中に充滿している都鄙の人をそんな眼から見たら如何な鳥眼圖が開かれるであらうか。

運命的の信念と逸樂的現在が特種な配合を爲している以上はそれらの人の現實に於ける瞬間の

價值は恐らく全く蹂躪せられはしまいか。そして温湯の中に漬へた柔い心持に優しい天使の小唄に耳を傾けて人生の陶醉者となつてゐる、一体雄大な靈感の中に五官が伸んびりして醒醒とした身邊の空氣が超自然的の色彩に變つたとき吾人の迷想や盲想に映る人生の開展は或る特色をもつたものでなければならぬ。天地雄大の精神が浸々と肅然とした空間に満ち互つたとき吾人は自分の汚れた見すばらしい存在を忘れて際限のない幽冥界にひき込まれる自然との同化はあつかましい束縛の外に定立せねばならぬ。そして吾人の中にかくれている心情若しくは調和は必ず時あつて外界と共鳴するであらう。私は彼の北國人士の間に満ちてゐる逸樂的生活や恍惚の狀態が、自然美の觀賞から享けたゲリケートな心と同化した結果でなからうか、此の様な柔かな濃かな情緒は愛の存在を認める宗教と交感し得るに易々たるは自然的ではあるまいか。吾人は一旦宗教の如きものと甚しく連絡するときは吾人の眼中に印象主義の漸次に消滅し行くをみるは必然である、私は彼等が温き佛陀の胸にひしどすがり響く鐘の音に來世の冥福を祈り乍ら心靈の粹を捧げて絶対の信仰を表して居るに敢て一片の疑も抱かない。

抑も吾人は宗教に對しては愛信望の三つを要求するのである。或人はこれに對して信と愛とは二つのものに非ずして神人に對する愛が信でこの信で吾人は遂に佛神と似又一となれるといふ確かな見込がつけばこれが望である。と證明している私は宗教の謳歌者たる北國人にとつて勿論彼らの濃艶なハートの中から常にこれら三体の餘韻がひびいてゐるのを信する。そしてそのものから生じた同胞視するといふ信念は又極めて強い一種の應化力となつてあらはれてゐる、私は生活と宗教

との關係が緊要であるといふ事は言を要せぬ。そして偉大なる信仰の存在がないならば大なる愛も大なる憎も生じない。只私の恐れるのはとらはれたる關係を切望するといふ事である。

科學者は現今の世界を稱して彼の榮華と歌ふかも知れん。然し乍ら退て考察するときは吾人は彼の文明の分子が如何にその内面的生活の要求の缺亡から生ずる幾多の弊に陥りつゝあるかを見るであらう、この點からして私は餘程北國人士の内心の満足或は内面生活の充實を嬉ぶのである。

凡そ宗教は理想と方法を別ちて生活の方針を與ふべきものである。故に宗教の生活に及ぼす影響も亦絶大である。吾人は宗教のコントラストとして一方に藝術を見出さねばならぬ、宗教が生ずる理想の追及と方法の進促より得た材料を以て吾人はこゝに藝術の建設に力めねばならぬ、けれども宗教は過去の機關にして藝術は現在の機關であらねばならぬ、それ故に徒らに未來を代表する藝術が過去を代表する宗教に屈する事は斷じて欲しない、吾人は宗教を現實生活の派生的徵表として保ちたい。そして現實の峻烈が度を増すにつれて内面的生活の補けを宗教に請ふのである。

此所に於て吾人は北國に於ける宗教と藝術との關係は未だ圓滑に運轉せる者となす事は出來ない、活潑なる藝術のないところ、偏せる宗教的風潮のみなきところには何れも偉大なる發展を望み得ない、そして運命的性質を帯びた一般の傾向が生々とした藝術となつて表れるはむしろ矛盾である。それ故北國に在る藝術的觀念も至つて幼い、かくの如き沈滞的のごよみは更に私らの慕しい應化性に及んでゐる、私はいつもあのノルマンの生きた應化性働く應化性に憧憬してゐる、

そして復た濁つた血潮の中から見出される鈍つた靜止的の單なる北國の應化性を味ふときいつも驚くのである。

あの廣漠とした北國といふ Tract の中を通じている壯嚴な没落の夕日に向つた様な重い沈んだ確定のごよめきがたへず私に一種の悲しい痙攣を催させる。(大尾)

桐の花——しげる

胸に來て昔を語る幻の薄れゆく時桐の花散る

夢に似し昔語りの一つづゝ凝りてかほろと桐の花散る

いつの日かちらさうつりし火影はも煽となりて胸に狂ひぬ

舞の袖に花降らしたる鐘の音に夢は破れつ春のうたゝね

黒き猫の金色の眼に名残りして春の夕陽は今沈みゆく

昨日今日怪しきかげの消えやらぬ胸を抱きて我はくらしつ

荒みゆく現實に耐えて華美の幻を追ひ夜の町ゆく

ゆく春を今日は名残りの紅き太陽に悲しからずや夕雲雀なく

本校創立記念式

卒業生送別會記事

た。(とら男)

春姫の手すさびか、櫻吹雪が、ほろ／＼と淺緑のクローバの上に散つて、校庭にも校舎にも、麗かに陽の光りが匂ふ四月の十八日、至誠堂にて、本校創立記念式が舉行せられた。玻璃窓を洩れて、瞳に映る若葉の色にも、空の輝きにも、カーテンをゆるがす朝風にも、何となくつかしい追憶が繰返された。

先づ職員生徒入場に次いで、校旗入場し、次ぎに溝淵校長登壇、嚴かな口調に、本校創立當時より現今に至る沿革を演べ、記念樹栽のため、本年の卒業生より數本の樹木を寄贈したる旨を告げられた。終りて校旗退場し、續いで一同退散した。至誠堂から校門へと歩む七百の健士の顔に、此の日、回想の微笑とでも云ふべき嬉しさが讀まれたことを、私は喜ばねばならなかつ

深緑の重り合ふた間からまばゆい日の光が洩れて廣い葉の八手にゆくりない恨を浴びかけて三四寸の芝生のアンダーグロウスの可愛い纖細な葉末に落ちた道の上の砂礫にも何とも云へない一種のいや味が纏つてゐる斯様した初夏のものの苦しい自然に壓迫されて次第に時の移りを感じて行く私にはゆつくりと花の香を慕う暇がな

いそしてたゞ胸に残つた少しばかりの記憶のおほつかない迷宮をたどつてボーとして過去を思ふ許り私は斯様した過去の追想がいやで堪ない何故煮えきらないのかどうしてごん底迄もすぎとほつて明瞭しないのか、私は去ぎた時代の吾等に與へる執着といふものゝ力がそんな魔の様な力をもつてゐるのだと思ふ人と人物と物或は

人と物との間におこる凝集の力引き合ふ力これが私の心のひびきを高めるものでなからうか。

の恐さを知つて離れなければならぬ運命が毒手を提げて私等の頭上に居るといふ事を知つた。

私は斯様思ふと離別といふ語に一種の憎みを

× × × × × × × × × ×

覺える私は離れるといふ事を知つてゐる私は無理に離されるといふ事を好まぬ私は常に歲月がこの様な辛い経験を齎すのを如何しても理解する事が出来ない、私は出来ないのだらう、いや出来ないのかよいのだ、疑問を發いて得た収得！私はこんな興味の無いものを欲しない飽く迄も雲に包まれた高嶺の様な氣分でありたいそして永久に物と物、人と人、物と人との間に敬虔のひびきを交したい、私はこの様な辛き目が三年毎に來る様に運命づけられてゐるそして私はこの年の再會が如何に私の心を亂すか。

二十三日！これがその日であつた私は思はず

を呈する次第なりとの開會の辭に依て開かる。

大きな室の戸を開けた萬國旗の裝飾にはでやかな空氣、私は不意にこれを感じたときあの宿命

次に井口君登壇して

人往々にして離別を以て單なる人生の出來事

人往々にして離別を以て單なる人生の出來事

の如く考ふるあり勿論歲月は永久に同居するを許さず來るものは去りあらはるゝものは滅す然れどもその間に幾許かの意味を認めざるべからず吾人はこの際希望に満ちたる諸君が別れを衷心謳歌するものなり凡そ人往々にして挫折するものあり彼等はその取るべき道を知らず思ふにとるべき道といふものに二あり一は折れる主義にして二は曲れる主義なり前者の主義の甚だ壯なるが如くしてその實然らず又後者の卑の如くして然らず吾人はむしろ後者の安全なるを取らざるべからず兄等今や天下の士なり宜しく力を後者の所謂執着の方面に致され以て終局の勝利者となられん事を望む。

と述べて降り次で縦山君上りて

「鳥の將に死せんとするやその聲やかなし人のまさに逝かんとするやその言やよし」てふ孟

子の言の下にその言をつがれたり。

吾人は今日諸君と別るゝに際し一種の執着を感ずるは諸氏が三年の苦節奮闘が我等に與へし大なる印象なり諸君の前途は遼遠なると共にその責任の大にして又これに對して大なる自覺のはめき認めざるべからずその昔スバルタの母かその子の戦に赴かんとして發せし「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ」に表れたる偉大なる生氣又は涙を振て馬糞をきりしあの仁なる心は吾人の慕うところなりアテネの滅亡は青年意氣の銷沈に在り天野屋利兵衛が「我は男なり」といひし一代の名言の眞髓に表れたる霸氣は吾人の大に願ふところなり然るに現今の青年は朝に某氏の哲學を學び夕には太古の文學をあさりその動搖一にして止まらず然も吾人が切望する仁の仁なる心と意氣とは現今青年の何處に求め得べきか今日これ等の迷へる幾多青

年の救助者は諸君を措いて他に求むべからず我これを思ふ毎に諸君の責のますゝ大なる事を思ふ。

次で川上君は

我等が昨年入りてより胸と胸との間に銀線の共鳴を覺えたり而して吾人はこの共鳴を運命づけられたるなり造化の神は永遠に會者定離の鐵腕を定む吾人またこれが余力に會してここにその悲を悲しむものなり我等は兄等が遠く人生の海に出でらるに際して萬歳ならむ事を祈り又健康を祝す。

と温情眉宇の間にあらはれたり次で黒瀬君登壇追想は過去を美化して吾人の前にもち來すタイムを通して過去を見るときは意義あるものとす

と述べて過去三年間に於ける卒業生諸君と吾人との交情感化を陳述し

現今は倫理の發達と共にその弊に没頭するの傾あり然し乍ら或人の云ひし如く學生は最も近き社會にて吾人は前に理想を控へ深考により己をさぐりスウィートメントを以て天地をさぐるべきなり、我等は今こゝに兄等の後繼者となるも果してよくこの業をなし得るや否やを危む。

と吾人の抱負覺悟を述べて降る次で卒業生石端君登壇

世人往々にして歎息すべきところに歎息せず否なこの歎息の無價值なるを知らずして徒らにこれを發するを以て能事となすものありそのあやまれるや論をまたず歎息はこれ余りに頓着し過ぎる所以なり吾人は或程度迄無頓着ならざるべからずこれと同時に慷慨悲憤ありその趣の彼と異なるは勿論にしてこの存するところ活動あり進歩ありこれ又男子の本領なり

世に行はるゝ不平といふは理由多からむも要するところ個人的のものにして世人單に雷同するのみ近時學生にもこの風延滿せり宜しく校風は熱誠より發せしめ而してこの徒輩撲滅に力めざるべからずこれ吾人が要求する覺悟なり。

と一大警告を與へらる次に同じく卒業生巢山君登壇せられ不肖等のために會合せられしを大に感謝すと語をついで

凡そ國家國民には夫々思想ありこれ明に歴史の示すところなりユダヤ、ギリシヤ、ローマ……と夫々自己が目する中心点に向つて運命を開拓したり然れどもその全盛期は恰も流星の如く一度目的を達すれば必ず亡ぶる運命に左右せらるかくてギリシヤ衰へローマ疲れ佛は革命にあひてあわれ悉く過去の運動として葬られ新なる活動は日々に生ず、印度べ

ルシア化石となりてより活動の焦点は次第に西に移り今や東方の一角に忽ちにあらはれたり由來我國は大義名分を主とし一視同仁を以て世の邪道を破るを天職となす故に大なる自重と自覺によりて自己の弱点を知り以て活動の素地を作らざるべからず、茲に於てか吾等が母校にうれうところは大にこの弱点を有する人を矯正し以て各自反省し來らむとする焦点の中に大に活かれん事に在り

巢山君終るや又卒業生永井君登壇し。

我校の主義たる至誠が發暢して光彩陸離たる禁酒令となりて實行せられつゝあるを大に喜ぶ者なり近來學生の風亂れんとするに際し酒使用法に關する我田引水式の理由を耳にす然れども吾人學生は校風の改良の手段にして目的なく宜しく個人的につゝしみ又團體として大につゝしみ以てますゝこの特性を發揮せ

ざるべからず。

と禁酒令の勵行について辯舌鮮かに述べらる次に卒業生近藤君登壇

渡らんとする水の逝ける悲しみと吾人はくり返し／＼經驗するものである正に過去三年間は失敗の歴史なり空々として來り茫々として去るは赤面の極みなり。

曾て我に青年を與へよと叫んだ私は青年のもゆるか如き意氣と熱烈を憧憬するものである近來學生間の風潮一變してこの尙ぶべき青年を浪費するもの多し彼のロングフェラーのエキセルシアにあらはれたる青年の意氣を見よ哲人モンゼンはかつてシーザーを評して彼は青春の杯より人生の水をのみ泡も淀ものみつくした人だと評せりといふ私が諸君が熱烈なゆるが如き意氣を以て人生の泉を只一のみに飲みほし沈滞せる現今の學生を鼓舞せられよ

諸君は北國に堂々たる否な天下に堂々たる我四高を自覺せよ。

と述べて降る次で卒業生鳴澤君登壇

吾等は過去三年間の學術上の收獲の大なりしを感謝すると共に精神上に得たる力に對しても感謝せざるべからず、私共が刹那／＼に得たものは一種の執着を與へている私等は生活に生ずる横道にとかく入らむとするものなり私はそんな外界的訓練の外に自覺より生ずる自己訓練の必要を叫ぶものなり私はこんな感想の涌くに至りしも周圍の事情或は三年間の學術の上より生ぜるものと確信す私は此校を去らむとするにあたり深く收獲の大なりしを謝すものなり。

と局を結んで降る次で中平君登りて

吾人は本日此會をひらくに當り出席人數の少きは申譯なき次第なりこれ諸君の寛恕にまつ

ところなり。

凡そ世は至誠の人容れられざるが如し屈原は砂をいたきて死し伯夷叔齊は首陽山に餓死すこれ等みな誠の人なり而して吾人が標榜する

は至誠なり然れども諸君が三年間の至誠の修養は以て世を定むに難からずと信ず、由來學問は鄙地に限ると、北陸の地はこれ正に田舎なり諸君はこの間に養ひ得たる「自然的エネルギー」を以て來るべき第一日を圓滿にせられん事を希ふ。

と述べて降る、次で校長は單簡に卒業生への祝辭を述べられて降らる、時に五時半なり依て金子君は徐ろに登壇して「吾人は今日諸君の熱烈なる言葉により大なる感慨を與へられたり我々はこの緊張せる心を以て心血を注ぎ北辰會の建設に力めん」と述べて閉會の辭を宣す後茶菓の設けあり。

會が終つた時はもう西の松の林の中にかゝつてゐる、クローバの上には夕映の色が這ふていた。(記者)

行軍日記 (四月二十三日)

井口生

潑墨の亂雲天を鎖して白山の方いまだ開かず、蠻雨一度訪へば雀群戰きて逃る、天我に假せずとも既に幾百の戎士の面影に決意の色あらはる劔鞘ひびき心鼓轟き矢猛心の禁すべくもあらず時しも午前第八時を過ぐる二十分四隣を搖がす唳曉の聲に一同肅然として校旗に揖す、終れば宛々の連り次第に校門より吐き出さる、過ぐる街衢の下數百の良民我行を盛んにするものゝ如く見ゆ町を外れば犀川々畔に出づ

午前九時半大豆田着、約十分間休息すこれよりすゝむ事凡そ一時間を経れば雨いよく烈く

して時に大風の伴ふを見る、險を越へて進めば濱安原の一体の松林前面に展開す、大隊はその一部に陣す、この時大隊長は次の想定を下す

(一) 敵の運送船約五六隻は四月二十二日夕金石沖に碇泊し二十三日拂曉より上陸を開始せり

(二) 金石市の領有の目的を有する國防軍師團は北陸線を北進しその前遣支隊たる學生大隊は松任金石道を経て午前十一時濱安原西側松林内に開進す其の任務は成る可く敵を永く海岸附近に牽制し師團の運動をして容易ならしむるに在り

(三) この時迄知り得たる情報左の如し

(一) 風波あらし爲め敵の上陸は進捗せず目下金石附近に上陸を終りたる敵の兵數は歩

兵約三百名にすぎざるものゝ如し

(二) 敵は濱田より番屋に互る線上に防禦陣地を占領しなほ濱田より濱村に至る高地には單簡なる鹿柴を設け歩兵斥候の外は通過する事を得ず

(三) 我師團は本日正午迄には其歩兵の先頭を以て松任町に到着し得るの距離に在り

注意

(一) 敵は白帽

(二) 赤旗一本は敵の歩兵約百名を示し紅白旗一本を以て我第四中隊を假設す

(三) 空包は悉皆使用すべし

(四) 藥莢は一發毎に必ず拾収し遺失すべからず

右の想定並に注意を下すや大隊長は直ちに次の命令を下せり

大隊は前方約二千米の所に在る敵を攻撃する

に決せり

山崎中隊より將校斥候を出し兵五名を附し斜右高地に沿ふて敵狀を搜索せしむべし

小谷中隊より下士斥候を派し兵五名を附して前面の凹地を前進搜索せしめよ

大野中隊よりも同様下士斥候を派しこれに兵五名を附し斜左矮松林の方面を搜索せしめよ右の命令終りて大隊長は中隊長と共に傳令喇叭卒をも從へて地形偵察の爲め出發す、大隊の位置は濱安原をへだて、海の方約百五十米の地点なる松林中に在り左方一体は高地にして松林これを掩ひ遙に敵の左翼に通ず高地の右側面は一而加賀半野開けて春の青藍これを纏綴し金石松任街道横に走るを見る斜前方約百五十米の隱蔽地を背にしてこれにつゞく砂原一体の地は遠く番屋に至る迄双眸におさむ斜右方面と前面との間には少しづつゝの間隔を置きて桑畑あり翻て左

方を望めば暫くの間こゝも亦松林連りこれをはなれば小高き丘陵を背にして左の方海の水際に隣り敵の正面に當る、敵は三百の歩兵を以て濱田の高地に據りて我に反抗するものゝ如し偵察終れば大野中隊先づ動きてこれに次で山崎小谷の兩中隊も運動を開始して共に適當の位置を占めんとす時已に斥候の發砲せるひびきをきく十一時四十分となるや第三中隊先散開し畧同時に第二中隊の一線も開展すこの時傳令は大隊長の命を第三中隊に傳ふ依て第三中隊は直ちに第二中隊の線と平行す時に四十五分なり、距離千三百米なり、この時迄松林に妨げられたりと見えし第一中隊は第一小隊をして散開せしめ大隊全線の連絡はじめて成るこの頃より天候次第に晴れて雨も止み戎士の劔は日光に映り闇浮の故郷人をして襟を正さしむ見渡せば沖の方雲封して未だ開かず濤聲の呻きは海若の怒りをさどす

が如く瞋恚の妄執來り襲ひて野蕘徒らにうなだれて枯れ行く戰死の屍に歎くに似たり、援隊たる第四中隊は戰線の後方三百のところに在り、十二時二分前に至る迄數回の躍進をこゝろみてますゝ敵に肉薄せり而してこの時機を見るに敏なる第三中隊長は番屋方向より一ケ小隊を挺身増加せしめて敵の右翼を衝くの策に出づ、正十二時第一第二第三の中隊は全部散開を終了す距離も六〇〇米に迄至るこゝに於て大隊長は一樣に前進を命ず、既に敵軍火力衰へて味方の突貫の機運いよゝ熟す、大隊長は突撃の命令を全線に與へ軍旗及び第四中隊も戰線に入りこゝに一同最後の活劇に移れり

○時十五分こゝに大局を結ぶ、またも天候險惡となり雨さへ加はり耗數の色一体にみなざる

大隊長の講評

今日は天候の險惡なりしにかゝはらず途上行

軍も余り大なる間隔も生ぜず一般可と認む然れども天候も良く道路も泥濘なかりせば諸氏の一層の奮勵を期せられむ事を望む

次に攻撃動作、これも一般の活氣は第二期の演習の上に出づ然れども尙ほ少數の緩遅なりしは遺憾なり、散開に際しては人數の多數に比しては割合に連絡とれたり總じて突撃は好期を逸せず一同に進まざるべからず今日の場合前面即ち第二中隊の位置より敵に全力をあげて突入せば更に効果大なりしならむこれは今日の地形上より已むを得ぬ事なれども尙ほ猛烈なる精神の發揮に努められむ事を望む空包の使用法 今日距離の余り遠き所に於て打ち過し如く思はる如此千二百若しくは千三百の如き遠きにありては團體に向へばいざ知らず散兵に對しては如何に精練なる兵士も容易に實際の効果をあらはし得ざるものなり

然も適當なる防禦工事を施せる場合に在りては殆ど無効なり

× × × × ×

かくて戦場を後にして一時半安原に到着し午食を終へて途上縦隊にて三時半したはしき校門をくぐり。

(終り)

◎第一回戦 五月八日 審判 秋月氏

紅東關 鯉島本溪口田水得點三

失策 一〇

PB } 2B C 1B 2B P 3B SS LF CF RF

白宮越住谷山邊田久川得點七
黒黒來京提渡澤大吉安全打二
失策 五

野球部報告

春季野球大會記事

五月八日より約一週間の豫定で例年通り春季野球大會を開催す。

本年は出場者非常に多く甚だ盛會であつた。大抵はいゝ組合で皆クロスゲームだつた。しかし何といつても元來が混合チームだから、チームワリーグが少しも無く、それが爲興味を削いだ事もう一つ同じく四回目に提山の打つたフライを

梶島バックして取り、其上二壘にあつた京谷をダブルに刺したも見事く。

◎第二回戦 五月九日 審判 廣野氏 菅波氏

これは全大會中最もいゝ顔振れた、どちらを見ても、實によく揃つて居る。打撃は紅組の方が振つたが守備は白組の方が巧みだつた。紅組のタイムリーヒットと、白組の四回目に於ける二つのタイムリーエラーとが直接の原因となつて白組惜しい所で負けた。白の先頭朝倉、遊撃を襲ふて危ふく生きたが三壘に刺され、紅組の岩田四球に出でたが石澤の遊撃ゴロに二壘にフォースされ終る。二回目に二死者の後瀧原死球を食つて出でバースボールで二壘に進む。田島のゴロ猛然三壘を襲ふと見るや、捨て鉢になつて三壘に突進した。堀之を取つて一壘に投げたはいゝが、非常な悪球で瀧原マンマと本壘を陥れた。白に一点を先きんせられ、紅も黙して居られぬ、山下同じく死球で出る、流石ランニングはお手のものだ、二壘を奪ふ。鈴木フライを遊撃に呈し、永田あせり過ぎて三振に倒れ、白ヤット安心した所が、ジャイアント小此木憂然一壘、二壘間を抜いて、山下長驅本壘に突入し同点となる。三、四回は白組全く、敵投手石澤に弄殺せられたが、紅組は四回目に堀出で、二壘を攻めると北川之をファンブルし、投げた球が素敵に高かつたので堀サッサと二壘に達する。山下之を三壘に送り、鈴木遊撃ゴロに、堀生還、朝倉の投球を一壘手とり損じ、鈴木危ふい命を助かつたばかりか二壘をも合せ得た。体の小さいがまゝに敏捷に三壘を盗む、危機せまる、永田の二壘、一壘間を突破するヒットは絶好のタイムリーヒットとなり、鈴木躍然ホーミインして、茲に二点を超過した。奮然として代り攻めたる白軍を、石澤悠々として、朝倉川

島を屠つたが柴見事遊撃の右を抜き、之に氣を得た丹羽、鐵棍一振二壘手の頭上をブチ抜き、大喝采の中に柴疾走、本壘に猪突す、山下球を手にするや之をホームに投じたるも少しく正確を失し、走者につける能はず、此間に丹羽二壘に至り、三壘を冒險す。打者は今井なり、今一点は疑なかつたが、満身の力をこめて打つた大飛球を山下疾走掌中に納む、五回、六回紅軍三壘に至つて脅かしたが、白軍よく之を食ひ止め、且つ残る一点の回復に力めたが敵もさるもの、守りを堅くして抜く能はず。遂に二對三プラ

スAと云ふクロスゲームにて紅軍の勝利とはなつた。初めから終り迄、手に汗を握らせるプレーばかりであつた。

軍	倉島	羽井川	原島	部	打撃數	二四	得點	二〇	(石)
白	朝川	柴丹	今北	瀧田	六	盗	二	三	振
	6.	5.	3.	2.	7.	4.	9.	8.	1.
						失	二	四	球
						策	二	七	者
									七

軍 山西田澤 下木田木 打撃數 二三 得點 三プラスA
紅 中大岩石堀山鈴永小 此 安全打 一〇 四三振 五六
7. 4. 2. 1. 5. 8. 9. 9. 3. 失 策 六 殘壘者 七

◎第三回戰 五月十四日 審判 塚田氏

之は一方は三部二年、他方は三部一年、下手ながらも、クラスチャンだ。中々面白かつた。練習なんか三年の方がすつとうまいんだが、マッヂになるとエラー續出して、どうく敗れた。しかし打撃は素敵によく利いて随分二年軍を苦しめた。二年軍の打撃振は實に氣の毒な位で、あれでよく勝つたものだと思はしめる。守備はかなり堅かつた。まア、面の皮の厚さと、色の黒さで勝つたんだ。一回目吉田遊撃、三壘間を突破して出で二壘を盗んだが、林のフライに二壘にダブルプレーせられた。二年軍凡死、ただ遊撃の失に出た平野三壘に達したのみ。二回目になると、一年軍大塚と吉村とのヒットで先づ三点を舉げる、所が二年軍相變らず振はない。

三回目に吉田又もやヒットに出で、ごうにかこづく林、小林、中島皆よく打つて三点を取り返うにか、生還して一点を加へた。こいつは危ふされた。此回に在つて、大塚の棒の様な直球をいなど見てると、二死者の後に出了た久留遊撃の金子ハッシと止めて、小林を一壘にダブルに刺失に生き二壘を奪ひ、大西の投手ゴロに三壘に達する、大西からうじて一壘に命を拾ひ、直ぐ二壘を頂戴する、此時現はれたるは強打者平野、打ちも打たり憂然の音をなしたる、直球は、見事右翼ファウルラインの内方五寸ばかりの所を過ぎ當日唯一の三壘打となつた。久留、大西歡呼の中にホームインし、右翼手よりの球を得た大塚三壘に高い球を投げたので平野早速生還、三点を回復した。四回目又もやドシく打つて彼の大人の妙技は巧みに味方の危機を喰ひ止めた。代混戦に乘じ、しばく満壘となつて攻めたて一り攻め、小杉あまりあせり過ぎて、凡死したが舉五点を加へた。茲に於て形勢一變、安心した久留危ふく一壘に助かり二壘を冒險す、大西の五回目安達三壘手の頭上を抜いて出る、御大將吉田、今度は左翼手の頭上をブチ抜いて二壘打をする、打撃振り益々出で、益々猛烈だ。つ

火の出る様な勢で二壘手の股下を貫き久留、大西雀躍生還し、二年軍はようやく勝つ事が出来た。

軍	留西野	村満千玉	得点	一〇	三振	一〇	六
年	久大平	林奥合	金兒小	安全打	五	四	〇
二	八	六	三	五	一	四	九
三	五	一	四	九	七	失策	策
軍	田林塚	島藤村	田達	得点	九	三	振
年	吉林小	大申齋	吉岩安	安全打	一〇	七	四
二	四	三	一	八	五	七	六
三	一	八	五	七	六	九	失策
四	三	一	八	五	七	六	九
五	七	六	九	失策	一〇	七	四
六	九	失策	一〇	七	四	三	振
七	六	九	失策	一〇	七	四	三
八	五	七	六	九	失策	一〇	七
九	七	六	九	失策	一〇	七	四
一〇	六	九	失策	一〇	七	四	三

◎第四回戦 五月十七日 審判 神尾氏 菅波氏

對手は一中、工業、商業の聯合軍、勝敗は初めから分明だったが面白い試合にはなるだろうと思つた。所が向ふが一向振はない所へ、こちらが素敵によく當つたから随分ひどい成績になつてしまつた。打撃の最もよく利いたのは矢張塚田、浅水だ、神田、吉田共に見事な二壘打一本づゝある。敵の聯絡の不完全な所へ持つて来て、ドシドシ打つたのだから、失策ばかり。絶えず混亂を來たした。特に八回目はひどい、一舉六点

も奪はれた。結局は十四アラスA對一と云ふスコアになつた。彼の得た一点も、本當に拾ひもの、様だ。四回目に乾三壘を襲ふと、變なバウンドしたので、吉田奇麗にトンネルして之を生かした。かくて危ふく二壘三壘を盗み、本壘をうかふ、此時淺地立つて遊撃にゴロを呈す、瀬戸巧に取つて、本壘に投じたが少しく右に偏し、乾一点を挙げ得たのだ。此日淺水、山根、福田等皆腕のいい事猛烈だつた。彼にも相當強打者居るらしかつたが、大抵凡死してしまつた。

校	田羽水	根田戸田	得点	一四	三振	一〇	七
本	塚丹淺	山神福瀬	吉岩	安全打	八	三	振
三	八	一	四	一	七	二	六
四	一	四	一	七	二	六	九
五	九	一	四	一	七	二	六
六	九	一	四	一	七	二	六
七	二	六	九	失策	一〇	七	四
八	五	七	六	九	失策	一〇	七
九	七	六	九	失策	一〇	七	四
一〇	六	九	失策	一〇	七	四	三

校	得点	一	〇	二	二	三	〇	六	A
本	残壘	〇	〇	一	〇	〇	一	一	14
二	八	五	七	六	九	失策	一〇	七	四
三	一	四	一	七	二	六	九	失策	一〇
四	一	四	一	七	二	六	九	失策	一〇
五	九	一	四	一	七	二	六	九	失策
六	九	一	四	一	七	二	六	九	失策
七	二	六	九	失策	一〇	七	四	三	振
八	五	七	六	九	失策	一〇	七	四	三
九	七	六	九	失策	一〇	七	四	三	振
一〇	六	九	失策	一〇	七	四	三	振	一〇

軍	得点	一	〇	二	二	三	〇	六	A
年	久大平	林奥合	金兒小	安全打	八	三	振	一〇	七
二	八	六	三	五	一	四	九	七	六
三	五	一	四	九	七	六	九	失策	一〇
四	三	一	八	五	七	六	九	失策	一〇
五	七	六	九	失策	一〇	七	四	三	振
六	九	失策	一〇	七	四	三	振	一〇	七
七	六	九	失策	一〇	七	四	三	振	一〇
八	五	七	六	九	失策	一〇	七	四	三
九	七	六	九	失策	一〇	七	四	三	振
一〇	六	九	失策	一〇	七	四	三	振	一〇

此マッチは十日舉行の豫定なりしも雨天の爲十七日舉行せり。

◎第五回戦 五月十一日 審判 神田氏 渡部氏

之も對外試合だ。敵は醫專、一中、小松だ。元は二中の豫定だつたが出場出来ない旨申し來つたので、小松が代つたのだ。此日は彼の投手西川、さつぱり成績が悪くて四球も多いし、且ドシドシ打たれる。打たれると野手に失策が多く、實に意外にひどい得点となつた。神尾は實に最後の奮闘をなした。打撃の成績は

最もいい。塚田、二壘打を二本もとばして居る、それに次いで廣野、菅波だ。田村もレストオーバのいゝ二壘打があるが其外の人あまり振はなかつた。守備は相變らず堅いものだ。彼の二壘を踏んだ者僅かに二人あるのみ。向ふで守備の特に見立つたのは遊撃西田だ。二回目に神尾三壘、廣野二壘にあつた場合に、塚田の鐵砲丸の如き直球を見事止めて神尾を三壘に刺したはファインプレーだつた。菅波矢張素敵な出來だ。特に七回目なんか三人とも奇麗に振つてゐる。

校	尾野田波	谷路本村	得点	二	三	振	一〇
本	神廣塚	菅原米淡山	安全打	一〇	三	九	〇
二	八	六	一	七	五	二	九
三	五	一	四	九	七	六	九
四	三	一	八	五	七	六	九
五	七	六	九	失策	一〇	七	四
六	九	失策	一〇	七	四	三	振
七	二	六	九	失策	一〇	七	四
八	五	七	六	九	失策	一〇	七
九	七	六	九	失策	一〇	七	四
一〇	六	九	失策	一〇	七	四	三

本	
殘	ヒツ
壘	ト
1.	1
1	4
1	0
1	2
0	0
3	3

二壘打、神尾一、塚田
二、田村一
ダブルプレー西田、

辻

聯合	得	
残	ヒ	
壘	ツ	
	ト	點
0	0	0
1	0	0
0	0	0
0	0	0
0	1	0
2	1	0
0	0	0
3, 2, 0		

試合時間 一時間四十分

◎第六回戰 五月十一日 審判 丹羽氏
之は兩者の力量相匹敵して、いゝクロスゲーム
となつた。

白組	藤岡本	津岡林次井	得點	八三振	三(川)
SS	佐富橋森	大西小石	安全打	七四球	二(川)
C					
3B					
1B					
P					
2B					
LF					
CF					
RF					
	失策			六殘壘	六

組		紅
川野木後田上滿野木々々	湯牧鈴肥太川合大佐	C 3B SS 1B 2B P LF CF RF
得點	安全打	失策
九三振八(大)	四四球四(大)	四殘壘一

白軍よく打ち、紅軍よく守つた、白軍の殘蟲者復し、其差一点となつた。紅軍奮戦したが天津の多いのは、白軍の攻撃力の強くして、紅軍のよく之を防ぎ、白軍の最後の努力も水の泡とな守備の巧みなるを示す。得点の大きくなつたにり、責任打者として立つたる大津の打つた熱球

を鈴木見事つかんで一壘に之を刺し、白軍遂に敗れた。投手として大津の成績は非常によかつた。

◎第七回戰
五月十七日
審判 田村氏

之は東野氣の毒にも肩を痛めて居たので随分打たれた、後で橋本之に代つたが、紅軍の攻撃矢張振はず遂に大敗した。

紅	軍	白	軍
3B	響北橋	3B	部橋藤
C		P	阿市佐
1B		SS	
P			北川秀
SS	白	CF	
1B			石
P	東塚高	C	邊
SS	中牛	2B	井六野
2B		LF	合谷
LF		1B	
CF		RF	
RF			
失安得	失安得	失安得	失安得
策打點	策打點	策打點	策打點
一一三	一一三	三三三	三三三
四球	三振	四球	三振
○	一(市)	(東)橋	(東)橋

第一回目及第二回目の紅軍の大混亂が、直接の敗因となつた。此日、白軍の投手市橋の出來は非常なもんだつた。紅軍すつかり打撃を封じられてしまつた。かくして白軍は一回目に三点、二回目に六点、四回目に一点と漸次得点を加へ、結

かゝはらず、活氣に満ちた試合だつた。紅軍、湯野川、牧野、鈴木のヒットで二点を得ると。白軍巧みに敵の堅壘を亂だして二点を取り返へす。此時の紅軍のエラー二つはよく利いた。二

回目合満死球に出で湯野川代走して一点を加へるこ、石川一壘に危ふく生き、佐藤のヒットで生還する。三回目牧野、遊撃の惡球に命を拾ひ、鈴木本の三壘遊撃間を抜く痛快な二壘打で牧野生還、鈴木亦肥後のピッチゴロにホームインした。所が白軍西岡のいゝヒットあつたが一点も挙げられない。五回目に紅軍敵の失に乘じ四点を加へた。そこで白軍必死となり富岡、橋本、石川皆安打し、佐藤の二壘手の頭上を抜く二壘打立派なタイムリーヒットとなり一舉にして五点を回復し、其差一点となつた。紅軍奮戦したが大津よく之を防ぎ、白軍の最後の努力も水の泡となり、責任打者として立つたる大津の打つた熱球

◎第八回戰 五月十五日 審判・淡路氏

之は十二日にある筈だったが雨天の爲延期せられ十五日に舉行せられた。

紅軍
山島上村坂川島島村
獅高水西石中浦田布
安金打二
四球
三(百)

P
C
1B
2B
3B
SS
LF
CF
RF

練村田原惣岩田岡肥	得點	五	三振	四(獅)
川邊				
石居石青渡平栗神土	安全打	〇	四球	四(獅)
白軍				

兩軍とも守備はかなり、巧みだつたが打撃が少しも利かない。獅山の此日の出来はあまりよく

無い、もう少し肩がよかつたらたとへ勝てなくともクロスゲームにはなつて居たゝらう。白軍にはヒットと見るべきもの一つも無かつたが、よく敵の失に乗じ、隙をうかひ五点を得た。紅軍は一壘の失に生きた水上が涌島のヒットで生

◎第九回戰
五月十七日
審判 田村氏

之が當大會の最後だ。之も十三日にある豫定の
が此日になつたのだ。

紅	軍	白	軍
P	湯	SS	西
C	山	C	田
1B	宮	1B	川
2B	川	2B	本
3B	上	3B	村
RF	島	P	枝
CF	口	LF	藤
SS	原	CF	上
	藤		
失	得	失	得
策	全	策	全
	打		打
五	四	二	四
	一		
	三		三
	球		球
	五		四
	吉		湯
	三		
	吉		

いチャンスが出来た。湯野川三壘手の頭上を抜いて出で二壘を奪つたが、山中の大飛球到底取れないだらうと思つたのが、西村見事取つたので湯野川二壘に刺され爲すなし、其後に宮川の遊撃の頭上を抜くヒットあつたのに惜しい事をしたものだ。白軍も一向振はず遂に四對一で白軍の勝となつた。

ヒットなんかは紅軍の方が多いし、打撃もよく、川、安齋兩先生に我々一同厚く感謝する次第。利いたが白軍の守備は堅い。所が紅軍にはタイ大會の記事もう少し詳細に書くつもりだったが、紙面の都合ですつと簡單にしてしまった。

点を占められた。三回目紅軍代り攻め湯野川敵軍の失に生き二壘を盗む、山中見事三壘遊撃間を突破し二壘打となる、湯野川生還未だ無死者だから有望だったが川上の遊撃フライにダブルプレーせられ、折角の好機を逸す。第五回にもい

それからクラスマッチの記事皆書く筈だった。が之も紙面の都合ですつかり畧してしまつた。

（若記）

劍道部報

北辰會劍道大會

大正二年二月十一日、北國の町にも珍らしい大雪であつた、間斷しつかり無しに、宵中降り續いて、朝になつて吹雪と變り、五尺許積つた雪の丘が、烟の様に舞上る！。人つ子一人通らない深い道を、それでも元氣よく竹刀を擔いて、四高の學生さんが行く。

學校の門に、劔道大會於無聲堂と、筆太に書かれた掲示板が、自慢相に立つてる。試合が九時から初まつて「ヤッ」「オー」の掛聲が外に洩れて、北國の武士に相應しく、威勢の良い事無之上だ。

諒闇中のことで、一体が地味で、謹直であつたが、押へ切れない元氣は、焔の様に猛り起つ

守中 永	杉三 本清	平眞 野繼	大野 館路	谷小 原靖	鈴狩 木敬野	石藤 田大	田坂 中村
能廣 村野	谷伊 口藤	川野 上尻	中柳 平	深久 井留	金北 子正條	石橫 坂江脩	外牧 野利
長西 曾我部岡	柳宮 川川	森饗 田庭	小坂 川東	盛池 田慎	小橋 野鈔爪	東田 中利	細桑 川尾
三六 上八 宗部	久田 保淵	坂山 田敏	前岡 田三	矢鰐 部淵	平江 利川	山植 田木	阿中 部明田

〇〇五香屋
高野

以上本校内の三本勝負

右の内、中對守永の試合は中々興味があつた、守永の胴切は定評のある所なるが、流石の中將軍、巧みに之をあしらつたる所、立派なもの。

能村對廣野は、一寸見られぬ好取組、此試合如何と、一同手に汗して見物せるも道理く、廣野日頃の頑強に似ず、鮮かに甲手を得たれど、胴と面を得られて、能村の老巧にしてやられしは、未だ若き所有り、されど選手一同が氏に大なる期待を待つ。長曾我部剛敵西岡を破ぶりは、戰運目出度く、得意想ふべし。三上宗輔、六人部を葬りしは、日頃の熱心の効にて、試合振も健實なりし。五香屋對高野、由來五香屋將軍の太刀先は、變幻出沒を以て鳴る、高野氏あしらいかねて退く、此試合勝て骨が折れ敗けて

骨が折れ、戰やんで、あゝ疲勞くたびれた哩と吐息をつく。

正午休憩、午後一時より、更に對外三本勝負が初まつた。荒れ狂ふた吹雪もやんで、窓より朗らかな光が射す、參觀人堂に満ちて、活氣一段と加はる。

〇〇商業
中 中 田

流石の商業の勇將中田も、中に向つては勝味が無く、胴を二度迄得られて倒る。

〇〇二中
野村 銳夫
藤田 豪

野村は、二中に名のある勇將、此迄の數度の戰に武勳天晴なるもの、藤田は一中在學當時の名將、去る日一中が醫專と戰つて勝ちし時、數將を切て落したる剛のものなり、藤田先づ十八番の甲手切をやつて一本を占むれば、野村面を得て互角となる、藤田またしても甲手かと思へ

ば、豈計らんや、横面の奇策見事に功を奏して勝つ、此の人に横面の業有りとは、知らなんだ知らなんだ。

〇〇二中
野村
宮崎

二中に二人野村の稱有る、此も中々の名將軍、宮崎は五十七郡に名を轟せし、男之助位の比に非ざるの勇將なるも、久しき病に、意の如くならず、突と甲手を得られて退く、されど腕より云は段の違ふ所、尋常では、流石の野村も、手の出ぬ所なり。

〇〇騎九
川 島
渡部 二郎

川島武男の如き、生優しき男に非らず「ヤッ」と一聲雷鳴の如かり、面を得て、勢益々盛なりしも、此方も新進の若武者、二度迄胴を切拂へば、彼一トたまりも無く、無念と叫びしも、遅かつたり。

〇〇商業
中 橋
稻葉龍三郎

腕にかけては稻葉數段の巧者なるも、未だ年若くして勝を逸したるは惜し、互に面、甲手を得て引分となる。

〇〇監獄
谷
廣野 寛

一年昔の戰に彼谷將軍、天晴の功をなし、武運目出度今日も此若武者の首かき切つて、年は取ても名は何んとかを誇らんとせしも、ドッコイ、さうは行かず、躰は小さうても、唐辛、ピリリと一本甲手をやられて吃驚仰天、躰は頰れて二度目の甲手に、アハヤ之迄と思ひしも、ヤットコシヨと逃げて、血塗れになつての狂ひ打、それが見事に面に入りしは流石の老將也「永き戰は躰の亂る許り、屢々憩ひ候らへ」と引分けられて此の戰終る。

○○(工業)宮村
渡邊二郎

工業に響いた勇將なれど、先きに川島を葬つて、層一層の元氣を増した渡邊の敵にあらず、無残面と甲手を得られて彼退く。

○○(警察)山
肥後誠二郎

警察署内切つての豪の者、過ぐる戦に、常に晴々しき試合を見せて名有り、一度は肥後の眞一文字の胴に血煙上げしが、面を返して引分となる。

○○(二中)大
廣瀬季家

彼も二中の重鎮、此迄の戦に幾度となく出戦して、剛の名を挙げしもの、此方は一中全盛時代の副將にて、輕快隼の稱有る廣瀬季家なり、戦數合十八番の甲手にて先づ廣瀬勝ち、彼も胴を拂て互角となりしも、終に又しても甲手を落

されて彼は黙しぬ、廣瀬に甲手の早業あるは定評有る所、殊に先きの甲手を打ちし時既に彼の甲手は尋常一様の得技業ならぬ事知れ切つたる事也、此に備ふるの術無かりしは彼の敗因にて、此の覺悟無くては、いつ迄も駄目、彼も未だ若いかな。

(一中)島崎
山本與吉

由來一中は、曲者を出す(劍術に於て)此の人如何あらんと、山本氏中々油斷せず、竹刀先にて一合二合、何是れしきの者と見て取るや忽ち甲手、彼れも取返さんと努めしも、腕に差ありて思ふ様にゆかず、突を得られて倒る、山本突を得しこと珍らし、思もよらぬ業を御所持なさるな。

○○(一中)清水友二郎
相蘇保

老將相蘇病を重ねて、意氣揚がらず、巧に新

進の小冠者清水を操りしも、遂に甲手と突をせしめらる。

○○(工業)室天秀太郎
飯島義寛

吾こそは工業に……と新進氣鋭の室矢か一杯に働けども、老將飯島悠々甲手を頂戴す、サ失敗たり己奴返さじには置くべきやと、數次の胴切に室矢暴れ狂へば、其では斯ふしてやると飯島十八番の秘術突を出して引導を渡す。

○○(二中)木村幹
宗接鶴榮

二中の副將木村幹殿、再度の突の強襲見事に成功して、宗接動々狼狽の形有りしも、流石は四高の中堅、サット一閃、忽ち甲手を頂戴、續いて何の容赦もなく胴の重ね打に、木村も施す術なく倒る、宗接の胴は十八番の飛道具なれど、今少しく業に工夫あつて然るべく、されど甲手を得し時の立派さは、氏の位置を輕からしめず、

太刀を晴眼につけ、ツカ／＼と推し寄すれば、木村勝手惡るしと一足退く瞬間、ハット切り落す甲手の付け根、大丈夫の攻め口にて、軀は亂れず中々の甘味有り。

○○(商業)村松薫
宮崎孝三

彼方は白面の美少年、然も商業の御大將にて、此迄の合戦に常に花々しき手練を示したる花武者、此方は胴で良し面でよし、自由の早業に四高道場の若武者と稱せらる、宮崎のオッサン也、戦十數合、村松能く防ぎしも、遂に宮崎の面と胴とに果敢なくも消えて、場内鮮血漂々！。

○○(一中)中島清
宮内直吉

中島如何に新進の氣に富むも、老練の宮内に敵すべうも無く宮内特技の横面と面とに鮮かに勝名乗を揚ぐ。

○○(一中)山崎
浅水成次郎

此方は六尺豊かの大巨軀、筋肉肩に怒りて見るからに雄々しく、柔道二段と云ふ押すに押さ

れぬ金箔付、山崎氏一將を得ば末代迄の家門の榮譽こ、必死に勵みしも、閃一闪横に拂つた眞一文字、山崎の胴は二つになつたり、續いて數合浅水將軍又しても得意に甲手を取る。

（工業 能關力松）

〇〇 辻岡 質

彼方は工業の御大將也、吾破ぶるれば工業全滅の悲境、如何なる憂目に會ふとも、南無三此敵逃がしてなるものと攻め寄する、此方は近來頓に腕を上げたる辻岡將軍也、將軍の太刀空に一閃忽ち横面、更に一閃また横面、流石力み返つた能關も、何の事なく死す、元氣一杯の辻岡に對して試合は之が順當なるも、二度目の横面の時何故に右に拂つて面と飛び込まざりしや、當時辻岡の後足は延び切つて一步も前に出ぬ所なり、唯狼狽して一閃の露となる餘りにも

ろし。

〇（二中 久保 互）
高田 昇

二中の御大將、久保必死と攻め立つるも、此方は音に聞えた高田昇眞向上段梨割に面を打ちたり、互無念と思ひけむ、ヤッと飛びこむ面の返禮、半鏡何んとかの稱ある長身の高田も遂に見事に受け損したり、勝負は互角となりしも忽ち高田は秘法の胴を得て勝つ。

是時大日本武徳流之形を演ず（高橋良策 稻本龍介）

終て寒稽古皆勤者報告續て進級者氏名報告が有つた、其は別項に記す事とした。其が終ると對外三本勝負が引續行なはれ、場内益々活氣を呈して、各選手の意氣天をつく……。

〇（一中 宮崎五十一）
國岡 連樹

彼は第一中學の御大將、黒皮威の冑着て、二

尺八寸の大太刀佩き、見るからにすさまじかり、此方は新進の國岡にて、すでに定評有り、此迄の各地の戦に彼の刃の露となりしもの幾人なるを知らず見るもの手に汗を握る、丁々發止、國岡がサツと打込む十八番の胴無念宮崎は受け損じたり、宮崎猛り起てやつと操り出す右片手面、見事に得たれば、勝負は此處に互角となり、接戦更に十數合、宮崎再び右片手打の面を出す、アハヤ國岡眞二ツと思ひきや、國岡ハツと一足引く、及は面鐵にガチン、國岡如何なる隙を得けんお甲手と切込む、流石の宮崎も遂に倒れてしまつた。

〇（歩兵七 伊 藤）
小坂嘉一郎

誰しも勝味は小坂に有る者と信じ切つてた、吾人は殆ど勝負にはなるまいとさへ評價してたのであつた、然し勝負は案外胴を二本得られて小坂の敗となつた、大番狂で有る、由來小坂の劔は立派で無理のない、素直で有る而して敦盛此處に顯れたりと許りの華奢な鉢格で、其の對手として伊藤將軍は軍隊切つての荒武者、勝負はどうかすると此歴具合に行く、兎も角四高の重鎮を得た伊藤將軍の得意想ふべし。

勝負は順當なのである、此迄激しい戦があらふとは誰も豫期しなかつたので、どうして此歴惡戦苦闘を國岡がしたかと云ふと、國岡は稍々勝を急いであせつた、而して宮崎は出来る丈け落付拂つて向つた、百發百中の評ある國岡の突

〇（歩七 林 國岡）

前回の試合と全く異なつて、充分落ちついた

（しょうか）は愛嬌く、（相撲でありませんから

國岡、こうなつては流石の林も手の出よう筈な

……）と審判の捌も振るつて、更に數合

の類ると見る間に、國岡十八番のお突、國岡の

したれど勝負なく引分。

勝は樂なもの、此試合國岡に危い所毫釐もなく、

近來辻岡の健實、驚く許り、ツカ／＼と進ん

疾風の如き早太刀は正に天下一品。

で、サット太刀を振上ぐると思つて甲手、三橋

があせつて、面と飛び込む瞬間、半身に構ひて

甲手を切つて落とす、危きが如くにて、危から

防戦、さしもの道場、所狭まき感あり、金本追

ざる、辻岡近頃老練の域に入つたり。

ひかけ／＼横に拂つた一文字、見事胴は眞二ツ、

勇氣勃々、四高道場の名物高橋良策ツカツカ

中村之ではならぬと必死と打込む太刀首尾よ

と三步踏み出し、五尺後に退がつて、左手を柄

も何糞と打突かれは、當て碎けることは此事、中

村ステンドと轉倒す、失敗たりと起ち上がろう

とする所を上から抱き締る、二十貫の大兵に押

胴、今日も此のお胴にて晴々しい勝と思の外、

憐れと思ひけん（此まゝ締殺しても良ふ御座ん

破ぶる。

〇〇（歩兵七

蓮 湯野川國左右 花

彼方は歩七聯隊唯一の豪の者、先年稻葉將軍

殿、黒皮緘の冑に、甲鐵の甲、二尺八寸の太刀

と戦て分をとつたる何と云つても曲者也、此方

抜きはなち、口一文字に結びて、突立ち上がり

は四高新進の大元氣者、此戦如何と、堂内鳴を

たる風情勇々し、此方は重き病を押しての出陣、

静め、汗を握ての見物、離れては接し、接して

戦友二人迄倒れて無念と思へど、病に勝てぬ悲

は引き、湯野川特技の御面を見舞は、彼流して

運の破目、衰頹の身を以て何程の働をする人

強引のお胴を襲ふこと數度、湯野川敵を壓して

人あはれがりて見る、福島悠々と進み、青眼に

上手の隅に押つめる事三度、又押しつめられし

構へてジリジリと押しゆき、上手の端迄迫りて、

事二度、如何なる隙をや乗じけん、サッと走る

お突をねらふ一瞬、中浦氣をいらたて、骨

一閃、湯野川横面を殺がる、彼方も湯野川の甲

も碎けよと甲手を切落す、南無三！突如福島は

手の猛襲に淺手を受けて、戦血淋漓、此戦果つ

浦左に逃げるを追窮し、鉢の破ぶれるを待て大

べくも見へざりしが遂に蓮花の突受け損じて此

きく甲手を切落として福島勝つ、たつた二太刀

方敗れしは惜し、勝敗は時の勢也、湯野川餘

さはあつけ無し、中浦が福島に押されて、上手

に敵を重く見しが誤ならざりしや。

の端迄施す術を選ばざりしは敗因也、あそこで

〇〇（無形堂 中浦 榮吉

が乗つてゐる事として自分の鉢の破ぶるゝ許り、福

福島藤次郎

彼方は無形堂を獨りで背負て立つたる中浦

島づるい所をねらつたもの也。

○(騎兵九) 仲西爲次郎
金本萬吉

仲西野猪の如く荒れ狂ふ、騎兵式に右片手の面を襲ふ事一再ならず、金本拂ひ除け／＼ヤツと切込む胴見事眞二つ、仲西油紙に火がついて其上に更に石油を注いだ様、強暴益々激し、其効有りてサツと拂た胴、甘く一本を返したり、機に乗じて猛り起て攻め寄すれど何時迄も甘い事がついて廻はらず、金本が是迄なりとお胴の引導を渡す、仲西不平相也、蓋し贅澤也、尋常に向てはあれ迄は働けぬもの也、金本飛んだ敵を引受けたもの、金本が最初に取た胴は見事であつた。

○(歩兵七) 富樫
○(騎兵九) 稻本龍介

彼方は大兵肥満の大男、短かい太刀を提げて出づ、此方は殊に小さい稻本龍介、殊に盲腸を病んで軽からず、此の度の合戦に怨を吞んで

差控へたるが、花々しき武夫の振舞見ては、起ても居ても堪まらず、日頃鍛えし此のかいな、能き敵あらば御座んなれ、何程の事や候はん、

此大兵に向ふ、武門に生れた子を持つ親心を追想す富樫この小輩奴と打ち込む胴、憐れ稻本受け損じたれど、稻本期する所有りて迫まらず、あせらず、ジリジリ押し寄せ、さしもの大兵下手迄追ひこまれ、逃れんに道なく鉢の頼るところを甲手を切落す、更に十數合、富樫あせつて切込むも、稻本虚心平氣に受けながし、右と左に追ひ廻はせば、富樫平降頓敗施す術無く又しても甲手をたゞき落さる、稻本のお甲手は十八番の秘術、病はあつても、腕は確かなもの、本當に可愛い子なり、速に病を癒して層一層の奮闘を熱禱す。

(歩兵七) 森田
高橋良策

高橋相變らず悠々と例の如く例の如し、前の戦に意外の失敗を見て充分用意して起つ、森田吾も此の將を得んものと突撃し来る、高橋一度は之を懷に受けて突放し、呼吸をもつかせず、お特技の胴切、森田苦もなく參つたり、森田取返さんものと手術を盡して攻めよする、高橋突き放なして寄せつけず、森田が甲手を切込むところ、之に空を打たせて颯と横面の奇策に出づ、見事の大成功、高橋の勝は順當の所なるも、強引の胴を切つて敵をあせられ、あせつて飛び込む敵を軽く横面で仕止めた所中々の妙味有りて、勃將軍名譽恢復をやつたと云ふもの

○(歩兵七) 鶴
福島藤次郎

彼方七聯隊有數の豪のもの、年々の大戦に、常に天晴の功を奏して鶴中尉殿の名つとに喧し、病鉢の福島此敵に向て如何の策戦に出づや、福島例に依て悠々迫まらず進み出でたり、

差控へたるが、花々しき武夫の振舞見ては、起

○(騎兵九) 西森善太郎
湯野川國左右

何時もながら、湯野川の腰は立派也、氣持よき懸聲堂を壓して、威風四邊を拂ふ、彼もさる

もの、今日の結びの試合に之の大物を獲んと、凄き許り、湯野川の術中の術を見るには此敵あ

まり輕かりしと思ふ如何？

る、湯野川何を猪小才と突放なす、西森また寄 右にて試合は終を告げ、校長閣下の訓示有り、する又突放なす、接戦數十合、上手の方に寄せ、來賓及び選手に茶菓を呈して會を閉じた、時ま下手の側に流れ、西森切に面を襲ふ、一瞬！間に四時也、終りに審判を賜はりし諸先生の勞一髪！湯野川颯と一閃切下げ胴を打てば、何條を謝し、來賓諸君の御厚意を深謝す。

堪まるべき、血煙上げて胴は眞二ツ、西森無念 因に記す、小松中學は當日の大雪に、線路不千萬と愈々猛りて突き来る、湯野川鮮かに流が 通となり、選手大會に間に合はざりしは遺憾にして、面、甲手に淺手を負はす、西森再び突進 又又醫專校の選手諸君の事情有りてや、見へざし強引の胴を打てば、南無三湯野川受け損じたりしは重ねくの遺憾であつた（福島記す）

り、湯野川切に面、甲手を襲ふ、西森必死と防ぎ、身に數ヶ所の傷を受けて、胃の袖は血汐に染まる、風なまぐさく、日は雲にかくれて、吹雪激しく名殘惜しくも再會を期して互に引分れぬ。

演說部報

第四回公開演說會

湯野川は見事なり、敵の進む退く其瞬間に襲 五月十一日午後一時より、縣會議事堂に於て。ふ面の鮮かなる羨望に價す、又甲手の早業も物 青葉の縁を濃くする卯の花くだしの霽れ上つて

初夏の若々しい日光が人の心を浮き立たせて居る、校庭には野球、庭球、弓術の大曾が催され何れ劣らじと群衆を招いで居る。薫り来る春風はゆるくれたたカーテンを通して熱球をかむバットの音、猛球をこばすラケットのうなり、折折は狂へるが如き野次の雄たけびを、かすかに階上に傳はつて来る。

過去一年の間我等の胸底に嘔きし懷、若い血潮と燃ゆる情とて作り上げられたる感想は徒に空々漠々なる叫となつて終るものであるまい、我等の眞率なる叫は必ずや醉生夢死のうちぶれの徒に或物をもたらしものなりと信するのである。

河合教授が壇に立つて我々の企の意味ある所を徐に説かれた時には聴衆が已に堂に半して居た。

一、建設と破壊

加藤松次郎君

世界の文明史といふは破壊と建設との連鎖である若し二十世紀を以て最文明なる時代とせば破壊と建設との交代の最も劇げしき故である、二十世紀は人と人と戦ひ人と自然と戦へる時代に於て、殊に人が自然を破壊する事の甚しき時代である、然し彼等はよく社會の向上に値し得る建設をなし得るであらうか。我は茲に至りてイスラエルの豫言者を憶ふと共に我國に偉大なる豫言者を欲するのである。とは論旨の大要である、今少しく平靜にやられたらばと思つた。

二、人生の歸趨

井村平次郎君

蕩々たる黄金萬能主義を痛罵し、現代は物質的内容充實にのみ走り何等の餘裕、何等の趣味をも認むるを知らず。されば時の流れに一切は征服し終らるゝにあらすや。吾人の意義ある生活とは緊張せる努力を持してすゝみ、趣味の人たるにあり、現代の生靈が運命と破壊の猛火に

襲はれ生存競争の紛亂の巷にあるを救済するは線の全通を見るこの好機を逸する勿れ、立たん實にこの意義ある生活によりて得らるべきな哉とは今日の石川縣人のとるべき格言なりと、我等青年は物質的内容の充實をすて眞の内的充實を求め、名實の伴はざる權勢地位に憧れ白くきかる、演説であつた。

四、活潑なる存在 井口長三君
我々は明日の中に生の享樂を味はんとするの希望の存在を認め、かくて明日は吾々を無極につなぐものなり。而して吾人の存在はこの希望の

三、立たん哉

竹田儀一君

彼の薩南の健兒、防長の志士の偉業は天下の仰く所なり而して百萬石の雄藩を以て常に幕府をして憚る所あらしめたる我が加賀藩の維新の際の態度は如何に緩慢、優柔不斷なりしよ、と憤慨一番し、加州人の氣質を地理的に、即風土の精神上に及ぼせる影響と、歴史遺傳性の方面よりと、宗教上の方面より。經濟上の立場より論及し由來北陸の英雄の失敗即謙信の失敗も、勝家の儉約により餘裕を求め得べし。吾人は明日家の滅亡も之皆僻遠の故なりしなり。今や北陸の價值を知り希望の存在を知り餘裕の配置によ

り活潑なる存在を形成し得へしと。所謂懸河の辯であつたが、少しく落ち着があつたらより以上に聽衆を動したらうと思はれた。

五、現實を歩む心

樫山 眞君

六、囁

新山 興次君

追懷文學の價值あり興味ある所以より説き起し、其の興味は一條的の追憶のメロディにあらずして其の者のハーモニイなりと説いて、次ぎに生活の藝術化とは又此メロディを一つ一つを取りて其の背後に潜む複雑なるライフを味ふ事にありと説き、更に現代人が自己の情緒を以て生を支配せんとし其の極は無理想的な生に悶へ居るを嘲り。各人が事々物々を其物全体として見る事能はずして解剖的に味はしむるにいたり、此の解剖的精神が自己の生活にまで立ち入り生の根本意義即理想をも把まんとするに至りぬ、而して総合的なメロディに心行くばかりの温味、即愛を以てこの生活の理想としたきなり

七、古道照顔色

巢山 了徹君

古人の言は精巧なり緻密なり、到底後人の企て及ばざるものなり、科學の進歩も畢竟するに故人のあとをたどりて僅に百尺竿頭一步をすゝめしものゝみ、之を以て吾人は古人の苦心の歴史を土芥視して徒に現代を謳歌すべきものにあらず、思想は變遷すれども之必ずしも進歩を意味せず、彼等の果して宇宙の眞理と合体するやは疑問なり、科學上の事はとまれ宗教上精神上に於ては古人の言によるべきなり、雜駁散漫なる今人の駄言は之を斥けて可なり、少くも讀書せんとする人は心すべき事ならずやと大に支那歴史の尊重を説き文天祥の正氣の歌は吾等青年の思想の根柢とすべきなりと論す。

聽衆の中に白髮の老人二人あり眞正面に座す。開會以來端然踞して動かす。君の演説をきいて會心の笑のたゞよふを見たり。

八、悲劇の主人公

安齋 教授

集れる聽衆の過半は先生の演説きかんがためなり、拍手の響、ごよめき、しばしやまず。謙遜なる挨拶ありて後先づ希臘神話のアンチゴーネの話をせられ、其主人公アンチゴーネの死は勿論法律を犯せるものなれば死にあたるべきならんも彼女の其の兄の屍を葬れるは神聖の禮法をなせるものにて意識的の愛情と、無意識的に當時の習慣よりも永久性を有する一の法則に遵へるによるものなり。此のアンチゴーネの悲惨なる最後に興味を有せる劇作者ヘッベルの作により其主人公の境涯を説かんとて「ヘロデスとマリムネ」に就きて解説し、評論し、更に一般の悲劇に於ける主人公の位置を説かれた。先生の趣味深き解説と、鋭利なる觀察眼による論評は深く感動を與へた、殊に先生の眞率熱心にせられた態度は聽者を動すこと大であつた。

九、キリスト教と歐洲文化

石川 教授

來られし諸君に對し 深く感謝する次第である。(N記)

基督教なるものゝ説明、文化の説明を平易に説かれ、次で歐洲文化の基督教に於ける關係接觸を説かれたのであるが、先生の蘊蓄を披瀝せられて、あまねく歐洲の哲學、文學の各方面に就きて詳細なる解説をせられたので、非常に趣味の深いものであつた。其の大意は本誌に記載せらるゝであらう。

十、閉會の辭

八波 教授

二分間の辛抱をと叫んで先生は登壇せられた。此の會の量に於てよりも質に於て豫期以上の好果を得たるを悦び、辯士聽衆の勞を謝して閉會の辭とせられた。

時に五時半。かくして講演部本年度の活動の幕をぞちた。四百の聽衆の散り行くあとを見送つて我等のこの企が何物かを彼等にもたらしたことのあるを信じた、茲に出演の諸兄並に集ひ

弓術部報

時は五月十一日空は一點の隈なく澄み渡りてまた無き日本晴れの好天氣である日毎にまざる青葉の梢に移り啼く小鳥の妙音も坐ろに我等が心の駒に鞭を加ふるの思がせられる。況して約半歳の塾居に勇心勃々うたゝ堪へ切れ無かつた煮え返るが如き衝動はたとへば閉切た一室より出でゝすがゝしき大氣の波に觸れたらん時のやう一時に突發し來た茲數日來の校庭にはノックの音とラケットの響に充ち満ちて居る一方に於て無聲堂裡の弓術道場では昔取た杵柄の腕試しさんと此日朝八時より例の如く大會の幕は切り落された。長い間自然の發育に放任されて居た

杉の生垣もサッパリ刈り取られて涼し相な面容の頼に道場の神聖を増した様に見える。

先づ式の順序は尺五的の點取り競射より始まる此競射に於ける成績こそ當日手腕試しの試金石である吾れこそと高く構へて功名を夢みた者の哀れ武運拙なく陣容將に危殆ならんとするに引替へ置れたる八幡の寵兒は場の各方より現れ來し矢繼ぎ早の妙手にさす手引く手の適中また適中那須野與市も將に三舍を避けなんとするの番狂せには拍手する一方に於て青息き吐息きの歎を洩して居る者も少くない斯くて約四十名の中に在て拔群の成績により名譽の月桂冠を得られたる本競技の勇士は南三九郎君其人である。

次で曩きの成績順により數取競射に入る。是れまた成績の結果は曩きのレコードを追ひ鏃と標的とに同極の磁力作用が施されて反撥されたる者の多くは曩きの敗戦者である新進の意氣と

非凡なる技倆とを持ち同輩の輿望とを負て陣頭に立た野球界の好漢廣野の奮闘を以てするも軍功相並ぶ小林、植木の兩君との白兵戦により九俘の功一簣に落ちて功一級に値したる名譽の優勝者は新進の好射手小林君と決定した。

時正に二時招待したる醫專、一中兩校選手は鳴を静めて徐ろに戦機を待つ、各五人宛の選手之を三組に配して相對す正に是れ當日に於ける晴れの戦場である。第一回本校の小野立て戦ふ總じて機向熟さうりけむ平凡にして終る。第二回土肥、諸井出づ愈々出で、愈々振はざる事甚し。茲に至て第三回の競射線の展開となる控へたるは各校の重鎮を以て任ずる戦士である本校の廣野、篠原出陣するに先立ち校弓術の興廢此一舉に在るを奏して八幡の神に瞑目する所あり陣容頗に整ふ他の兩校の戦士また然るや交戦愈酣となりけれ共戦利常に吾に多くして篠原、

廣野等優に敵を壓し其戦局は首尾せり廣野、篠原及び一中の戦士成瀬君を優勝者とした。

來賓競射は市内有數の好弓家を以てせる事であるから其成績の美事なる事も敢て珍とするに足らぬ結局一中出身の麒麟兒塩谷榮策君の名譽に歸した。紅白勝負三人抜き二人抜きを終て金の一本の競射を行ふた然し馬の眼程の者には一寸側へも寄らぬ二本目を射る事になり結局は是に得意の評ある廣野の陥落する所となつて是れで當日の競技は終りを告げた今年は新進の諸君に熱心家好射手が多くあつて僕等の經驗上未曾有の盛況であつたのは甚だ愉快とする所であり將來の發展も望まれて頼もしかつた。(M生)

柔道部報

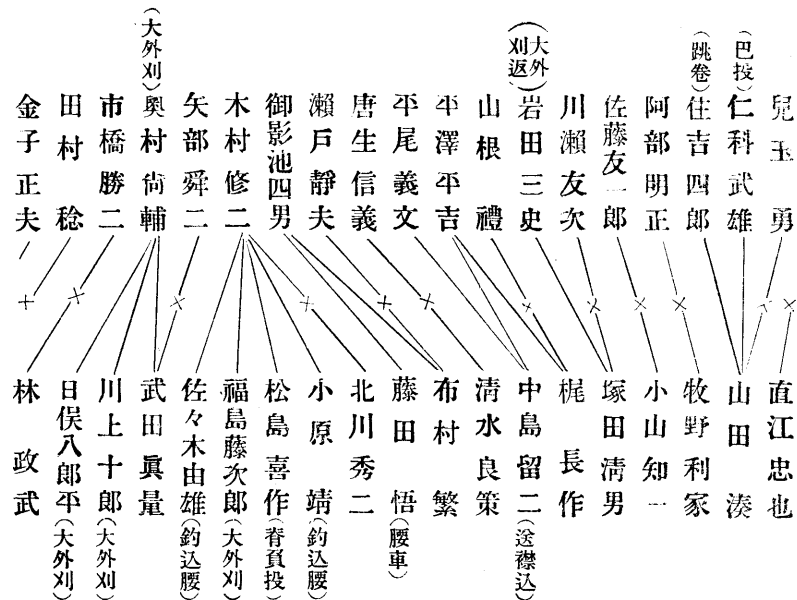
五月二十四日午後一時より本校無聲堂に於

て、春季紅白勝負を舉行す。例により卒業生送別試合を兼ねたるを以て多數の出席者を見た。試合後部員一同記念の撮影をなし、それより直ちに送別茶話會を開く、森委員立ちて、送別の辭に兼て、今後我部員の益々奮起すべきを切言し、部長西川先生、また、一場の挨拶あり。之れに對して中村氏簡單に答ふる所ありたり。かくして和氣霽々の裡に散會せしは、夕陽すでに西に没するの頃なりき。

當日の試合は殊に壯烈を極めしが、今左に大要を記す。

紅軍 審判 高島 三段
白軍

大將二段 中村 政吉
副將初段 (内股) 川上 實男
初段 森 長四郎
石澤儀兵衛
大將 淺水成吉郎
二將 大津 武敏 (腕達)
二段 山崎 辰二 (崩裂)
小原 信夫



精勤者賞品授與

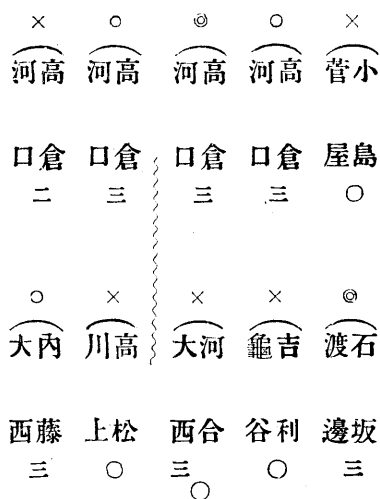
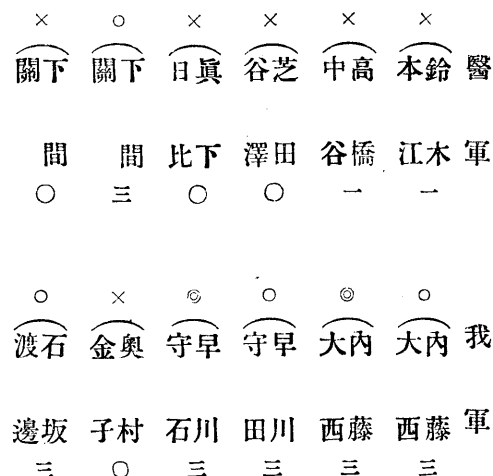
- 森 長四郎 (出席日數) 一一七、
- 仁科 武雄 一〇七、
- 淺水 成吉郎 一〇二、
- 山崎 辰二 九九、
- 石澤 儀兵衛 九六、

右五氏は本學年間の精勤者として、當部所定

の通り、各々柔道稽古衣一着宛を賞與せられたり。

庭球部報

對醫第二回對抗試合 本校コート 五月四日



雪に閉された北國も木の間をヒソヒソと訪る春風にいつしか褐色の芽が萌えだして叢消の雪が緑の若草に濃淡の綾を彩る頃となつた日光は日に日に温みを増して花曇りに曇る頃にはコートはすっかり乾ききつて去年の戦捷の榮を傷けまいとボールの唸りやカウントの聲やが尾山城下に楽しい勇ましい反響を起してきた、春を彩つた英が風のそよぎに翻々散り始めて、楓の若葉がサラサラと涼しい音に呟き始めては世

は春といふ衣を脱ぎすて、校庭のクローバが白
い花をつける初夏の五月となつた。

其の月の四日風はないで日は眞夏の様に照り
つけてた午後の二時赤白の幔幕にとりまかれた
コートに對醫のマッチが開始された昨秋の零敗
に無念の涙をのんだ醫軍は臥薪嘗膽四ヶ月の練
習に軍容大に調ひられたとの評高かつた。

先鋒 内藤組對鈴木組 敵よりまづ攻む我れ氣
勢昂らず實力以下の活動なりしかと三對一にて
勝つ。

高橋組とは段違の感ありて我まづ優待す

我軍の勇將早川組に對しては眞下組芝田組共に
龍車に向ふ蟻螂の如く、零敗し去る。

勝ちに乗じて奥村組意氣昂る、敵の副將下間組
大勢の非なるを見て、決死の覺悟凄まじ下間よ
くあたりて猛球鐵壘をも碎かんす勢なるに金子
凡失續出、零敗の止むなきに到る。

石坂組 代りたちて渡邊のブーレー下間組を
弄殺し去る小島組奮戦せしも勢既に我にあり。

大將高倉組軍容勇々しく駒を陣頭にすゝむ我れ
既に彼を讚美し措かざりしもの死屍算を亂した
る醫軍の爲めに氣を吐かんするものは實に兄等
也。

奇將吉利組 健闘せしかども彼の老猾に施す術
もなうして倒る、河合組又零敗す、我大將高松
組悠揚として勝に乗りたる敵に向ふ、敵の前衛
川口スマッシングに弱點あるをつけこみ高松巧
妙なるロビングを以て應戦す、川上のスマッシ
ング猛烈にしてよく高倉を壓迫せしかども時利
あらずして敗退す。

飛將内藤組 勝ち誇れる敵を物の數ともせず鐵
火の猛球抑技のロビング神に入りたる戦法に
て縦横無盡に馳突せば流石の高倉組も爲すに術
なく三對二にて敗退せり、醫軍再び戦ふて再び

敗退す敗は敗なれど軍容堂々負けて猶ほ其の勇
の稱すべきものあり、我れ勝ちしとはいひまた
敵に鬼將高倉のあるあり勝つて兜の緒を締めざ
れば噬臍猶及ばざるの悔あらん。

庭球部第八回大會

咲き誇つた花といふ花は悉く枝を辭したが、
緑に萌ゆる春の草はいよゝゝその色をますばか
りである。永らく冬眠を貪つた我北國の運動界
は、こゝに活動が目覺ましくなつて來て今やそ
の最も盛んな季節になつた。

五月十一日、我庭球部は第八回大會を本校グ
ラウンドに開催した。

張りまはした紅白の幕、はき清められたコー
トに白く鮮明にしたラインが、クローバーの緑
と配合して何ともいへぬいゝ氣持がする。更に
彌次の黄色い聲も交つてゲームは活氣づけられ
た。

當日は北國に稀なる日本晴、それに野球大會
や弓術大會があるので朝から集つて來る學生連
や軍人連が、非常に多くて廻りのベンチ、緑の
褥はこれらの人々に隙間もなく占められた。

九時半ゲームは開始せられた。日頃鍊れた腕
ほどあつて、戰士の活動は中々に目覺ましいも
のがあつた。今その番組勝敗を示せば左の通り
である。

勝 負

1	二(白井) 季吉	○(大橋) 備治
2	二(安達) 四郎	○(市橋) 勝二
3	二(東田) 精太郎	○(竹田) 義一
4	二(寺田) 正平	○(米澤) 菊二
5	二(堀川) 清介	○(南中) 恒三郎
6	二(布村) 繁造	○(田島) 太郎
7	二(山下) 繁造	○(中山) 督
8	二(香村) 泰助	○(谷口) 常一
9	二(石坂) 修	

6	三(松井友宗一)	一(阿部明正)	17	二(藤平在男)	○(足立秀郎)
7	二(清水良策)	○(武藤義平)	18	二(富岡素一)	一(佐々木由雄)
8	二(土肥善三)	一(吉田恪三)	19	二(西岡謙二)	○(東野市次郎)
9	三(太田正規)	一(伊佐早博)	20	二(齋藤修一)	一(牛込俊三)
10	三(松原賢治)	一(佐藤友一郎)	21	二(直江忠也)	二(佐次昌)
11	三(肥後誠一郎)	○(丹波吾朗)	22	二(小杉惠雄)	○(西村忠次)
12	二(八百谷照之助)	一(平岩健一)	23	二(山根寛次)	○(伊奈靖)
13	二(橋本榮雄)	○(矢野舜二)	24	二(北條敬太郎)	一(鳴澤寡愼)
14	三(高森卯太郎)	○(關野)	25	二(石澤儀兵衛)	一(本間)
15	二(渡邊信義)	一(饗庭光古)	26	二(田村稔)	一(鳴澤寡愼)
16	三(真繼俊一)	○(三上清美)	27	二(菅波又造)	一(細川英二)

以上三回ゲーム

三回ゲームが終つたのは午後二時頃であつた。直ちに對外試合にとりかゝつた。今日は七尾小松等からはるゝ若武者が出陣したのでゲームは更に面白かつた。(以下五回ゲーム)

小松(田代) (宮川)
來賓(中野) (永原)

宮川の敏捷なる戦ひ振と永原の正確なるジャレーに敵は頗る周章見る目も氣の毒な有様で、ミス續出して我劈頭敵を零敗せしむ。

小松(増谷) (林邊)
來賓(西出) (渡邊)

沈着なる林が思ふ通りに出すロビング、半ロビングには敵の後衛はいたづらに翻弄せらるゝばかり、前衛は案山子の如く衝立つたまゝの有様。加ふるに渡邊の正鵠なるスマッシングで敵は又もや零敗の危に遭はされた。林の今日の御手際は見上げたものであつた。

小中(花園) (黒川)
杉本 北

黒宮の悠々迫らざる、北川の敏捷機先を制せんとするモーションに敵は上り氣味にて打つた球は殆んどアプトして脆くも零敗した。

小中(齋藤) (奥村)
松島 金

空しく屍を曝らした戦友の仇を返さんどてか、敵は頑強に抵抗した。奥村のデスベレートな打球は屢々敵を悩ましたが、老練なる金子今日はどうしたわけかどんど當らず、一回目は敵に勝を譲つた。二回目には金子のストップ、ボーレー奏功して敵は零敗。三回目は齋藤のミス多く我こゝに二ゲームを得。敵はこゝを先途と奮闘しはじめた。金子奥村共にミスしてつひにゲームツーオールとなる熱烈なる彌次はコート的一角より起つた。双方共に自重してよく力めよく戦ひデュースを繰り返すこと數回、齋藤のアプトに

てつひに我勝つ。奥村組は敵を侮り過ぎたために、随分苦闘したが、段異ひはいふ必要なし。このゲームは一番力のはいつたゲームであつた。

商業 (中江) (塚小此木)

中江組も塚田組も共に大男揃ひ。悪口屋ぢやないが巨人ゲームの様であつた塚田のネバリに敵は一たまりもなく零敗した。

一中 (毛端) (今高松井)

毛利の小軀に今井の巨軀、コントラストは極めて妙であつた。彌次いよく盛なり。音に聞ゆる今井の熱球には敵も手古摺るだらうと思つたが、敵もさるもの軀こそ小なれ、一進一退、スタイル鮮かに打球頗る美事、今井の目の廻る様なサーブも時々成功したが、結局は毛利組の勝。急造の高松前衛ボールを打つこと兩三回全くの

後衛戦だつた。

七尾中 (岡府) (永齋藤)

齋藤は全く練習してゐないために、打球は正鵠を缺いた。永井の活動もあまり目覺ましくもなかつたため敵はいよく勢を逞うして遠來の珍客芽出度くメタルの恩賞に預かつたわけ。

七尾中 (加藤) (吉高松利)

加藤組の打球極めて巧妙、モーションも速く先づ本日出場の各中等學校選手中の白眉といふに躊躇しないが、吉利の魔球にはたとひ敵は奮戦力闘苦戦に苦戦を重ねたとはいへども到底及ぶべくもない。二回目の如き双方入り亂れての混戦デュースを繰返すこと八回にも及んで見物の手に汗を握らしめたが龍車に向ふ螳螂の悲しさ零敗を免かれたいけでも勿化の幸と諦むべきである。

二中 (上吉) (河合)

上田組缺席。好敵を逸した河合組の無念さ同情に堪へぬ。果して流星光底逸長蛇を吟せしや否や。

醫專 (芝田) (奥村)

このゲームは極めて平凡。芝田組の打球も人の目をひかないし、奥村組のミスも目につかなかつた。いつの間にやらゲームセットで芝田組の勝。

醫專 (鈴木) (内藤)

彌次が猛烈に起つた。鈴木組が出陣したのだ。いつもながら鈴木君が彌次の焦點になるのは些か御氣の毒だ。彼の名代の鐵砲球も新進の剛の者。内藤組に對しては何等の功もないと自覺したのか、今日はいやに、ネバッテ頗る沈着の體に

見受けた。内藤は強球家としてネバリやとして本校の中堅をなすもの、その緩急宜しきを得た球に敵辟易して打球のびず、加ふるに大西のストップボーレーやスマッシング奏功して敵果なく斃る。

一中 (中森) (石渡坂)

石坂のネバリさ加減といつたらとても本校でその右に出づる人はなからう。而もモーションを見せざること極めて妙で、突然前衛を衝いて功を奏すること屢。渡邊本日はたとひいつものやうに當らなかつたとはいへその鮮かなストップボーレーには敵施こす策を知らず中野森田共に相當は奮闘をついたけれども我に勝算歴々たり。敵零敗の憂目に遭ふ。

醫專 (下間) (早田川)

下間組は醫專の重鎮スタイル、モーション、打球

の巧妙三嘆に價する。前衛も中々の妙手だ。早川組も本校の重鎮。彼の正確なる熱球も守田の痛快なるスマッシングも今日はあまり成功せず。

二回目の如きデュース九回もつゞいて観者片唾をのみ手に汗を握つたが惜しい所で敗をとつた。敵はいよゝ機に乗じて猛襲を企てた。流石の早川組もつひに敗れた。敵の喜は如何許にや。奇しきは運命の神、兎角勝負は水物と知るべし。

警専(高倉口)(高松上)

高倉の老獺なる打球、川口の正確なる受球さすがは警専の御大將だと點頭させる。高松は早くも前衛の不得意の點を悟つてしきりに半ロビングを以て前衛を越え、川上また精悍なる打球を以て高倉を狼狽せしめたが、高倉の惡連の強き屢々窮地に陥りながらも、よく之に應じて窮鼠嚙猫的の打球功を奏してつひに彼勝つ。

遠足部報

木津探勝寶達登山一泊遠足

四月十九日(土曜)午後一時櫻花名残を惜みつつある金城の巷を後に三十名の一行は淺野川の翠坡を縫ひつゝ渡船場たる洲崎にて三隻の漁船を艀し順風に帆を孕ませて艦聲勇ましく河北の海を縦斷し上陸すれば時既に黄昏に近し。歩を進むるに従ひ村舍離落の間桃花の濃婉なる艷娟の粧を凝らし山翠滴らんとする間に一帯の紅霞を曳ける木津の桃林は宇野氣より横山に亙り只吾人をして詩囊の足らざるを怨ましむるのみ。仰げば盈月高く半天に懸り金風千里より吹來り此良宵を如何せむといひもあへず三里に近き坦

途と迂り過ぎて豫定の宿泊地上田村に着す。時に午後八時。一行は由緒ある古刹に招せられて一睡千金の淡き草枕を結ぶ。

四高遠足日和は常に昊天の與みし給ふ所なれば

辰口温泉一泊遠足

五月二十四日二十餘名の一行は鬱陶しき天候に明日を氣遣ひながらも常に自然と戦ひ風雨を征服せる一騎當千の面々なれば何かは恐るべきとて雀躍りして順路に就けり。六斗を過ぎてより石川平野暮れゆく春の興趣を擅にし高く雲雀を聞き低く早乙女の甲斐甲斐しく立働ける老嫗の早苗取るなど一入の感懷を覺えつゝ小徑を迂りては村舎に着き過ぎては又徑路に歩を求めつつ手取川邊なる山田洗田なる渡船場にて川を横

ばとて星高く清める空に明日の快晴を期待して翌朝ふと眼を覺ませばこは如何に小雨の降りつつあるを。不意撃を喰ひし面々は更に反抗的に勇氣百倍し辛うじて村舎の間に雨具を用意し恰かも百鬼夜行の態を爲し案内者に導かれて寶達山に登る。愈々登るに従ひ能登平野は脚下に連り日本海は一面に霧を起し所々殘雪の山溪に堆積するあり遠く瀧を流したる如きあり路傍にあるものは取りて吾人の渴を醫すべく懸て頂上に至る。流石は三千尺の丹崖なり越中礪波平野は眼前に横はり金城又指顧の間に在り胸宇自ら宏快となり高潔の氣象自ら養はる。雨は小止みとなり嶮峻なる下り路に草鞋を固め時餘にして

瓜生村に着し中食を終へ順路津幡驛に向ひ汽車に投じて金澤に着したるは午後五時頃なりき。

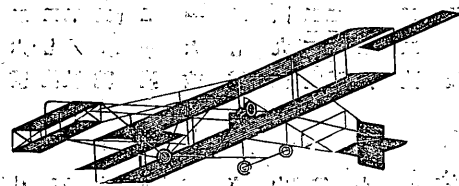
笑聲の絶えざるものありき。兼て紳士旅行を標の岩洩る清水に蘇生の思ひをなしたつ別所を過ぎ
榜せる如く道は僅か五里に過ぎずして吾人の疲野田山指して歸路を急ぐ程に午後五時過ぎに既
勞を醫すべく靈驗尊かなる浴湯あり常の草枕にに草鞋を解きたり。
似もやらず十分の歡待を受け茶菓に座興を添へ因みに、本學年は寄宿舎との連絡を十分保つ
つゝ物語りに時を移して床に入る。夜一同深き能はずして止み加ふるに遠足を催す毎に種々の
眠りに入り華胥に遊べる時不意に室を訪ぬる者會合などの衝突避くべくもあらず彼是と大勢の
ありこれ佐倉君の暗夜を探りて一行を追ひ來り一行を得る活動を開始し能はざりしを怨む。來
しなりき。

翌日手取川に沿ひつゝ里餘にして鶴來町に到へ熱誠ある氣鋭の健兒の愈々草鞋がけに自然の
着し或ひは手取の流に拔手を切つて競ふ遊び手大と親み心身の壯健を圖り誰しも無意味に費し
あり或ひは白山比咩神社に叩頭く者あり一同は去らむとするの土曜、日曜を最も有效なる意味
金劔神社に勢揃ひして案内者に従ひて山路を辿ある本部の催に加はりて自己の趣味と抱負との
りつ下りつ倉ヶ嶽に向ふ。既にして校長等一行犠牲たらしめ給はんことを。

の一行は天地の富を極め菓子を食べ蜜柑に舌を
濕し裕々乎として路を難きに取り住吉村に出で
高く照りつゝ直射する太陽の光を浴びては溪間
寄贈書目
金澤醫學專門學校十全會
神戶高等商業學校學友會
十全會雜誌 每號
學友會報 每號

尚志會雜誌	每號	第二高等學校尚志會	華陽	五四號	岐阜中學校華陽會
同窓會雜誌	一一號	錦城中學校同窓會	桃	一一號	大阪高等商業桃皇會
嶽水會雜誌	五二號	第三高等學校嶽水會	一橋會雜誌	每號	東京高等商業一橋會
輔仁會雜誌	八八號	學習院輔仁會	校友會雜誌	二〇號	廣島高等師範校友會
校友會誌	一二號	金澤商業學校校友會	學友會雜誌	二六號	札幌中學校學友會
七生	二一號	杵築中學校七生會	學友會雜誌	二七號	石川縣師範學校學友會
水曜會誌	二卷一號	京都理工科大學水曜會	校友會雜誌	二號	米澤高等工業校友會
六條學報	每號	佛教大學壬寅會	學友會雜誌	二一號	東京第三中學校學友會
校友會雜誌	四〇號	千葉中學校校友會	同窓會雜誌	一六號	高知第一中學校同窓會
校友會雜誌	四一號	石川縣立工業學校校友會	校友會雜誌	二七號	京北中學校校友會
校友會雜誌	一八號	名古屋高等工業校友會	學友會報	四九號	山口高等商業學友會
校友會雜誌	七號	金澤第二中學校校友會	校友會雜誌	二二三號	第一高等學校校友會
和同會雜誌	一四號	長岡中學校和同會	志	一二號	小松中學校校友會
校友會雜誌	五二號	濱松中學校校友會	修	二二號	高田中學校修養會
校友會雜誌	三八號	三重縣第一中學校校友會	之餘會雜誌	八號	七尾中學校之餘會
校友會雜誌	四七號	麻布中學校校友會	藥	三二號	大垣中學校校友會
校友會雜誌	四〇號	第八高等學校校友會	校友會雜誌	三五號	第六高等學校校友會
校友會誌	三七號	東京高等師範校友會	鯉	二二號	廣島中學校校友會
校友會雜誌	三五號	京華中學校校友會	學友會雜誌	二七號	松江中學校學友會

金澤第一中學校校友會
第五高等學校龍南會
延岡中學校校友會
魚津中學校學友會
彥根中學校校友會
德山中學校校友會
第七高等學校學友會
飯田中學校校友會
盛岡高等農林校友會
福岡縣中學明善校矯々會
柏原中學校校友會
京都文科大學以文會
東京第四中學校校友會



投書心得

一 投書は本會原稿用紙に限る
一 長文と雖も全文を寄贈せされは掲載せず
一 雜誌上には雅號のみを記載するを許せども姓名は必ず編輯委員まで御報道あるべし
一 如何なる種類の投稿にても宜しされど或は政治を論じ或は徳義に背くものは一切掲載せず

大正二年六月二十四日印刷
大正二年六月三十日發行

(非賣品)

編輯兼發行者

吉村政行

印
刷
者

生 沼 倍 男

印
刷
所

明治印刷株式會社

發行所

第四高等學校北辰會

